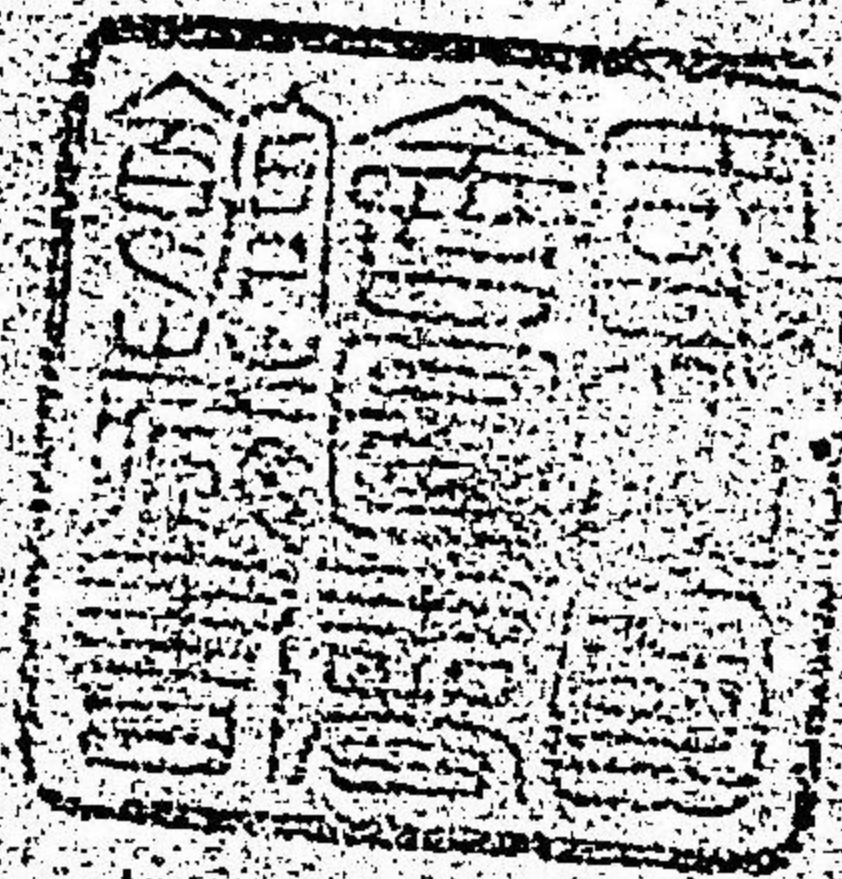


281.44
H762e



212265



越前人物志 中卷

釋門

越泰澄



越前三陸
村に十羽
石湯あり
存水す

道昭の人は
相宗の人は
半白の人は
朝入の人は
國朝の人は
始に火後我

越の大德泰澄大師は、三神氏足羽郡麻生津の人父を安角と云母は伊野氏なり、母白玉懐に入ると夢みて孕み、白鳳十一年六月十一日泰澄を産む、時に白雪降り屋上に積ること寸餘、五六歳にいたり他の兒童と遊ばず、時に泥土を以て佛像を作り或は草木を採りて堂宇の形を爲す、花を手向け水を捧げ以て娛戯とす、持統天皇六年道昭和尙越前を遊化し適ま三神氏に宿泊し兒童の頭に圓光ありて寶蓋を覆ふものを見る、傍人之を觀ことを得ず、驚て父母に向ひ此兒神童なりと告ぐ、其後殊に大切に養育せしが十一歳に至り、毎夜外出す、父怪み長男安方をして追跡せしむ、往くこと數里、遂に丹生郡越知山に登り巖洞中に入る、之を窺ふ中に

釋門

臥行者の
越前山に
越前山に
越前山に
越前山に

ては禮拜百遍聲高く十一面觀世音神變不思議者と唱へ了て又更に峰頂に上る、
安方その峻岨の爲に登ること能はず依て彼洞中に一宿し黎明家に歸る父に報
じて未だ履を脱ざるに兒歸る後越知山中に棲居して苦修練行自ら薙髮して比
丘の姿となる藤の皮を衣とし松の葉を喰ひ修懺年を重ね自ら智解を發得して
自然に密乗を感得す大寶二年小沙彌あり能登の鳥より來り謁す澄笑を含んで
曰く相待こと久し宜しく給使す可しと鉢多羅を付して守護せしむ澄晝夜風雨
と雖も行道禮讚其苦行人力の及ぶ所に非ず沙彌亦影の如く付添て暫くも離れ
ず常に雪上に臥す因て名づけて臥行者と云客比丘來り寓す臥は怠倦の稱何ぞ
行者と言べきやと時に臥し乍ら首を擧て答て曰く行に二種あり身行と心行子
の論ずる所は身行なり我は心行を修す八苦の寒風に當て罪障の積雪に臥す阿
字の太空を仰て大日の光照を見る菩提心を淨うして觀慧相應じて愈増進す豈
心行の微赴に非ずや客聞て感歎す此沙彌もと子業なし忽ち深旨を吐く人以て
異とす神部淨定と云者あり羽州の官祖船の船師なり臥行者の奇行を嘆服して
越知山に入り澄に事ふ菓を採り薪を拾ふ百役倦まず淨定行者と稱す淨定は身
行者なり沙彌は心行者なり養老六年元正帝不豫あり醫巫其効なし上侍臣に語

白山源
ノ山源
ノ山源
ノ山源
ノ山源

り玉ふ朕聞く越に大徳あり神異不測病恐くは渠を待んと澄に宣して都に越か
しむ隨ふもの淨定已に脯時宮に入り定を顧みて曰く三鉢杵山室にあり急ぎ採
り來れと定山に還りて杵を採り黄昏澄に授く王公以下嘆服せざるはなし澄錦
蓐に近づき手づから三鉢杵を把り玉體に擬す病即ち癒ゆ天平八年天下痘瘡流
行し死者勝て計ふ可からず上澄に勅して十一面觀音法を修して之を攘はしむ
數日ならずして息む古志郡國上山寺に一の檀信塔婆を造る落成の日雷電之を
擊破す再び造るに亦斯の如し澄之を聞て語て曰く慮と爲す莫れ我加助せんと
依て又造立す澄則ち塔傍に坐して法華を誦す怪事なし澄越知峯に在り常に白
山を望て曰く彼雪岳必ず神靈あらんと養老元年登山す果して妙理大菩薩を感
ず此嶺に居て苦修益勤む神異彌よ著はる居ること三年臥淨定の二行者亦隨ふ
四年に及んで苦行の輩相尋ね來つて漸く多衆となる天平寶字二年越知山に歸
り大谷仙願に居る其山三鉢杵に似たり以て靈域と爲す初め大寶二年文武帝勅
して澄を以て鎮護國家の法師と爲す養老年中の法効を以て擯んじて供奉と爲
し神融禪師の號を賜ふ授くるに禪師位を以てす天平の法効大和尚位を授けら
れ泰證と改む即ち奏して曰く願くは證を以て澄と作さんと蓋し文諱を忘れざ

泰澄則ち開
五山則ち開
知山則ち開
文珠山則ち
野山則ち開
山是なり
生大谷寺
村大谷寺
東大谷寺
九重石
塔の石

る也和安角澄角上聞乃ち泰澄和尚と號を賜ふ澄落髮して俗呼んで越の大徳と呼ぶ是に於て泰澄を以て名とす先に神龜二年行基法師白山に登る澄に見へて微笑舊識の如し白山の靈應を問ふ澄詳かに語る基感嘆して曰く元正皇帝神融と號を賜ふ亦故ある哉我年五十七來路難多し嶮岨を憚らず來つて勝地を踏み幸に神化を聞く吾心足れりされど再び遇ふとは西土にあらん願くば盟を忘る勿れと歎察にして去る神護景雲元年二月澄書を以て僕射吉備公に與へ帝に辭して曰く吾特に西方に還らんとす願くば淑情を佛乘に留め玉へと公以聞す帝哀歎親から震筆を灌て澄に答へ玉ふ澄御墨を得て其徒に誠しめ謹んで高架に置かしむ三月十八日詰跣跣坐定印して化す年八十六頂上神光を放つ山谷草木みな金色に見ゆと云門人遺骨を石函に納む澄平生時あつて頭上金光を現す宿疾の人鉢飯を喰へば癒さるはなし其他靈異多かりき(元亨釋書十五)

〔越前國繪圖記〕寫本

泰澄母墓 大野郡北袋郷下毛屋村の坤に泰澄大師の先妣墓所之由石塔三つあり一は七重にて七尺あり二に三尺宛あり先妣の出所は隣村伊野村の由(越前名勝志)猪野村伊野原今は伊野村と云平泉寺西南の麓菩提林の下り口なり泰澄の

御母の在所なり



越知山上發掘佛像(實大厚凡二三歩里俗天佛又五佛と云)

傳曰

泰澄大師作

玉露堂所藏

〔靈應山平泉寺大緣起〕

永享六年甲寅妙法院宮二品法親王天文六丁酉黃鐘聖院充海筆

夫越前國大野郡靈應山平泉寺者人王四十四代元正天皇因勅願泰澄大師開闢靈場也師初在越知峯常妙左眼望白山曰彼雪嶺必有靈神吾當登彼乞靈驗靈龜二年丙辰夢妙相端嚴天女出紫雲之中告曰靈感時至蚤可尋來矣大師信感銘肝依之養老元年四月朔日當山麓大野隈管川東來伊野原專心持誦爾時前所夢天女現身曰此地者大徳之母產穢之所非結界地也從是當東方有林泉吾常遊止所也大徳蚤移彼言已形隱後大師此地營一社稱大師彌歡喜不斜急趣東天龍輿瑞雲山神現形明神之也叢林亦顯喜悅色于今此道傳名菩提林行程十丁即後石

釋門

必爲善
提因是
以名曰
菩提林

一極惡深重一自夫與者隱森物凄松吹風之響嘯梢鳥音欣淨厭穢增思尙奧深尋入
實有清淨林泉今平泉手洗池是也大師於此所日夜放大音聲一心持念應其所念
哉前天女亦現靈質告命曰我真雖在天嶺恒遊此林上護一人下撫萬民此林者吾
爲中居大德往見之言已尊容乃隱當山御手洗池號影向石者其時天女出現之靈
迹也中宮本社妙理大權現之神像其時現身大師自採斧一刀七禮恭敬尊重彫刻
靈像也於此養老元年丁巳六年十八日遂登白山天嶺拜三所權現真身蒙種種靈
驗後入轉法輪窟苦修已垂一千日當此時大師之母公伊野氏在故鄉愛念不忍斷
腸獨凌雲間求澄之在所遙蹊溪谷可四里早松至岩其間危峻雖苦
行者或艱况女人乎然愛慕無倦探操藤葛欲登岩上款奔雷虬岩壁開裂戰慄踣
地氣將絕大師在絕頂知乍假神威力如鷹隼搏雲直來巖下共相看且喜且悲示母
曰夫天嶺去此不遠神靈遊戲諸天影降中道世界結界之地自此上五隙汚穢女質
不能至耳早可還舊里云云母公或嘆或愁大師一符與母曰此是權現所授我靈符
女人禪定曼荼羅即身成佛之印文也深信不弛則鴻福不虛損現世生息災延命未
來必得往安養國仰願敬可受持母公感淚霑袖歡喜充胸欣然歸故鄉日夜渴仰深
思而恭敬尊重百年全壽臨終正念即往安樂之遂素懷廟所今尙當山麓伊野鄉現

存大師亦爲末代女人曼荼羅摸刻銅鐵子今在大師坊寶庫印施是也每歲三月十
八日七月十
六日於伊野御廟
大施餼鬼執行斯同六年壬戌秋就天皇御惱大師降勅宣令加持即疾平復之玉體加持
今結
坊寶庫在天師天威不淺諱賜神融授以禪師位亦天嶺起立三所寶殿麓中宮及伽藍僧坊
御造營大野一郡喜捨朝貢寄附神領畢大師倩思既大集經中說日本神國是靈山
之鎮守又說平泉涌出神宮道文大聖金口所說如合符節然者即可號靈應山平泉
寺下略

園成寺康濟

權律師法橋康濟姓は紀氏定心院寺門長吏十四禪師に補せられ三昧和尚と號す
光定の入室智證大師の門人なり敦賀の人寛平三年五月二十二日大師を拜して
阿闍梨位灌頂を受く十二月三日勅して法橋上人の位を授く智證の徒法橋是を
以て始と爲す六年秋八月寺門長吏に補せられ九月座主に任す七年十月内供奉
を賜ふ九年五月八日權律師に任す此任また初例なり十月十日三部の職位を増
命和尚に授く維摩の講師を勤む昌泰二年二月八日寂す七十三歳

〔寺門傳記補錄〕卷十三

天台座主
に任す

權律師法橋康濟三昧院第四世康濟姓紀氏越前國敦賀郡人光定入室大師門人
 補定心院十四禪師號三昧和尚寛平三年五月二十二日拜大師受阿闍梨位灌頂
 今年十二月二日教授法橋上人位證徒法橋是爲始焉六年秋八月補長吏治同九
 月十五日任座主治七年十月賜内供奉九年五月八日任權律師證徒此任亦是初
 例同十月十日授三部職位於增命和尚受後今歲勤維摩會講師昌泰二年二月八
 日示寂年七十三

興福寺基繼

昌海大德に從ひて
 其學僧は
 識に精
 閑く阿闍
 閑居す
 子は基
 一人は
 のみ

基繼は奈良法相宗興福寺の僧なり基繼越前の人なり廣岡の昌海大德に從ひて
 法相を學ぶ延喜九年維摩會講師となり尋て興福寺に住す承平元年二月十六日
 寂す(本朝高僧傳)

永平寺道元

御内記に
 父近衛
 大臣東
 大將
 大位
 一久
 大從

吉田郡志比村曹洞宗大本山永平寺道元禪師は村上天皇の裔内大臣源通親の子
 なり其母孕める時空中聲ありてこれ五百年來の聖人なり法の爲に世を濟ぶが
 故に來つて胎を托すと生れて岐嶷常童に類せず相者見て駭嘆して曰く此兒骨

通親公
 は攝政
 一政大
 公の位
 女房

明治十二年
 十一月二十
 日
 陽師承
 益大承
 下益師承
 仰出さ

榮西釋師
 因疑師
 圓氷解

宋國に入

相奇秀七處平滿にして眼に重瞳あり凡流に非ず必ず人天の師たるべし只恐る
 父母天年を全ふせざるのみと四歳唐の李嶠百詠を讀み七歳毛詩左傳を讀む凡
 そ一切の經史を閱するに師訓によらず能通曉す人以て神童とす八歳母を亡ふ
 偶々常に香煙の乍にして生し乍に滅するを觀て忽ち世間の無常なるを悟り九
 歳く舎論を閱し畧々其義に通す攝政藤原師家乞て子とせんとすれども從はず
 十三叡山の良觀法師に身を投ず其故を問はる答て我母歿するに及び我に俗を
 棄よと願くば其遺命に隨はんとす顯喜んで納る建保元年四月横川横首楞嚴院に
 就て天台座主公圓僧正に禮し落髮す年十四尋て登壇受具して經論を究む時に
 疑義を生し三井寺公胤僧正觀心に精しく往て法身自性の旨を問ふ曰く此事を
 賢さんと欲せば佛心宗に問へと乃ち建仁寺の榮西明庵禪師に參して更衣を許
 さる榮西遷化して明全禪師に依り菩薩戒を受け大藏經を閱すること二回貞應
 二年廿四にして明全と共に宋國に入り明州の界に抵る實に寧宗の嘉定十六年
 なり太白山に登り無際了派禪師に謁す其外國人たるを以て位新戒に列す可か
 ず朝廷に上表して之を争ふ朝議國に大小あるを以て別たると故に上表三回に
 及び先受戒者先にあり後受戒者後にあり何ぞ國の大小を以て之を別たんやと

上表して
僧臘の亂
弊を矯正
す

如淨禪師
に謁す

梵網經を引て云ふ、依て朝廷和僧のいふことを理ありとし、是に於て僧臘の席次に依らしむ、其事朝野に聞ゆ、明年辭し去り、諸方に遊び、浙翁如琰禪師に參見し、又去て台州小翠巖に造り、思卓禪師に見ゆ、平田の萬年寺元爾和尚に謁す、唯一宗月堂無象の諸老宿に歷參す、咸機縁あり、將に日本へ歸らんとす、老叢と云ふ僧あり、天下一等宗匠長翁如淨和尚天童に住す、益を往て見へざると、之を聞き欣然として再び太白山に登り相見ゆ、如淨禪師禮待甚だ渥し、宗端傍に在り、怪て問ふ、曰く、昨夜洞山悟本大師の至るを夢む、恐くは其再來ならんと、道元曰く、幼より本國に在て菩提心を發す諸知識に參し、經論を繙閱すれども、徒に名相に滞りて、大法を明にせず、後大宋に入り、諸尊宿に見へて、臨濟の宗を聞く事を得たり、此法席に造るを得たる實に多生の幸願くば、慈悲不時の入室法要を咨問するを聽すや、蓋し生死事大、時人を待ざる也と、淨其至誠を憐みて、之を許す、茲に於て晝夜精勤す、一夜淨巡堂す、一僧の睡れるを見て責て云ふ、參禪は身心脱落を要す、何ぞ睡れるや、道元傍より之を聞て、忽ち契悟す、方丈に入り、香を焼く、淨曰く、燒香の事作麼生、曰く、身心脱落し來る、淨曰く、身心脱落々々、身心と、曰く、這箇是暫時の技倆、和尚亂に某甲を印すること莫れ、淨曰く、我不亂、印汝師曰、如何、不亂、印底淨曰、脱落身心と、

猛虎に遇ふ

圖書を授かる

一夜碧巖

歸朝深草
に菴居す

時に福州廣平侍者曰く、外國の人、恁麼地なるを得る、細事に非すと、淨曰く、此中幾らか拳頭を喫し、脱落雍容し、又霹靂すと、是に由て服勤すると、三載、洞上の道を盡し得たり、禪師偶々江西に往て、暮に荒村に宿す、一虎忽ち馳來るに、遇ふ直に柱杖を擲向す、虎遂に怖れて走る、黎明一童來りて云ふ、當に本國に歸つて、無勝幢を懸て、祖道を唱ふべし、此に滞まること莫れと告ぐ、問誰なるや、我は韋將軍なりと言了て、没す、寶慶丁亥秋、將に歸朝せんとして告別す、淨延て入室せしめ付するに、芙蓉措祖の法衣、寶鏡三昧、五位顯訣及び自贊の頂相等を以てす、曰く、爾異域の人なるを以て、此れ等の物を授けて、法の信と爲す、國に歸り、化を布て、人天を利濟せよ、城隍聚落に住する莫れ、國王大臣に親近すること莫れ、須らく深山幽谷に居し、一箇半箇を接得して、吾宗を斷絶せしむる勿れと、又薄暮に佛果の碧巖を得て、之を膽寫す、鷄鳴の後、忽ち白衣の老翁あり來て、揮灑を資んと云ふ、即ち之を許す、未だ曉に到らず、書了る、則筆を投じて、其姓名を問へば、日域白山明神也とて、歛然として見え、已にして、船を發す、須臾、神人あり、船舷に現れて曰く、我は是招寶七郎大權修理菩薩なり、師の還るを知り、隨ふて正法を護らむ、便ち禮を爲して、没す、此年九月、肥の河尻に着船し、夫より、建仁寺に寓す、尋て深草に菴居す、天福癸巳、春、弘誓

道元禪師
越前波野
來師
請重多
難の怒
る

永平寺建
つ

院正覺等宇治に地を換て禪苑を構營す、觀音導利院與聖寶林寺と名づく、師を請して開山第一世と爲す、詔ありて、額を賜り、嘉禎丙申十月十五日進院上堂す、四方の玄學風を望んで來り參し、王公宰臣も亦袂接して謁す、時に波多野出雲守義重、勝地を越前の志比に得て禪師を請す、抵れば則ち重巒疊嶂甚だ意に契ふ、寛元二年義重此に大佛寺を創建して開堂せしむ、其叢規は一に天童山に則とる、時に山神の出現に因り山を吉祥と號す、四年夏大佛寺を改めて永平寺と云、蓋し皇室及び國家の永遠治平永久平を祝禱祈願するの意を以て寺號を命したるなり、上堂、獨存無依脫落全真混然、明歷歷於萬象中、卓爾活鱖鱖於不疑之地、如月印水而無痕、似風行空而不動、恁麼委悉得去、陋巷不騎金色、馬廻途卻著破襦衫、上堂、大鈞運載、化機絲毫不動、石頭全提、心印文彩已彰、到這田地、佛眼覷不及、迷悟莫能該、擧鼻孔是、山僧、眼睛山僧、眼睛是、擧鼻孔所以、隔山見烟、便知是火、隔牆見角、定是牛、擧拂子曰、只這箇一毫、不隔諸人畢竟喚作甚麼、天曉報來、山鳥語陽春、消息早梅香、上堂、擧五臺山頂雲蒸飯、佛殿階前狗尿、天利竿頭上煎、餛子三箇、獼猴夜簸錢、師云、若向這裏、領覽得、驪龍到處興雲雨、其或未然、且待池開臘月蓮、參上堂、永平有時、門庭施設、只要諸人神通遊戲、有時、奔逸絕塵、只要諸人信手拈得、忽有人出來、道向上事作麼、但向道、曉風

朝廷より
紫衣を賜り
すはるを
辭
北條時頼
子迎へて弟
となる

洗、昏煙淨隱、青山展、畫圖、後嵯峨帝師の道譽を聞召て紫衣並に佛法の號を賜ふ、峻辭すれども許されず、之を高閣に奉じて體に挂ず、偈に曰く、永平雖谷淺、勅命重、重重却被猿鶴笑、紫衣一老翁と、帝聞召て加嘆したまふ、寶元年鎌倉副元帥平時頼迎へて營内に留め、則弟子の禮を執り、旦夕道を問ひ菩薩大戒を受く、園城の僚屬駢闐として來り謁し化を稟く、時頼新に伽藍を建て師を請す、師堅謝して就かず、宋の隆蘭溪會々來朝して博多に寓し、書を致す、聞くと、近來深山窮谷に遷り此の道を以て後昆に開示して、朱門紫戶を友と爲さざると、上古の風規を存することを見る可し、人をして舉企已まざらしむるの語あり、翌年春辭して越に歸る時に北條時頼六條の堡を以て食輪に充つ受られず、時に永平の玄明首座鎌倉にあり、其越に還るに逮て時頼寄附の帖を囑す、明太だ悦んで山に歸り、乃ち之を出して衆中に誇耀す、蓋し常住の豐饒を樂しむなり、師之を聞て曰く、嗟乎者、淡一片の利心入、識田中に落ち、油の麵に入るが如し、永劫にも除す可からず、恐くば辱を大方に貽ん、即ち接して山を趁出し、其榻を撤し、榻下の土を除くこと七尺、蓋し穢を去ると、師の嚴令多く是類也、是に由て諸方操行を慕て、咸古佛を以て稱す、建長元年己酉羅漢供會を修す、時に應真光を放て、長松の上に降臨す、人皆未曾有と歎す、五

十偽日。五
照打第一
野跳。商
破大。一
噴身。二
黄泉。三
活。四
活。五

年夏微恙を示す王公親族使を遣して之を迎ふ則ち許す、初め化を王都に開く、復化を此に示さんと欲するなり、八月駕を命じて洛に入り、西洞院に館す、緇素瞻禮虚暑なく機に随つて化を設く、誠勸激切なり、上皇官醫をして病を眎せしむ、起居常の如し、廿八日夜沐浴して衣を整ひ偽を書し筆を投して示化す、即ち寵を留ること三日、神色生るが如し、異香室に満つ、圍維して舍利を得るもの算なし、上足懷舛靈骨を奉して永平寺に歸葬す、塔を承陽と曰ふ、正治二年庚申正月二日を以て生れ年五十四、僧臘四十一、嘗て正法眼藏叢林清規等の書を著す、

承陽大師自畫自贊肖像



認是爲眞眞爲甚
是舉是爲非爲甚待眞
恁麼見得掛空何
是身牆壁未全心
道元自題

永平寺藏幅

「承陽大師御傳記」

明治三十四年六月
弘津三著

暖皮肉活骨髓

大師一生の道業、踵を佛祖の古蹤に接し、毫も今時の消息に墮せず、其の高風清致は、既に千百の一二を髣髴したり、因つて今又其の詞藻中の數章を記し、以て道業の餘韻を發すべし、而して是等は皆物に感じ事に觸れて、自然に毫端に溢れたるものにして、固より推敲彫琢せられしものに非ず、然れども其の推敲彫琢なき所、實に天真の妙趣ありて、一吟一詠皆是暖皮肉なり、又是活骨髓なり、誠に最尊最勝なり、久在人間、無愛惜、文章筆硯、既拋來、看花聞鳥風情少、一任時人笑、不才是大師の風流吟咏を放擲せられしことを自首したまひしものなり、世の風雅の道を以て、大師を長短するものは、終に其皮肉骨髓を認識すること能はざるべし、

題世尊出山相 二首

腰頭帶箇風流袋、奪得松風且出内、更賣臘梅拈一枝、往來天下圖人貸、
六年苦行一坐成、覺替地萬劫笑端、是什麼破木杓、

洞山因僧問、時節恁麼熱、向甚處回避、山曰、向寒熱不到處回避、僧曰、作麼生是寒

熱不到處、山曰、寒時寒殺、閻黎熱時熱殺、閻黎

寒熱來時撒手行、眉毛落盡喪虛名、太平本是將軍致、莫使將軍見太平、

自贊

老梅樹老梅樹、長養技々葉々春、兀地一機歷々、莊嚴三昧塵々、拄杖頭全無節目、蒲團上有十方身、弄鳳毛而捉得天童鼻孔、入虎穴而一笑大休口唇、住山頑石、叢林陳人、

示衆云、佛々祖々、先發誓願濟度衆生、而拔苦與樂、乃家風也、頌曰

砥箇是家風、明々而不窮、山高久見月、雲靜先知空、撒手懸崖下、分身萬像中、任他登鳥道、自愛是神通、

山居 十五首 錄三

幾悅山居尤寂寞、因斯常讀法華經、專精樹下何憎愛、月色可看雨可聽、西來祖道我傳東、鈞月耕雲慕古風、世俗紅塵飛不到、深山雪夜草庵中、前樓後閣玲瓏起、峰頂浮圖六七層、月冷風高箇時節、衣傳半夜坐禪僧、

不立文字

いひ捨しその言の葉の外なれば筆にも跡をとめさりけり

應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たえつされとも道はわすれさりけり

坐禪

守るともあもはすなから小山田のいたつらならぬ僧都なりけり、

同

濁りなき心の水にすむ月は波もくたけて光とそなる

草庵難詠

春風にわか言の葉のちりけるを花の歌とや人の見るらむ

無常

朝日まつ草葉の露のほとなきにいそきな立そ野邊の秋風

同

世の中はなにたとへん水鳥のはしふる露にやとる月影

山居

立よりてかけもうつさし溪川のなかれて世にし出んとおもへは

道業の餘韻大抵此くの如し、而して其の偈頌詠歌の全豹は、載せて永平廣録と傘

松道詠とに在り、學道の君子、二書に由りて之を參究するときは、必ず佛果菩提の勝因を得べし(下略)

金剛峯寺蓮眼

蓮眼字は禪智越前の人なり、高野山金剛峯寺の僧なり、瑜伽軌を習ひ、大和に至りて圓照に謁して戒壇院に於て戒律を受け、鷲尾山に密藏を開く、(本朝高僧傳)

寶慶寺寂圓

寂圓は大野郡寶慶寺村、曹洞宗寶慶寺の開山なりもと宋國の人、安貞元年永平寺開山道元禪師に従ひ、興聖永平に侍して、禪師滅後孤雲和尚に依て深造あり、野州刺史藤氏越前に就て新に寶慶寺を建て聘して開山第一世とす、初て其處にいたる山の鬱然として深秀なるを見て意に契ふ、遂に居す、幾もなく雲衲來集す、人情に近つかず垂誠を事とせず、又丈室に端居して淵默日を竟ふ、正安元年己亥九月十三日寂を示す、義雲師の眞に贊して曰く、全相之妙通身之照奪得洞上頂上眼睛、透徹吉祥堂奥心要據於塵々三味座狀暢於刹々常說曲調拈弄拂柄分決及兒孫打

同師及淨寂
圓師の如に
禪師の頭陀
像の頭陀又
牛袋の頭陀
袋の頭陀又
臥坐の頭陀
遺物をなす
しなす

雲打雨兮好一場笑と

(日本洞上聯燈錄抄)

〔越前名勝志〕

寫本
大野郡部

寶慶寺曹洞宗本、本より南方二里許山中に在り、開基は寂圓和尚なり、永平寺道元和尙の弟子なり、此寺の開山堂の天井は二間四方の一枚板なり、幡龍のけぼりあり、龍の鬚は四五寸も彫はなつてあり、此天井板、寺の重寶の内なりと云々、私曰道元和尙宋國より歸朝の時、木の道の工立之と云者渡れりと、此天井板の彫かの立之が彫たりと云説あり、永平寺村の大工は立之が子孫にて立之を今は名字にして立之と唱るなり、

永平寺義介

徹通義介は、越前足羽縣の人、曹洞宗永平寺第三世也、姓藤原氏大將軍利仁の後裔なり、承久元年二月二日生る、十三歳にして同國の波著寺懷鑑和尚の下に投して得度し、比叡山に登りて具足戒を受く、楞嚴の深旨を究め兼ねて淨土業を修す、仁治二年興聖寺に登りて道元禪師に謁す、禪師上堂に曰ふ、是法住法位世間相常住、春色百花紅、鷓鴣柳上鳴、と師聞きて省る所あり、之より益參究し、後禪師に隨從し

道元禪師
に謁す

天童山に
祖塔を禮す

て永平寺に遷り典座となり、次に監寺となり晝は衆事を辨し夜は禪座して旦に達す禪師示寂後懷舛に依附し遂に其法嗣となる、中舛謂つて曰く汝先師所得の處に於て其旨を會す先師那伽定中必ず汝が爲に證を作さむと又曰ふ佛法の中人を得ること最も難し若し人を得ずんば佛種を斷滅する罪を免れず縱使人を得るも而も其器にあらずんばこの罪を免れず此事先聖の難とする所況やそれ今をや吾汝を得て已に此罪を免る今日死すともまた遺恨なしと即ち一門の宗旨建立を囑す義介囑を受けて退き後宋に渡らむとして如意輪虚空藏二大像を刻し誓つて曰ふ若し南遊して歸へり來らば嚴飾せむと正元元年に出航直に天童山に登り祖塔を禮し後諸老を歴訊し四年にして歸り永平寺に懷舛を省す文永四年命を禀て永平寺に住す藤原相釋院居士藤左金吾波多野衆と同く疏見す師を請て開堂す略中波多野懷舛の囑を禀けて堅く師法を護す加賀大乘寺澄海阿闍梨師に就きて禪要を聞きて師事す擅越藤原家尙と俱に謀り寺を改めて禪宗となし師を請して開山となす延慶二年九月十四日疾に罹り寂す壽九十一、遺偈に曰く七頭八倒九十二年、蘆花覆雪午夜月圓と塔を建て、靈骨を收む嘗て異人あり白山の神なりと云ひ師の佛戒を受け其求むる所を問ふ曰く此山良所

懷に愜ふ唯水を闕くと神諾して去る翌日寺の南方一泉を出す名けて白山水と云ふ
(日本洞上聯燈錄)

誠照寺如覺

後二條天皇
賜給白布

如覺上人は鯖江町眞宗誠照寺派本山第三世なり父名道性宗祖見眞大師の男なり弘長二年十一月道性と共に宗祖に面謁し宗義を面授し眞影を屬せらる弘安元年戊寅外戚上野の領主波多野景之館地を寄附す因て堂宇再建の作事を始む同二年秋堂宇落成す嘉元三年乙巳三月十九日後二條天皇住職の給旨を賜ふ勅に依て如覺黒衣に緋紋白の五條袈裟を著用して參内し清涼殿に於て天顔を拜し奉り天皇の宗義を親問したまふに對し宗祖相承の宗義を奏答す陛下叡威特に深く寺號を賜ひ宜く天長地久を祈るべき旨の勅宣を下し並に蜀紅錦九條袈裟中將姫織製の藕絲曼陀羅及髮繡六字名號を賜ふ應長元年辛寅五月十九日遷化す年六十二

證誠寺淨如

大綱の大徳

眞宗山元派本山今立郡横越村證誠寺の第三世淨如上人は、嘉禎二年十二月二日生る、宗祖見眞大師の二男善鸞の長男なり、俗に大綱の大徳と稱せらる年十二上洛して祖父に常隨給仕して其教を受く、見眞遷化の後遺骨を奉し今立郡水落の地籍山元に歸住し教を布く、其徳 叡聞に達し 後二條天皇の勅に依り參内して 天顔を拜す、此時山元山護念院證誠寺の震筆勅額を賜はり勅願所の宣下を蒙る、後に遊化の志篤きにより、隱退して諸國を經廻し、奥州大綱於て寂す、時に應長元年九月五日、年七十六

因に云山元と稱するは、見眞大師北越へ左遷の途次暫く留錫して草庵を結びしが其後有縁の通俗聖人を慕ふにより、六十二歳の壽像聖人を善鸞に托して山元の莊に居らしめ弘教せしむ、善鸞諸國遊化の途に上りしが故に、其子淨如聖人の意を受け遷化の後遺骨を奉して山元に歸住したり、即ち勅額の山元山則派號も之に起因す、第八世道性寺基を今の地に移し佛閣を建立す、

總持寺瑩山

曹洞宗大本山能登國鳳至郡櫛比莊諸嶽山總持寺開祖佛慈禪師弘徳圓明國師瑩

坂井郡多福寺にあり

山紹瑾大和尚は越前國多福邑の豪族藤原某の一子なり初め父母は其子なきを憂ひ何にもして一子を得ばやと思ふの心をこたらざりしが或歳の夏の頃にやありけん夫婦諸共に庭に出て離につたふ朝顔の花のさかりに開けるを見て相顧りみて語て曰く我等此世に生れ來て衣食住は更にも語はす何一つ事足らぬとも思はねど唯子なきのみ歎かはし哀れ世は實に無常にて人の命は此の朝顔の日の出限りの花に宿れる露の乾くよりも尙ほ脆しとかや朝に紅顔の麗はしきあるも夕まで保ち難し若終に一子もなふして此世を過ぎ去らば年頃貯ひたる多くの資財も之を誰かに譲り與ふべき抑も淨世の資財尙ほ幻泡の如し之を棄るも惜からねど我等亡きのち誰かまた我等が菩提を弔ふべきや假初にも骨肉を分てし者ならては争て眞情に追福修善し我等が暗路を照さんやと相視て涙に袖をうるほし暫し言葉もなかりける、斯くて夫人は年已に三十を越たれども未だ一子もあらざれば之を憂ひて寢食をも安んずる事なく或歳の春の彼岸の事なりしが祖先の墓に詣ふて、花香を手向け最懇ろに禮拜しつゝ、且つ心に念ずらく祖先以來家系聯綿として吾夫まで傳はりしを我等如何なる業障ありて斯く世繼の子を得られざるや祖先の尊靈もし照鑑したまはゞ願くは一子を

授け給へと伏拜みつゝ頓て墓門を出て寺に入り佛を禮して又もや一子を得んことを祈る折柄住持の僧は人々の爲に放生會を修し且つ殺生の極惡罪業なる因縁と放生の利益廣大なる道理を懇ろに説示さるゝ節なりければ夫人も其席に列なり合掌恭敬して至心に其説く所を聽聞するに謂く凡そ人のなす業に事共多かれど中に就て殺生ほど罪業のふかきものはあらじ又善き事の多き中に放生ほど利益のあつきはあらぬぞかし其故は猥りに殺生する者には惡魔の眷屬附き纏ふて常に其身を離れざれば現世には何事も心になはず後世は必ず惡道に墮つ或は前世に殺生せし縁因にて此世に多病の身となるものあり又は一生子なきものあり然れば佛は殺生を誡めて惡業中の最惡と説きたまへり之に引かへ放生は諸佛菩薩の慈悲に契ひ諸天善神の護を受け現世は更なり後の世も善處に生れて快樂を極むべし或は過去の惡業にて現世に多病又は子なきも早く夙因の所感と知りて至心懺悔の念をこし頻に放生を行へば業障漸やく消滅して身も健かに又は聖子を得て幸福を受けん然れば佛は放生を勸めて善事の中の最善と示したまへり嗚呼慎むべきは殺生なり又行ふべきは放生ぞかし各ゆめゝ疑ひ玉ふ勿と夫人は聞くまゝに我身に引き當て感涙とゞむる

子無きを
多きを
願すに
願すに

こと能はざりしが急ぎ家に歸りて其由を具さに夫に物語れば夫も頻に感泣しつゝ深く夙世の罪業を懺悔し共に是より放生の業をぞ修したるける爰に又遠くもあらぬ村の多禰の觀音とて名にし負ふ靈驗たかき菩薩尊像あり母夫人は篤く此菩薩を信仰し専はら一子を得させ玉へと祈ることをこたらざりし文永五年十月八日母夫人三十七歳頃しも正月初旬の事なりしが一夜枕に就きながら過去かた行末の事どもを慮かり世の中のおじきなきをかこち我身の業障の深さを歎きつゝ暫しまどろむその駒隙に早や夜は曉け方となりぬと思へば起き出て、面を洗ひ淨壇に燈燭など奉り至心に佛を禮拜し頓て身をかはして東に向ひ朝暾を拜まんとせしに忽ち日輪虚空を離れ飛び來て我が口に入りしゆへ思はず之を吞むよと見て驚き覺れば尙ほ眞夜中の夢にぞありけるこのときに當り身心爽快にして我と我身を忘るゝ如く自から奇異に感ぜしが適く此月より妊娠せしを覺えしかば始めて靈夢の瑞兆を知り夫婦の喜び言はん方なく夫人は殊更に觀音大士に祈誓して曰く平生の所願ひなしからず今日に大悲の感應を蒙り我等この身のあらんかぎり何に恭敬供養したてまつるも慈恩に酬ゆる術なけれど此上の大慈大悲は身を擁護ましゝて聖子を生しめた

まへと毎日禮拜三百三十三禮し又普門品を讀誦すること三十三卷づゝ一日も怠たることなかりしが遂に十月八日の朝暎の昇る時聊かも苦痛なく安らかに分娩したまへり時に紫雲屋上を掩ひ異香室に満て馨しく近隣みな祥瑞を感じ生れたまひし兒は果して是れ丰姿秀拔面貌端正にして風神尋常の嬰孩に異なれり襦袢の中にましくて哆多和々とのたまふうちに時々掌を合せ南無々々と唱ひつゝ三寶を禮するの姿自然にそなはりて嬰兒に似ざる有様あれば見る人聞くもの嘆稱して神童とぞ噂さなしたりき資性穎敏生ながらにして能く知る誠非凡人に非ず然れば平生の遊戯にも石を積て寶塔に比し或は土を圍めて佛像に擬し又よく母に順ふて普門品を誦するなど自から佛事をなすをこよなき樂みになし終に尋常の兒童に交はりたまはず然りながら意はなはだ忤急にして輕躁の振舞あり輒もすれば嘔り腹立ち異しきまでに狂ひ叫びて自から傷ることさへ數々なれば父母の歎きは大方ならず種々に藥醫をも盡せしが更に其詮あらざれば益々悲歎に堪えずして且つ思ふやう吾兒斯く嗔怒狂叫の常ならざるは四大不調の故ならず又蠅蟲の爲にも非ず是或は夙因業威の然らしむる所にて中々に醫藥の療すべきに非ざるにや然らば寧ろ三寶の力に藉

ほか終に痊ざる所なるべし争て猶豫すべきやとて直に復た多福の觀音に祈誓をこらして謂く此兒たとひ敏捷絶倫なる嗔恚の毒焰心の病となり遂に薰習して消滅することなくば安んぞ能く身を立て名を顯はして我等が願を満たしむることを得んや唯願くば大悲哀愍この業病を痊しめ玉へと日夜丹誠をこたらざりしが奇むべし國師の嗔怒これより倏まち和らぎて事に觸れ縁に對して其溫柔なること猶ほ生を替しが如くなりし一時母に順ふて觀音の聖像を禮拜し熱々菩薩の相好端嚴微妙なるを仰ぎ見たまひ突然母に問ひ尋ぬるやう此菩薩何處に住し何なる業を作し何等の徳ましくてか斯く庶人の崇敬を受けたまふや菩薩も亦た人なりや將た人にはましまさずやと母聞て大いに驚き此兒僅に懷を離れ未だ菽麥の辨まへだになき筈なるに俄に斯る問をなす或は鬼神などの憑依しには非ざるかと思へばそゝろに悚しくて答ふる詞もなかりしが徒に之を撫しつゝ和兒が問ふ所は此母も篤とは得知らぬことなるが此菩薩は善く諸の方所に應じて弘誓の深きこと海の如しと聞つれば汎く佛經の理を明らかにし大知識の高僧ならねば其功德因縁など説解ること難かるべし然れば我等は只管に菩薩の大悲に歸命して攝取救濟を仰ぐのみぞと告げたまひしが是よ

り國師は出家求法の志を起したまへりとぞ、謂ゆる栴檀は二葉より香しくといふものにや俊才敏慧にして凡そ一回耳に觸れ目に遮ぎれるほどのこと永く記憶して忘れたまはず父母の命に依り郷校に就て書を學びたまふに經史の類は教授を待たずして獨り自から通曉し世間塵俗の書類をば繙とくことを好みたまはず造次にも佛經を讀誦し三寶を禮敬したまふこと恰かも宿習の如くなりし離塵求法の志ますく深く遂に父母に出家を乞ひたまひしが初のほどは父母も之を許さざりしに頻りに乞ふて止みたまはず一日父母に迫り若し出家を許したまはずば今日より物を食べまじとて絶食したまふこと三日に及び尙ほ請たまふことの切なれば父母大に驚歎し逆も塵中に留むべき兒ならぬを覺りたまひ釋尊降誕の日を撰み是年四月八日といふに相携へて永平寺に登り徹通義介禪師を拜して驅鳥の沙彌とぞならしめたまふ斯くて此數年の間は親しく介祖の訓誨を受け廣く内外の典籍を學び又大衆の後に從て勤修精進少時も怠りたまふことあらざりしが或人戯れに問て曰く苦修練行して何事をか求むるや對て曰く佛法は戲論を以てもとむべからずとその活潑敏捷慨ひね此の如くにして大人もをさく及ぶべからずと衆みな歎稱愛撫せり弘安三年庚辰年十

孤雲懷
大戒を
受て僧
となす

三是年二月十八日義介の教に隨て孤雲懷禪師に就き大戒をうけて僧となりたまふ禪師其志の勇猛にして必らず爲すことあるを察したまひ切に歎賞して曰はく此子後生なりと雖ども夙に大人の所作あれば他日人天の導師となりて大に吾宗を振ひ興さんと懸かに識記したまへり然るに程なく懷禪師は疾に罹りたまひしかば國師に命じて日夕の湯藥に侍らしめらる一日衆に告て曰はく吾老病また起つと能はざるを知る憾む所は此子(國師を指す)を接得して其生涯を觀ざるに在りと遂に國師に囑して復た介祖を依止せしむ國師感佩して敢て忘れず終に葬祖はこの年八月廿四日を以て遷化されしかば國師は更に介祖に參じ愈以て力を着けこの數年の間は徹通介祖の左右に侍り晨參暮請し眞に頭燃を救ふが如く頗ぶる洞上の宗旨を究め兼て博く眼を佛經祖錄に晒し且は古聖先徳の行事を觀て銳意奮發日もまた足らずとなす弘安八年乙酉年十八正月廿日介祖に請ひ初めて遊方行脚したまふ時に寂圓和尚寶慶寺に住して化門盛なりしかば遊方の初め先づ寶慶寺に到り寂圓和尚に參じて夏を過し秋に及びて寶慶寺を辭し直に京師に赴けり此頃萬壽寺の寶覺東福寺の慧曉は最も有名の耆宿なりしかば殊更に相見せられしに皆器重敬愛せらる尋て叡山に登り

寂圓和尚
に參す

て專はら天台の法門を扣究こくきゅうしたまふ、秋七月叡山を辭したまふ、此時に法燈禪師紀伊の興國寺に住して雷名宇内に蘇すけり因て特に行て扣參し法燈一見して大に賞歎し留めて冬を過すさしむ、徧べんねく天下の叢席を歴遊して宗匠知識の門庭を扣き至るところ賞識を蒙もむらざるはあらざりしかど未だ自から安とせず、正應元年戊子年廿一越前に歸り寶慶寺に造り再び寂圓和尚に參じ尋て永平寺に登りて介祖を歸省し大に喜びて茶を點じ在昔迦葉尊者の法華會上に在て長者窮子の譬喩を説れし事など話して最懇ろに慰勞す、介祖に隨從して加賀國大乘寺に至り會ま法華經を看讀し法師功德品の中父母所生眼悉見三千界といふに至り大に省悟し直に方丈に詣りて所解を述べ介祖曰はく自己の一大事を究めんと欲せば些子の覺觸に於て則りを取ることを得ざれ汝更に去て工夫を做せと國師揖して退き是より心を攝して夜も寝ねたまふことなく恰も仇敵の者と室を同ふして居るが如く須臾も油斷せず大に精彩を着けられける、永仁二年甲午國師年二十七此數年の間常に大乘寺にて親しく介祖の訓誨を受け謂ゆる或從知識或從經卷の金言を奉じ工夫請益怠たらず善く一切經を看讀し了れりとぞ然るほどに是年十月二十日の事なりしが介祖上堂ましくして趙州從諗禪師の

加州大乘
寺に在る
こと六年

平常心是道と云る公案を舉示するを聞き豁然として徹證てつていし乃ち曰く我れ會せりと介祖問て云く爾作そ廢へい生せいか會す答て曰く黒漆の崑崙こんん夜裡やに奔る介祖云く未だ穩かならざるとあり更に一句を道へと曰く茶に逢ては茶を喫し飯に逢ては飯を喫す、介祖笑みを合て云く爾向むか後當に洞上の宗風を起すべしと永仁三年乙未正月十四日介祖命じて入室せしめ高祖より弭祖弭祖より介祖まで嫡々相承したまへる處の法衣を授與し永くな斷絶せしめぞと附囑つごましませり、永仁四年丙申細川刑部大輔賴春の屬將に阿波國海部の郡司某とて加州富樫とがし氏の縁族あり是人嘗て國師の道望を聞き傾慕瞻仰深かゝりしがこの年采地さいちに城滿寺を建て國師を請して此に住せたまつり大に敬禮を加へ法化を希がひたりしかば遠近の緇素徳に嚮ひ風に歸する者夥多しかりしとなん永仁五年丁酉遙に肥後の大慈寺に到り寒巖禪師を訪ひたまふ、禪師大に喜びて手を把り宗乘を照揚す時に斯道紹由と鐵山士安の二師は寒巖禪師の高弟にして有道の聞たかゝりしが一日國師に就て垂示を請ふ乃ち曰く釋迦老師一大事因縁の爲に世に出現し直に衆生をして佛知見を開示悟入せしめたまふ且とらく道へ這箇の一大事作そ廢へい生せいか會せん門より入る者は家珍に非ず直に須らく自家の口を開き自家の話

を説くべし若また未だ爾らざれば縦ひ五千四十八巻を説き得て七縦八横なるも只是れ法身量邊の事なるのみ是の大事に於て遠ふして遠し所以に人々只行往坐臥の處に在りて一絲毫を添ふるとも也た得ず一絲毫を減ずるともまた得ず會し去らず更に些子の氣力を費やさず纔に奇特玄妙の商量をなさば已に交涉なし言ふとを見ずや動は即ち生死の本、靜は則ち昏沈の郷、靜動双べ忘ずるも佛性を顛預す惣に不恁麼なるも畢竟如何ん、もし是れ旨外に宗を明むれば終に言中に則を取らずと紹由等此言を聞き實に甘露を飲むが如くなりき、永仁六年戊戌年三十一阿波の城満寺にて始めて佛祖正傳の戒法を開く、可鐵鏡西堂等得戒するもの七十五人とぞ聞えける、其化益の盛なるもふべきなり、介祖書を齋らし使僧を遣はして召す依て國師は直に城満寺を辭し加州大乘寺に到りて介祖に隨侍し左右を補翼す正安二年庚子時々介祖に代りて衆の爲に説法垂誡したまへり傳光録の公案五十三則の示誨は蓋し是年正月十二日を以て其始めとなすといふ、正安三年辛丑富樫氏藤原家尙來りて法要を問ふ國師ために告て曰はく佛祖單傳の妙旨は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ是を本來の面目を露すと名け亦本地の風光を露すと名く身心俱に脱落し坐臥同く遠離

す不思善不思惡能く凡聖を超越し迷悟を透過し生佛の邊際を離却す故に萬事を休息し諸縁を放下して一切なさず六根無作這箇は是れ何誰ぞ會て名を知らず身となすべきに非ず心となすべきに非ず慮らんと欲して慮絶し言はんと欲して言窮す若し能く此に於て分明ならば縁に對せずして而して照し眼雲外に明に思量せずして而して通し宗默説に朗かなり乾坤を坐斷し全身獨露と富樫氏これを聽き了りて大に喜び心を傾けて益ます崇敬を盡せしとぞ乾元元年壬寅年三十五介祖この年八十四歳其老たまへるを以て院事を謝し國師に命して大乘寺の席を繼しめたまふ是に於て江湖の龍象ます、駢闐輻湊す中に就く峨山紹碩明峰素哲無涯智洪の諸師皆な衣を改めて國師に歸し化門甚た盛んなりき徳治二年丁未年四十この數年間は大乘寺に安住したまひて接物利生法席日に隆んにして大雄の禮樂自から興り皆諸方叢林の楷即となれり然れば諸侯大夫士庶人に至るまで風を望んで瞻仰し資を施して法筵を賑起せしむる者甚多く坐禪用心記三根坐禪説信心銘拈提などの垂示撰述も概むねこの時に在しとぞ延慶元年戊申介祖この年九十歳老病の兆候に國師は接衆度生の暇必らず介祖の座側に侍り湯藥甘旨の供養みな親から之を奉し孝順至らざる所なかり

し斯て病漸やく重く遂に湯藥をも服さざれば九月十四日に大衆拜候して遺訓を請ひ奉りしが介祖手^て職^をひて筆を把り得ず乃はら國師に命じて代書せしめ恬然として脱去ましませり其津送より造塔に至るまで國師みな親から之をなし其孝順の深くして且つ厚き見聞せる道俗感歎かぎりなかりける延慶三年庚戌九月十四日は介祖の一周年忌たるを以てその眞を供養して上堂說法したまひしに天花亂墜の祥瑞あり參集せる士女その花を擲せるもありとかや應長元年辛亥加賀國法苑山淨住寺の可鐵鏡西堂は嘗て阿州の城滿寺にて戒を國師に受けし後ますく國師の道化を欣瞻し乃ち檀越と相謀り淨住寺を國師に譲り改めて開山第一世となしたてまつらんとて狀を具して懇請せしかば十月十日を以て大乘寺の院事を明峯素哲に接せしめ遂に其請に趣きたまへり正和二年壬子年四十五能登國に滋野信直と云る人あり其夫人平氏と共に嘗て深く國師の德音を欣慕し屢々使を大乘寺に遣はし國師を其邸内に屈請して供養恭敬欠る所なく受戒問法朝昏を問てざりき然れば是年の春天下の執權北條貞時に稟申し自家の山莊なる能州酒井保の地若干を國師に奉つる其狀に曰く我等此山を施す志は唯和尚一時の居住を望むのみ成埃興廢を念はず今より以後縱ひ貧士

永光寺を
開く

丐人に興へたまふとあるも我これを顧りみず一度和尚に施せし後復た管領するとなし永く捨心を發し了れり何ぞ重ねて希望あらんと國師其喜捨心の至誠より發せるを感じたまひ之を納れて其地に臻りたまふに奇峯危巖縹緲して卉木鬱葱天日を隔離し其中間の平かなると掌の如し實に國師の尊懷に愜ひ窃に終焉の志ましませしかば忽ち^ち菲^を縛して庵居したまへり正和二年癸丑此に富樫家尙の嫡男に藤原の家方と云るあり嘗て父家尙と共に深く國師に歸依したてまつりしかば若干の資財を捨て酒井保の庵地に伽藍をぞ建立しける然るに其經營の始めに當り十六大阿羅漢の中なる第八の尊者伐闍羅^は弗多羅^は阿羅漢^は應現ましく種々の祥瑞ありしかば遠近の道俗其影向を見聞して隨喜讚歎かぎりなく頓て伽藍落成して開堂演法の盛典あり寺を永光寺と名け山を洞谷山とぞ號けたまへり斯て四來の雲衆日に集ひ忽ち一大叢林となる壺庵至簡珍山源照諸氏みな衣を改めて歸化したりける正和三年甲寅能登國羽咋の郡司得田某と云る人光孝寺を建立して國師を請じ開山となし奉つる文保元年丁巳年五十此の數年の間は或は時に大乘寺に赴き或は淨住寺または光孝寺に化を布き玉ひしが多くは光孝寺に在て化導純眞なりしかば其德望早く朝野に聞え門庭

の盛んなる江湖に肩を齊ふする者なかりけり文保二年戊午この年悲母八十七歳にして世を去り懷觀大姉とぞ號しける國師悲母の生涯念持せし觀音大士の聖像を得て之を供養し猶悲母に奉侍するの思をなしたまへり元應元年己未八月滋野信直の夫人永光寺に來りて懇勸に出家得度を求めしかば國師は大に驚き且つ曰く昔永平師祖支那より歸朝して京都の建仁寺に在ませしとき祖母の明智優婆夷を得度したまひしとありき我昨夜其事を夢みしゆへそゝるに懷舊の念切なりしが今夫人忽然來りて出家を求むそれ或は明智優婆夷の再來ならん歟と即ち與に得度して默譜祖忍尼とぞ名付けけるこの年九月八日峨山紹碩和尚は國師の眞像を拜寫して題贊を請しに乃ち書して與へたりいはく誰識庵中不死人未搖掌握鎮烟塵涼々威烈無等匹三尺竹篋奪劔輪器宇廓落絕學天真眉毛爭到不疑地端的眼睛又不親と偕また同月の十五日に羅漢供養の講式を修するに十六の尊者光りを放ちて應現の奇瑞あり宛も寶治三年に高祖の羅漢供養に修したまひし時の景況と一般なりしとかや然れば爾後毎月十五日に必ず羅漢供養を修するの恒規とは定めたり元應二年庚申年五十三洞谷山のうち蓮華峯と號けたる最と殊勝なる境致のありけるが是年六月十八日にその勝地に就て

自像に題
受す

一の堂宇を造立し圓通院と名けて悲母の生涯念持せられたる觀音大士の尊像を安置し默譜祖忍尼に命じて香華供養の給仕たらしめたまふ元享元年辛酉能登國鳳至郡櫛比莊に律院あり諸嶽寺と名け行基僧正の開基にて觀音大士を本尊とし靈感日に新なりとて諸人の信仰あさからざりしが是年四月十八日の夜院主なる定賢律師夢みらく本尊薩埵慈憫大悲の光を放ち和雅柔輒の音を以て明かに告げたまはく今釋迦牟尼世尊より嫡々相傳ひたる第五十四世の大善知識本國酒井の洞谷山に出世して大に法輪を轉ぜられ實に靈山の一會儼然未散なるとを得たり汝お速に此寺を彼の聖者に譲り永く佛法繁興の道場たらしめよと然るほどに國師も亦た同じ夜の坐禪の床にましくて適さにこの好夢を感じ謂く觀音大士相好端嚴御手に未敷の蓮華を持ち忽然來儀して告て言はく我一所の寺址を擧て師に與へんと遂に國師を誘引して古寺の山門に到るに大衆迎接威肅整たりしかば國師は思はず入門の語あり曰く總持一門八字打開とその古寺の結構を瞻るに向ふ那邊に高閣あり錦繡もて裝飾たる摩訶般若の經卷を備へ經の這邊に放光菩薩の聖像を安置せり四もに顧みれば琳宮紺宇併列して其數を知るべからず國師は大喝一聲せんとせしに棲然定中の夢回し

諸位寺定
實寺門を
譲り且寺
領を寄附す

かば暫し感歎しなさだに諸嶽寺定賢律師は素より國師の徳望を聞て之を欣
瞻すると尙しかりしに今又斯る靈夢をさへ感ぜしかば直に事の由を檀越に告
げ將に洞谷に趨登りて國師を屈請せんとする折柄あだかも化導の事ありて偶
く櫛比の莊に到るにぞ定賢律師はこれを聞き飛びたつばかりに喜びて遽に
迎へ具さに靈夢の由を述べ國師も亦た包む所なく定中所見の有様を説き示し
律師は深く奇瑞の符合せしに驚きますく歡喜讚歎して直に寺門を國師に譲
りたり斯くて事のいなみがたきを以て頓て入院して六月八日に開堂說法し嘗
て夢中の入門に唱ひたまひし法語に取り寺を總持寺と改め名け元の諸嶽をば
そのまゝ山號となしたまひ悉く律院を轉じて一大叢林をぞ興立したまへり是
則ち今の大本山なる境地なり然るほどに定賢律師は唯寺門を譲りたるのみな
らず更に寺領等をも皆寄附せられしが其狀に曰く

諸嶽寺觀音堂寺領敷地事

右伴寺地之境雖非〇〇分限東火尾限南厨谷向谷限西長峰限北荒志之横道爲
末代之奉寄進之依勿令違犯莊元百姓等爲後見之狀如件

元享元年七月二十二日

權律師定賢 花押

陛下の十
種疑問に
答ふ

秋八月 皇帝陛下十種の疑問を垂れたまひ孤峯覺明和尚を勅使として國師の
答話を徴したまふ時に速かに奏對したてまつる今其全文を左に記す

勅問一に曰く祖意と教意とは是れ同か是れ別か師云く祖と教とは水と波との如
し豈異あらんや然りと雖ども教者は多くこれ教網に纏はれて脱洒なると能は
ず故に古來祖意に參じて旨を得る者甚だ多し太原の孚上座は初め座主たり揚
州の光孝に在て涅槃經を講ず一禪者あり雪に阻てられて寺にあり因て往て講
を聽く三因佛性三德法身に至りて廣く法身の妙理を談ず禪者失笑す座主講じ
罷て禪者を請し茶を喫せしめて問て曰く某甲素志狹劣文に依て義を解す適々
笑はるゝことを蒙ひる到らざる處あらん伏て望むらくは教へられよと禪者曰
く實に座主の法身を識らざるを笑ふ座主曰く此の如く解説して何れの處か不
是なる禪者曰く請ふ座主更に説くと一遍せよ座主曰く法身の理は猶ほ大虚の
如し豎に三際を窮め横に十方に亘り八極に彌綸して二儀を包括す縁に隨ひ感
に赴きて周偏せずといふとなし禪者曰く座主説き得て不是とは道はず只法身
量邊の事を説き得て實に未だ法身を識らざるとあり座主曰く然も既に是の如
くならば禪者當に我が爲に説くべし禪者曰く還て信せんや否や座主曰く焉ん

を敢て信せざらん禪者曰く若し是の如くならば暫く講を輟め旬日室内に於て端坐靜慮し念を攝し善惡の諸縁一時に放却せよと座主一に教る所に依り初夜より五更に至りしが鼓角の聲を聞て豁然として契悟すと云ふ又西山の亮座主馬祖に謁す祖問ふ甚麼の經を講ずと亮曰く心經祖曰く甚麼を將て講ず亮曰く心を講ず祖曰く心は巧伎兒の如く意は和伎者の如く六識は伴侶たり争てか經を講じ得るを解せん亮曰く心既に講じ得ずんば是れ虚空講じ得るとなしや祖曰く却て是れ虚空講じ得ん亮拂袖して去る祖召して曰く亮と亮首を回らす祖曰く是れ甚麼を亮豁然として大悟す云々此外永嘉大師、圭峰宗密、良遵座主、長水子瑋、本朝の傳教弘法二師等祖師禪に參じて印證を得る者勝て計ふべからず勅問の二に曰く達磨は是れ香至國王の第三子にして四大五蘊具足の身なり何に依て一莖の蘆に乗るや師云く諸佛諸祖不可思議の神通妙用あり凡情の測るべき所に非ず偏に是れ佛法靈驗の致す所なり達磨は是れ香至王の子なりと雖ども實に是れ觀音大士の化身なり豈神通妙用なかるべけんや然りと雖ども祖師門下に於ては神通妙用を以て奇特となさず龐居士曰く神通並に妙用水を運び及び柴を搬ぶと

勅問の三に曰く禪家に謂ゆる不立文字教外別傳と然と雖ども一大藏教皆是れ文字なり禪家の語録また是れ文字なり若し文字なくんば佛祖の言教何に依て未世に流布せん師云く文字は是れ魚兔の筌蹄なり若し魚兔を得ば則ち筌蹄渾て是れ用所なし修多羅の教は月を標するの指なり若し月を觀れば則ち指もまた用所なし然れども人皆な筌蹄を認めて魚兔を得ず指頭を認めて月を觀ず故に不立文字と云ふなり世尊四十九年豎說橫說し最後に至り一枝の華を拈じて衆に示したまふに衆みな默然たり唯迦葉尊者のみ破顏微笑す是れ即ち不立文字教外別傳の極致なり

勅問の四に曰く有るか曰く此身は四大假りに合するなり命終の時地大は地に歸し水大は水に歸し火大は火に歸し風大は風に歸すと然らば則ち何物ありてか地獄に墮するや師云く命終の時四大離散して一物なしと見るは外道の空見因果撥無の見解なり今生善惡の業因に依て來生に依身を成じ或は天堂に生じ或は地獄餓鬼畜生に入り種々の苦を受くると諸經の所說分明なり若し是れ大解脱人たるを得ば地獄なし天堂なしと説くべし

勅問の五に曰く人みな先考先妣の爲に靈供を備ひ茶湯を獻ずと雖ども少許も

消るとなし知らず供を受るや否や師云く蜂の花を探るに但其味を取て色香を損せざるが如し何の消するとかこれあらん哉又俱舎の世間品に曰く中有は香を以て食となし香を食するに由るが故に健達縛ケンダツバク此に尋香と云ふといふ少福の者は唯惡香を食し若し多福の者は妙香を食すとす云々

勅問の六に曰く世尊雪嶺に於て六載修行し明星現ずる時忽然として大悟して曰く我と大地の有情非情と同時に成道すと悟人は最も成道すべし迷人何に依て成道せん耶師云く經に曰く始知衆生本來成佛と云々衆生從本以來佛性を具ふと雖ども日に用て知らず釋迦老師成道の端的活眼を開て之を觀れば則ち草木國土悉皆成佛なり六祖曰く悟れば則ち衆生是れ佛迷へば則ち佛是れ衆生と生佛元隔なし迷が故に衆生となり悟るが故に佛となる衆生若し迷なくんば佛と何ぞ別ならん故に四十九年說法し迷の衆生を度して本有の佛性を見せしむ勅問の七に曰く金剛經に曰く一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提アヌタラサマサムササヒツ法みな此經より出づと金剛經は是れ釋迦佛の所説なり然も一切諸佛此經より出づといふ知らず此經を先となすや師云く經の一字は常と訓じ法と訓ず法とは即ち理なり此法理は天地未分の先諸佛出興以前より明歴々たり此法理に契ふを諸

佛となし此法理に違犯するを凡夫となす仁者は之を得て之を仁となし智者之を得て之を智となす阿耨菩提アヌタラサマサムササヒツも亦た此の如し

勅問の八に曰く經に曰く大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道と云々大通智勝佛すら十劫道場に坐して佛法現前せず今時の人一生坐禪修行して如何が佛道を成せんや師云く大通智勝佛十劫坐道場の後佛法現前して佛道を成ぜし事は教中の所説分明なり大通佛大勇猛精進の力を以て十劫を経ると食頃シクキョウの如しと謂へり今時の人も大信根を具せば十劫を以て遠しよせざらん然と雖も祖師門下に於ては別に生涯あり臨濟和尚曰く大通とは是れ自己處々に於て其萬法無性無相に達す名けて大通となす智勝とは一切處に於て疑はず一法を得ず名けて智勝となす佛とは心清淨にして光明法界に透徹す名けて佛となすことを得十劫坐道場とは十波羅密是なり佛法不現前とは佛本不生法不滅なり如何ぞ更に現前あらん不得成佛道とは佛さらに作佛すべからず云々と然は則ち經文を以て上面に放在し臨濟の語を以て下面に移し來て之を見れば則ち何の解し難きことあらん哉

勅問の九に曰く經に曰く清淨の行者涅槃に入らず破戒の比丘地獄に入らず清

淨の行者は涅槃に入るべきに什麼として入らずと曰ひ破戒の比丘は地獄に入る可に什麼としてか入らずと曰ふや師云く涅槃地獄に於て二見を存するは小乗の見解也善惡不二邪正一如の處に於て什麼の清淨と破戒とを論ぜん耶圓覺了義經に曰く衆生國土同一法性地獄天堂皆淨土たり一切の煩惱畢竟解脱云々と然ば則ち涅槃の求む可なく地獄の厭ふ可なし何を清淨と破戒とを論ぜんや勅問の十に曰く朕趙州無の公案を以て提撕すること年尙し未だ透徹せざるを以て恨となす如何が工夫用心すべきや師云く上來勅問の中此は是れ最第一の義なり故に蛇の爲に足を畫き強て注脚を下さん大慧禪師曰く僧趙州に問ふ狗子に還て佛性ありやまた無や州曰く無と此一字子乃ち是れ許多の惡知惡覺を摧く底の器仗なり有無の會を作すとを得ざれ道理の會を作すとを得ざれ意根下に向て思量卜度するを得ざれ揚眉瞬目の處に向て察根するを得ざれ語路上に向て活計を作すとを得ざれ無事甲裡に觀在するを得ざれ舉起の處に向て承當するを得ざれ文字中に向て引證するを得ざれ但十二時中四威儀内に向て時々提撕し時々擧覺せよ狗子還て佛性ありやまた無しや曰く無しと日用を離れす此の如く工夫を做し見よ月の十日に便ち自から見得せ云

々と又曰く狗に還て佛性ありやまた無や州曰く無と這の一字便ち是れ箇の生死の疑心を破るの刀子なり這の刀子の柵柄只當人の手中に在り別人をして手を下さしむることを得ざれ須らく是れ自家手を下して始めて得べし又曰く擊石火閃電光の處に向て會することを得ざれ直に用心する所なく心の之く所なきを得んの時空に落るを怕ることと莫れ這裡却て是れ好處なり蕤然として老鼠牛角に入り便ち倒斷を見ん云々と伏して願はくば 皇帝陛下萬機の餘暇十二時中に擧著提撕したまひへ話頭上疑ひ破るれば則ち千疑萬疑一時に破れん那時本地の風光本來の面目を徹證せんと必せり至祝至禱

此の如く國師の奏對太はた詳明なりしかば大に帝意に愜ひ叙感斜ならず勅して紫衣を賜はり且この年九月十四日藤原行房卿に命じて寺號の額を書せしめ之を降賜して特に優待を加へ總持寺を擧て官寺となさしめらる元享二年壬戌年五十五皇后御懷妊産期に臨んで大に惱みたまふ乃ち 勅ありて總持寺の放光菩薩を祈念したまふに宮中たちまち靈徵あり何くもなくして快然分婉したまふ是に於て上は紫闈より下は白屋に至るまで國師の德音に欽服すると愈々隆んなり然れば是年八月廿八日に 皇帝陛下特に繪旨を下したまひ總持寺を

以て日本曹洞の本山賜紫出世の道場となさしめたまふ是より更に一宗の規格を興し門風もとも煽んなりき元亨三年癸亥春二月無涯智洪に命して加州淨住寺の席を繼がしめ壺庵至簡をして能州光孝寺に住せしめたまふ又明峯素哲は大乗寺より來て親しく巾氈きんせんに奉侍せり正中元年甲子門庭の施設年一年より煽んに雲兄水弟の競ひ來ると日一日より多しその熱鬧なるに隨ひ或は弊を生せんことを慮りたまひ是年三月十六日總持寺十條の龜鑑を書して永く兒孫の遊式となさしめたまふ（其文略す）

斯くて清規法細もすてに備足し復た闕乏なかりければ八月七日に峨山紹頌を舉て總持寺の席を繼がしめ嚴かに退院上堂の法式を修し了りて直ちに明峯素哲を率ゐ酒井の永光寺にぞ赴きたまひける正中二年乙丑年五十八春の頃より微恙を示したまひしが七月に至り遽かに書を發して悉く法嗣を座下に召し八月八日に永光寺の院事を明峯素哲に囑し此日より衆のために八大人覺を提示し且つ曰く這は是れ釋迦牟尼佛より祖々相承し吾が師祖永平大乘の古儀なりと同日の十四日に淨髮沐浴して徹通介祖の眞を供養し大に齋を設けしが翌十五日には恒例の羅漢供養を修し且つ衆のために說法せらるゝことさながら

平常に異なる所もあらざりしに夜半に垂たれとして鐘を鳴らし大衆を方丈に集めしかば衆みな其時ならざるを恠みしに國師は徐ろに衣を整ひ座に登り衆に示して曰く念起是病不續是藥一切善惡都莫思量。纒た涉思量。白雲萬里。と又言く我れ化緣己に盡き泥洹たいわん時至る佛世尊は二月十五日中午に滅を示したまふ我今八月十五日夜半に衆を辭す同中に異あり異中に同あり汝等諸人這箇の道理を知らんと要すやと便ち一偈を書して曰く

自耕自種閑田地幾度賣來買去新無限靈苗繁茂處法堂上見挿鐵人。

筆を抛ちて坐化す大衆悲慟哀哭して燈燭の光りもために暗きが如し中に就て明峯素哲は迷悶して地に躡たれ更に人事を辨へざると幾んと半時に及びしとぞ扱て翌十六日に訃音を四方に發遣せしが法子法孫優婆塞優婆夷遠近の道俗喪に會し哀をあぐるもの數千百人老若男女の隔てなく知ると識らざとを問はず恰かも考妣を喪するが如く寂として八音を遏密せりとなん加之鳥獸聲悲しみ草木色を變ずるかと疑はる然れば靈龜を留むると七日なりしに尊容生るが如くまし／＼といと道俗戀慕の情をまさしめたまへり斯くて永光寺の方丈にて入般涅槃の儀式を修し如法に茶菓珍羞香華等の供具を備へ毎日法事勤行し

至心に孝禮を盡しつゝ二十一日に靈龜を庭前に移し法に依て茶毘したてまつりしに無數の舍利を得たりしかば乃ち大乘寺永光寺淨住寺總持寺の四處に分ち各々塔を建て之を供養し奉つり共に傳燈院とを號しける國師入滅の後三十年を経て正平九年甲午の三月二日後村上天皇嘗て國師の德音を追崇したまひ勅して佛慈禪師の徽號を賜ひ更にまた四百十有八年を経て安永元年壬辰の十一月二十九日に 後桃園天皇親しく宸翰を賜はり國師の嘉號を追諡したまふその 勅に曰く

勅 佛慈禪師人天宗師佛祖嗣嫡。奏對十事。叙問。爲賜紫出世道場。感得一夢勝因。現放光動地。祥端開法。門於四處。振德化於八紘。身嘗雖沒。竹塢白雲之室。經悠遠。名今得達。楓宸青鏡之闈。來永慕。苟思彼德。如遇其人。因證弘德。圓明國師。

爰に明治十年に至り曹洞教會の日に増し隆んなるも偏に祖師の餘澤なるに依り會衆信徒に於て其稱呼の區々ならざるためにとて兩本山の貫主故らに協議を盡され以來太祖と稱したてまつるべき旨を末派へ觸れ示されたり

(總持開山太祖略傳鈔)

寶應寺明照

明照は越前の國某氏の女也、壯歲深く塵界を厭ひ、瑩山和尚に禮して薙髮して戒を受く。祇陀の大智和尚に謁して佛法の要旨を問ふ、則示して曰く大千世界一蒲團、萬別千差裏許看、堪笑少林、胡達磨九年、面壁太無端と對んと欲すれば、智又曰く、錯ること莫れと依て退く、半年にして省ることあり、再び瑩山に參す、山笑ふて曰く、且喜ぶらく大事了れりと、或日問て曰く、汝遷つて臨濟舉拂の話を識るや否や、默頭良久うして出づ、瑩山明照と喚ぶに顧みずして往く、瑩山領す、後に明峰和尚に見て親しく密印を承く、圓通庵に任し往來を接待す、僧問ふ兩鏡相照して中に影像無き時如何と領會す答て曰く妄想すること莫れと、暮年寶應寺を加州に營んで、末山の餘風を振起す、人敬稱して明照大師と云ふ

一獨半
解して
了
大事了
れ

專照寺如導

眞宗三門徒派開基如導上人は平判官康頼の曾孫、康敏の子なり母は賀茂氏也、建長五年四月八日に誕生し、童名を珠千代磨と稱す、文應元年の春八歳にして見眞大師の室に入り剃髮の式を受く、以來禪房に在すこと三年、親く撫育の恩を蒙る

弘長二戊午仲冬下旬八日大師遷化在しにより顯密の義理を究めんがため出て、諸處に遊歴すること十九年終に弘安五壬午年三州兼照寺の圓善を師として真宗の法味を傳承し、當時國郡の門葉古聖人の法流を汲むといへども多く自力の迷情に忤んで宗の實義を知らず、依て枯渴の群萌を露さんがために、同八年三十三歳にして越前に遊化す、この地は父公の領地にして而も有縁の地たるを以てなり、乃ち到る處專修の法を弘め教を受くるの徒風靡せざるはなし、殊に時の領主波多野治郎左衛門尉通貞深く其教に歸し、一字の梵刹を経營して永く專修の法を布き玉はんことを懇請し、遂にその乞を納れて正應三庚寅年八月朔日足羽郡大町の里に一字を創立し專修寺と號す、時に年三十八、則ち圓善師の授與し玉へる大師自刻の眞影遺骨等を安置す、これより法流を汲むもの益す多し、上足の徒弟數輩あり、鯖江の如覺山元の道性、帆山の道願、河北の祖海等なり、正應四卯辛年善鸞法師の息女玉垂を大町の坊へ迎ふ、正和二癸丑年六十一歳の時、長泉寺の別當法印孤山隱士聖淨二門の上に付て疑難二十ヶ條を設け廣く返答を募る、名て愚闍記と云ふ、之に答ふるに一書を以てす、愚闍記返札と云ふ、元應元年六十七歳の作なり、曆應三年庚辰七月廿七日より微疾に罹り、翌月十一日八十八歳化緣既につきて

五世野村に
中野寺に
寺改め照
と專修寺
正應十年
井州小治
今移す
に後路
孤山隱士
問に答ふ

寂を示す自他門徒の哀戀恰も父母を喪するが如くなりしと、

東福寺大陽

大陽義冲は越前に生れ姓藤原、幼にして無爲禪師に就き出家たらんことを請ふ、禪師問うて曰く爾家に在り何等の書をか緝く、答へて曰く論語、乃ち試みに之れを誦誦せしむ、大陽誦して半卷に至り一字を忘れず、禪師その凡ならざるを知る是より大陽剃髮業を修む、壯年に及び鎌倉建長、圓覺兩寺に在る十年、歸つて京都南禪寺に入る、曆應元年筑前の承天寺に出世し夫より參河の實相寺京都の普門東福寺等に歴遷す、觀應元年勅を奉じて南禪寺に遷る、帝宮中に召し毘盧遮那經を講せしめ奏對亦よく旨に稱ふ、又參河中條氏長興寺を同國高橋郡に創むるにあたり延て開祖と爲す、文和元年正月十一日化せんとするに際し門弟子を膝下に鳩め遺誠願ぶる勉め乃ち偈を書して寂す、壽七十一

〔東福寺記〕

東福寺第二十世大陽義冲禪師越前國藤氏子、卯歲投無爲之室求出家、爲問曰孺子在家讀何等書、答曰論語、爲試令誦誦師誦至半卷不忘一字、剃髮納戒服侍巾匝

釋 門

論語を誦す

新増書
便覽治
中家と
るは誤也

無爲禪師
元海大
東福寺
世なり

東福寺
無德
長

比壯往相州盤桓福鹿之間閱十寒暑歸首衆于南禪曆應元年出世筑之承天遷參
之實相京之普門東福觀應元年承勅住南禪帝召入內講毘盧遮那經問即心
即佛話奏對稱旨御問相續參州中條氏翔長興寺於高橋郡延爲開祖江州檀越
建清涼寺請文和元年正月十一日鳩門弟子遺誠書偈曰直證無生忍重轉大法輪
南辰後合掌北斗裏藏身放筆而寂壽七十一

東福寺無德

應長元年無爲大智海禪師寂す茶毘に付するに方り舍利有るを見る無德曰く諸
老舍利ある者憾むらくは多く時人の爲めに疑はる吾今その眞僞を決すべしと
乃ち鏡鏡を揮つて之を撃つ舍利陥つて鏡中に入る是に於て一衆其希有なるを
嘆ずと云ふ無德は越前平葺の人姓藤原名至孝弘安七年京都に入り無爲禪師に
就く祝髮受戒の時坐下皆英靈たり無德自ら初學を耻ぢて奮然關東に到り研究
僅々三歳にして學大に成り且つ易に精通して吉凶禍福を推す的中神の如し夙
に東福寺虎關國師を慕ふ一日國師に謁し問答百轉に下らず正に雷揮電拂の如
く問髪を容れざる者あり元弘の初無爲南禪竺仙和尚の會中に在つて座元と爲

大智海禪師
の舍利鏡
に入る

る忽ち勅旨を傳ふ時に天大いに雪ふる後醍醐帝その筵に臨む無德座に陞り衆
問答罷み乃ち曉樹放開花意思夜窓撩起月精神冷水々地纒知有平地依前埋沒人
云々の句を吐き龍顔らるせ悦康永元年無德また京都の北禪寺に寓す後天下各
州安國寺を建つることあるに方り亦北禪寺を遷し改めて安國寺と稱す且つ十
箇寺の中に列し無德遷改開山と爲る貞和三年秋東福寺を董し晩年南禪寺に遷
る年八十にして溘て焉偈を書して化す時に貞治二年正月十一日なり
〔扶桑禪林僧寶傳〕(釋性激著)

無德孝禪師傳

禪師名至孝字無德越前平葺藤氏子妙年入洛禮無爲大智海禪師祝髮受戒時無
爲座下皆英靈衲子頭角嶄然師自負初學一旦憤然至關東勵志習業不捨晝夜僅
三歳而學成遂嗣其法且精于易推吉凶禍福無不中素慕虎關國師一日國師陞座
秉拂師出衆往還問答不下百轉正如雷揮電拂間不容髮者也應長元年無爲示寂
火後有舍利師曰諸老有舍利者多爲時人所疑吾當決其眞僞乃取鐵槌擊之舍利
陷入鏡中於是一衆嘆其希有元弘初師在南禪竺仙和尚會中爲座元忽有詔旨令
版首秉拂凌晨天大雪聖駕臨筵師陞座衆問答罷乃云曉樹放開花意思夜窓撩起

東福寺
無德
國師

月精神、冷水、地纒、知有平地、依前埋沒人、所以少室峰前弄真像、假鰲山、店上弄假像、真知道、從門入者、真個不是家珍、只如不通、凡聖把斷、要津、又作廢生、擊拂子云、陽氣發時、無硬地、嶺梅先放十分春、龍顏大悅、康元年、師寓北禪、大元帥古山源公常言、安國利民、莫如佛乘、乃令天下各州建安國寺、亦遷改北禪為安國、且列千十刹、以師為遷改開山、緇素靡然向化、暮年承旨主南禪、貞治二年正月十一日、書偈而化、享報齡八十

建仁寺別源

一名は圓旨字は別源、越前足羽郡片上村平氏の子なり、其母子無きを憂ひ、藥師佛に禱る、一夜明珠を吞むと夢む、夫より孕める事あり、七歳父に隨て南條郡帆山寺の觀音に禮し、大に喜び、寺僧に見ゆるに、欣然舊識の如し、家に歸て出家を求む、兩親其宿縁あると爲し、遂に佛種寺竹庵和尚に依て童行と爲し、十六歳薙髮、滿足戒を納む、竹庵曰く、汝は久しく村院に滯るべき者に非ず、東明和尚中國より來る丞に往て拜せよと、則往く、東明は鎌倉圓覺寺の主たり、一見入室を許す、左右に執侍すること十二年、師資契合す、元應年中、海に航して南遊して、古林茂雲外岫中峯本無

夢に白玉を吞む

朝倉孫右衛門尉長兵衛、越前州、南越前郡、丸來、住丸

大治弘、山崎、大祥寺、宗、内、十、景、あり、境、あり

見觀諸大尊宿に參す、或は巾瓶に侍し、或は藏輪を掌る、郷に歸り後版に任ず、又建長寺に遷り前版に居る、曆應年間、東明寂す、依て越前に歸る、朝倉金吾足羽郡金屋村に弘祥寺を開く、別源を招して第一世とす、居ること幾くもなく、鎮西壽勝寺の請に赴き、明年歸寺す、又壇徒の信者善應、吉祥の二寺を創建す、別源を開山とす、文和三年、東陵璵和尚、京師南禪寺に住して、別源を招きて分座せしむ、延文二年、詔により、眞如堂に主たり、明年疾を以て辭して歸國す、貞治三年、建仁寺に主たらしめんと、の公命至る、又辭すれども、免かる可からざるにより、疾を扶けて之に應ず、九日上堂して曰く

離邊不見白衣客、爭得淵明興味閑、今日黃花應喚我、白頭扶病上東山、

十一日晚參し罷んで、病革まる、諸尊宿室に詣して、伺候す、應接常の如し、醫師診して曰く、師起たず死旦夕に在りと、別源笑て曰く、吾精神未だ耗せず、尙三十日を待つ可しと、時に偈頌題贊を求むる者あれば、皆筆を走らして之に應ず、少も難める色なし、十月朔日、征夷大將軍使を遣し、慰問す、弘祥寺を陞せて、位諸山に列せしむ、蓋し師を重んずるが故なり、初八日、諸弟子建仁寺中に塔基を平らげて、菴宇を構へ、洞春といふ、晚間師を昇けて塔所に至る環視して、いふ、此地千光入定の處に隣

足利、磯、公、敬、す

る今老僧之、に歸す幸に非ずやと夜半に己衣を更めて頤を書して遷化する
七十一 (扶桑禪林僧寶傳)

〔諸祖傳〕寫本

日本故建仁別源和尚塔銘并序

前建仁中岩圓月撰

貞治三年龍集甲辰、冬十月十日、別源禪師旨公示寂、建仁東庵諸徒昇全身入塔洞
春菴奉遺命也、後七更歲華、應安四年歲次辛亥夏嗣法小師契禪狀平日行業、過予
妙喜泣血請銘予云、張天覺之於湛堂、魏國公之於大惠、以宰相位撰銘、以垂光末代、
予非其人、故敢辭焉、渠請不可、予固辭、又不可、且以臨終時見叮囑、輒依狀所錄云、
師諱圓旨、字別源、自稱縱性蓋所居越州平氏之子、母以無子、懇禱之藥師佛、一夕夢
吞明珠、乃有身、既產無惱、寔永仁二年歲次甲午、冬十月二十四日也、師七歲隨父詣
府之帆山寺、瞻禮觀音像、甚喜、又見寺僧欣然如素馴從者、歸家白父母求出家、母以
爲夙緣、乃隨其志、依佛種寺竹庵圭和尚作童行、十六歲薙髮登具、一日來謂師曰、觀
彌根器、不常久滯村院、我聞東明和尚近從元朝來、洞上宗風盛行、關東宜往禮拜師
受教、趣裝而行、時明立圓覺、一見許入室、執待十二年、師資契合、元應二年庚申、師二
十七歲、乘商船往江南、參訪諸彥、鳳臺、古林、天童、雲外、天目、中峰、本覺、靈石、華頂、無見、

東林、古智、圓通、竺田、妙泉、南楚、龍岩、真首、座般、若誠、菴主、皆是一代宗匠也、在雲外會
下、承侍巾餅、親炙古林最久、徧游江湖、再歸保寧、領知藏職、南游風十又一年、元朝至
頂庚午、回鄉、圓覺任後板、秉拂提綱、緇素驚歎、無幾遷居、建長前板、曆應三年、冬十月
四日、東明臨終、問侍僧以卯塔已成否、曰已成、明曰、必竟變作麼生、侍僧莫能復對、
師在傍代曰、青山白雲、明曰、我去也、師曰、和尚要那裏去、明乃豎拳示之、師便禮拜、明
曰、你見箇甚麼道理、師曰、三十年後有人舉在、明曰、測得你錯舉、康永元年、歸越、足羽
縣朝倉金吾開弘祥寺、基爲第一世、住未幾、赴鎮西壽勝、請明年卷席歸、弘祥亦有信
士、創善應吉祥二寺、侍師爲開山文和三年、東陵和尚住南禪、招師分座、駿州清見無
主、請師固辭不就、延文二年、幕府有帖、匡京之真如、明年秋、以脚疾退歸、越貞治三年
六月、建仁公命、至以疾拒之、越之太守、擬掇令就、又佐々木判官爲禪律二教總管、馳
書、縱更迫不獲、已承公命、力疾、匡徒不動、勸推拂、秋九月、重陽、傷上堂、雁左右作、偈云
罷病革、鳴鼓辭衆、諸大尊宿來訪、應接如常、如談禪、問答機鋒不讓、醫者來視病、次、師
云、吾存日幾日耶、醫云、豈得明日、師咲云、吾精識未耗、可待三十日耳、
有求、偈頌贊者、皆走筆隨請、冬十月朔、征夷大將軍遣使問病、次降官符、陞弘祥寺位、列諸山、以貴

師行道之蹟也。八日就建仁東邊築塔。其構廢宇名洞春。晚間昇到塔所。師環視云。此地鄰千光入定之處。我伴此師多幸也。又云。晝日衆多來看不耐煩也。及夜持囑予云。後事悉煩老兄耳。半夜更衣書偈坐化。偈云。三提聚虛室。栽龜毛。兔角。揚岐一頭驢。只有三隻脚。蹋翻虛空。擲殺黃繯。諸徒順遺名入塔。惱信如生。臘五十四。壽七十一。予乃敢銘其塔。銘曰。洞宗皇皇。芙蓉發芳。荷玉曹氏。數世而已。天上雲居。澤潤有餘。濕州天皇。旺化甬東。金鳥跳海。海岐觀改。流到別源。沿沿渾渾。瀾漫越國。逆流中國。東山山東。塔磨占封。妙喜係銘。待風栖桐。

〔南遊集〕別源禪師著

送先講主歸蜀

半滿偏圓無所談。八千里外錯咨參。麻鞋倒着急歸去。痛罵南方五十三。

和雲外和尚天童十境韻

萬松關

廿里蒼髯夾路遙。清風樹樹響寒濤。等閑掉臂那邊過。誰管門頭千尺高。

翠鏢亭

十二欄干凝碧寒。青山綠水四連環。簷頭滴滴零松露。孤鶴飛從天外還。

宿鷲亭

機自忘時心自閑。夢飛江海立欄干。向明月裏藏身去。莫與雪花同色看。

清關

山青雲白冷相依。是子歸來就父時。寒淡門風難入作。且從閭外見容儀。

萬工池

鑿斷山根通宿雲。萬夫鑿下水泥分。池成月到鑑天象。不比黃河徹底渾。

登閣

一溪流水隔塵境。萬壘青山遶石房。不涉階梯超佛地。毗盧頂上罵諸方。

玲瓏岩

懸崖蒼壁太高生。不假天工雕琢成。突出八方無背面。四山花木自枯榮。

虎跪泉

菸菟爪下湧寒泉。一飲方知如蜜甘。多少禪和除渴病。休言衆味不相兼。

龍潭

頭角淵潛水月交。清波徹底醮青霄。有時沙界施甘澤。浩浩叢林長異苗。

太白禪居

〔東歸集〕

東晉沙門曾此禪青山都是舊青甍。長庚星沒天河曉。童子不來經幾年。

和明首座閱藏經韻

世尊舌相覆乾坤。首坐眼光如電翻。一目五千餘卷畢。木人解唱石人言。

和不聞書記韻送明功沙彌歸鄉首

父母難忘事遠行。慇懃相送話前程。歸家善自尋思去。莫昧初心誤一生。
男兒衣錦始歸鄉。何事子今回去忙。只貴寸陰如寸璧。朱顏莫待鬢毛霜。

和偶作韻

時移世異有青山。入自忙兮山自閑。只有山僧知此意。秋風古寺掩禪關。
幽性愛山兼愛松。開房終日坐開窓。江湖一十餘年事。可笑萍蓬漂轉蹤。

窩中雜言十首

尋花空裏走天涯。盛水籃中歸到家。床上翻身開兩眼。一庭霜月照窓紗。
老鼠常偷燈盞油。跳牆穿壁鬧啾啾。倒拈茗筴暗中擲。打着西天老比丘。

寄勝首座隱居

半升鑄內煮山川。一把茆茨蓋大千。百丈叢林名利窟。大梅茆舍淨居天。

除夜書懷

窩中野客暗傷懷。風物蕭條歲月催。白髮勸人頭上至。青山招我意中來。阿師室內差盤特。悲母堂前思老萊。四十一春今夜盡。平生志氣已寒灰。

上白雲和尚

天地風高霜氣清。青山秀色向秋橫。閑雲觸石淡中影。空巖生松靜裏聲。動赴萬機寧借力。湛存一色不留情。金鷄啼破玉人夢。仰看長庚配曉明。

和因基戲與中岩談論生死地獄有無之事

鳴者雷非時而默。酸者醋失時而醜。得時人智失時庸。非時而行與事觸。我愛淵明能縱放。歸去家釀葛巾漉。遠公約交取才達。不以異學分華竺。若遇今時顛而狂。言詞應作馬鳴喙。楚臣有才誇獨步。揚身無術遭放逐。近來紙貴莫字。○油買價高休夜讀。况我本家離文字。何勞勤力作四六。不生不生者生我生。心無機械馴禽畜。楚體雖旨有時變。岩泉以淡長無毒。不義而富誠可羞。无求而貧未爲辱。中岩文物仲靈後。斷絃又見鸞膠續。欲掄大厦崇宇梁。郢斤須采之良木。縱性野客一芥軀。何幸與君恭下屬。朝談暮論同襟期。卓犖情思忘禍福。有日不見心常思。一會万事皆知足。金壁於我如糞土。乾坤蓬廬可一宿。我貧不與君貧鬪。一着饒君君未服。奪角衝關无活路。十九道中空

走復。座客皆自洞中來。傍觀或哂或眉蹙。我心中悶不敢怒。欲笑難笑。哭難哭。一局未終。和盤翻。已无生。无死。无地獄。

圓照三昧圓心自在。此是圓通大士入理之門。佛世尊有云。非惟觀世音。我亦從中證。心思口演。而作是贊。八万四千清淨寶目。八万四千母陀羅臂。一心所現。與六道衆生同一悲仰。與十方諸佛同一願力。即自贊必成。滿大願。現比丘身。非他贊也。老僧據款結案。建武丁巳孟冬。四住。建長。東明。老僧。惠子。小師。四旨。首座。觀音。大士。贊後也。勝古人日中一食。夜間一寢。劍一片會。種一羅粟。紙後尙長。更欲下二轉語。恐有老婆心切之贖。待分付鉢袋子。時一併拈出。書于南游東歸之什後。曆應庚辰夏。首命再書。適病目不能工也。

五住建長叟 東明

東福寺古源

古源諱は邵元如幻道人と號す。古源は則ち字なり。又自ら物外子と稱す。姓は源。越前に生る。曾て南山和尚双峰國師に歷侍し。嘉曆年間奮然航して元國に入り。雪峰に登り。樵隱逸公を見偈を呈す。逸公之を稱す。又天台に到り。無見觀に謁す。時に語音の通ずる能はざるにより。來意を紙に示し。和尚の激發を蒙り。方廣寺に至る。夫より諸方に歴遊し。大都に在るの時。勅旨あり。僧百人を選抜し。宮中大藏經を轉讀せしむ。古源亦これに列す。一夜夢に母に見ゆ。醒めて後指を燃し。誓つて曰く。我母

天台に入
り無見觀
す和尚に謁

在さば。則ち身心康しま。た亡せば。則ち樂土に昇らん。貞和三年歸朝するに及び。母已に世を去る指を屈して。其日を計るに。乃ち夢に現するの時なり。後足利氏請うて。京都等持院に住せしむ。又藤原氏相延て。東福寺に補せしむ。未だ幾ばくならずして。播州法雲寺の聘に應じ。後再び東福寺に入るに及び。遂に老を南泉菴に養ひ。疾に罹り。偈を書して化す。時に貞治三年十一月十一日なり。年七十。

〔扶桑禪林僧實傳〕

東福寺古源元禪師傳

禪師諱邵元。字古源。號如幻道人。亦自稱物外子。出於越前州源氏。初謁南山雲公。雲一見器許。命待左右。及雙峰國師履其席。亦充侍司。嘉曆間入元國。登雪峰。見樵隱逸公。呈偈。有他時再上。毳門日一喝。何妨三日。擗之語。逸稱之。去上天台。禮無見觀和尚。以語未通。疏來意於紙。蒙觀激發。至方廣寺。度石橋。供阿羅漢。感茶中現華。又遊五臺。見斷崖。義于天目。參千巖。長于龍山。求法語。長劈胸一拳。曰。吾者裏無法語。師曰。謝和尚法語。遂依席下。自後長見師。必舉拳示之。初禮中峯國師塔。宿塔下。夢國師親爲說法。舉教中云。妙性圓明。離諸名相。師感激不已。留數月。常居少林。二祖菴。菴上有紫雲作。蓋時人怪而迹之。唯見師晏坐而已。會朝廷選僧百員。禁中轉大藏師。預焉。後居水

南山土雲
東福寺十
一世
雙峯宗源
國師は十
二世なり

月、閱藏經、條夢母氏、因燃指誓曰、我母若存、則身心康安、亡則超昇樂土、及東歸、母已去世、計其日、乃現夢之時也、貞和間、出世於大聖二香、嗣雙峰、既而幕府請住持、寺又藤丞相延補、東福未幾、有播州法雲之聘、及再住東福、遂逸老於南泉菴、貞治三年仲冬十一日、示疾書偈曰、未後一句、始到牢關、擊碎鐵壁、踢倒銀山、阿呵呵、擲筆而逝、壽七十

洞源寺崇珍

寺門榜して曰く、不許葷酒入山門と、古より飲酒食葷の禁頗ぶる嚴なり而して法を破り禁に背くの徒少しとせず、然るに洞源寺和尚寶山の若き真に生れながらにして法器たるものと謂ふべし、崇珍字は寶山、越前の人、髫童にして既に葷穢を厭ふこと甚し、父母これを奇とし、心竊かに佛縁の深きを感じ許して釋門に従はしむ、本國聖興寺普濟和尚に就き參禪年を積む、朝倉兵庫元勝洞源寺を創建するに方り寶山を延て之に居らしむ、即ち開山第一世なり、又旨を奉じて能登國總持寺に住し、普濟の道を唱へ、益道聲一世に喧しかりき、(日本洞上聯燈錄)

幼にして
穢を厭

雲門寺玄清

玄清字は一天、越前の人、薙髮して受具の後、慈眼寺通幻に參し、次に大徹宗令に見ゆ、後寶峰良秀に參し、其法を嗣ぎ、應永六年、能登雲門寺の法嗣となり、同七年五月十二日寂す、年四十七

建仁寺玉岡

玉岡字は如金、越前の人、其性澹泊にして、夙に塵俗を厭ふの志あり、別源の室に投じて薙髮し、執持すること多年、初め足羽郡弘祥寺に出世し、尋て筑前聖福寺の主となる、又天龍建仁寺等に歴住し、應永九年八月二十六日寂す、年七十一

龍澤寺梅山

坂井郡御籠尾村曹洞宗平田山龍澤寺梅山名は聞本、濃州の人、驛路に在りて往來の馬に水を飲しむること十萬、蓋し自ら剃髮せし師匠律師の菩提の爲にす、又釋門を慕ふて京師に入り、建仁寺孤山禪師に依て更衣し、行脚して大源に參す、一見之を器とし、頭陀の行を爲し、米を炊きて衆僧に供す、告節篤勵人の爲に心服せら

る適曠野に適て鬻體の草叢にあるを見て、蒙滯頓に除き歸て所悟を陳ふ、大源數則を擧て之を徴す梅山應對滯らず、則ち宗印を以て授く、從ふこと七年其髓を得たり、籠尾村に正壽と云者あり、龍澤寺を創建し梅山を請して第一世とす、次に加州に金剛寺を開く、敕請を稟て能登總持寺に應世す、山門に至て曰く大解脱門開四方八面來、祥雲影漠漠、瑞雲白皚皚、佛殿に佛を指して曰く唯佛自指て曰く與佛又辨して曰く賓主歷然誰是主云々

後藤尾村へ歸りて幽居す將軍、足利義滿公師の道譽を慕ひ刺史に命じて京都に來らしむ、辭して往かず、應永廿四年九月七日寂す法嗣傑堂勝能、如仲天閻、大初繼覺の三人あり、一門の教風大に繁榮す、(日本洞上聯燈錄)

〔越前國繪圖記〕

龍澤寺項

開山梅山和尚遷化より貳百七八拾年土佛觀音梅山和尚守本尊なり、或時幼童の甃に尿にて泥土をこね土佛とす、和尚是を乞得て尊敬身を放たず、或時諸國修行に暮て山林の矮屋に寄宿す、主人山賊なりければ斜ならず悦ひ、曉天に彼旅僧の仕立せし迹より途中へ慕ひ行きあへなく彼法師を害し衣裳を剝取り究竟の事よと悦ひ家に歸りけるに、僧の臥所に讀經の聲しければ主人恠み見

梅山背像
以密納
於寺以
秘藏

るに件の僧其儘居す、不思議に思ひ有の儘に語りければ僧も恠しく思ひ主と共に彼所に至り見るに首に掛たる本尊を害せり、山賊奇異の思ひをなし即ち和尚を師として遁世す

〔越前國名勝誌〕

竹内芳契著

開山梅山開本和尚是は能州總持寺の塔頭普藏院の大源宗真和尚の弟子なり、此寺に土佛の觀音とて御長二寸許の靈像座す、是は往昔梅山和尚洛陽六角堂の邊を通られけるに小像を作るを見て不思議に思はれ所望せられければ其中一體を與へけり、梅山是を受け禮しける間に造りし三十二體の觀音の像も十八人の小童も残らず消失けり、扱は佛作にやと彼一體の觀音を彌信仰せられける、或時山中にて盜賊にあひまさしく和尚切害せられけると覺えられしに少も其身に仔細なかりければ不思議也とて彼觀音を取出し拜まれけるに施无畏觀音の御首の邊に太刀創の痕あり、和尚心肝に銘しいよ、渴仰ありしとなり又一文錢と云あり、是は和尚修行の時今の長崎にて西國へ通る加賀國の商人に逢ひ一錢を乞ふに慳吝にして施さず、和尚彼商人の後ろに付て一錢を乞はむか爲に竟に長門國下之關に至る彼商人後を見かへり罵りてしり

べに一錢を投たり和尚戴て是より歸り玉ふ彼商人西國にて命を終るに遠國の事なる故知人なかりしに或時和尚の夢に彼商人來て申けるは命終る然るに吾一生の間慳吝なりし故少しの善根もなさざりしに依て地獄に落べきに究りし所に和尚に一錢を施し奉りし功德を以て地獄の罪を免がれ侍る願くは我後生を助玉へとて涙を流し禮拜して去ぬ爰に懇に弔はれけるとなり一文錢といふは彼商人の與へし錢なり (一文錢今猶同寺の寶物とす)

〔歸雁記〕 寫本

御籬尾といふ所に龍澤寺といふ古寺あり開山梅山和尚はいみじき奇特の聞えある僧なり修行し玉ひしころある民の家をやどり玉ひつれば、主の男いたく酒に酔て外よりかへり來て此僧をとめ參らせし事を怒り僧を害し參らせぬ、夜明け酔さめて後是を見るに彼僧もとのごとし、怪しく覺えて爾々の事問ひ侍りければ僧も又心得ず常に持る侍の所の觀音の力にてもやと妻をひらき見られしに、彼尊容二つにさらせ玉へり、あるじ驚き悲しみてやがて夫婦相共に髪を落し受戒し侍りしと申傳ふ、其觀世音今此寺にあり

洞源寺如欣

如欣字は怡雲、越前の人幼にして圓通山醫王堂に入りて、甘露泉の偈を讀み出俗の志を起し十八歳願勝寺普濟善教和尚に付て落髮し、寶圓寺直傳祖釋師に師事して印可を受け總持寺に出世す、後檀徒の請に應じて、越前洞源寺に主となる法嗣巨海印、放牛索、箇中遠、雪叟庭の四人あり

洞光寺良源

丹波國寶鏡山洞光寺澄照良源は越前國波多野の豪族にして文和三年十八日を以て越前に生る、六歳母を喪ひ洞光寺に入り天應和尚に就て得度す、是より刻苦參究多年問答みな天應和尚の意に適ふ、後師の後を襲ひ洞光寺を領す、平時、律身清苦法令嚴謹躬ら用を減して外に痴訥を示す是に由て四方の道俗歸依する者夥し、應永三十四年九月廿日逝く年七十五、法嗣玉山良石また能く法燈を繼ぎ洞光寺にありき、

(日本洞上聯燈錄)

盛景寺昌庵

庭訥を示す

越前大守盛景巨刹を南條郡に創造し莊田一千餘石を寄捨す時に昌庵ちやうあん悦丰禪師を聘して之か主となさしむ昌庵寺を名づけて盛景寺と曰ふ姓朝倉越前の人幼より出世の法を慕ふ遂に本國の願成寺に投して芳庵和尚に從て得度年滿ちて受具す芳庵一日僧堂に入て示衆し身心脱落の話を擧す昌庵之を聞き釋然として悟り流涕悲泣し衆を出て三拜す芳庵問ふ身心脱落の時如何昌庵曰く岸崩石裂芳庵曰く猶唇皮に掛ることあり昌庵曰く鏡かみ分ぶん金殿きんてん燈とう山答さんた月樓げつろう鐘かね芳庵深く之を肯ふ略中正長元年越前の龍泉寺を董し幾ばくもなく盛景寺に歸る一日疾に罹り自ら其起つ能はざるを知り法嗣蒼庵を召し信衣を屬して曰く是は是れ通幻和尚平日説法の時用ゐし衣なり吾か芳庵師歿に先ち吾に付する所の者吾今汝に傳へんとすと囑し畢つて歿す時に偈を書す曰く平吞三世佛卸おろ郤せき臭皮襪くさく流水浮雲歸去來回頭碧落一輪月實に嘉吉元年八月廿三日なり

(日本洞上聯燈錄)

龍興寺希明

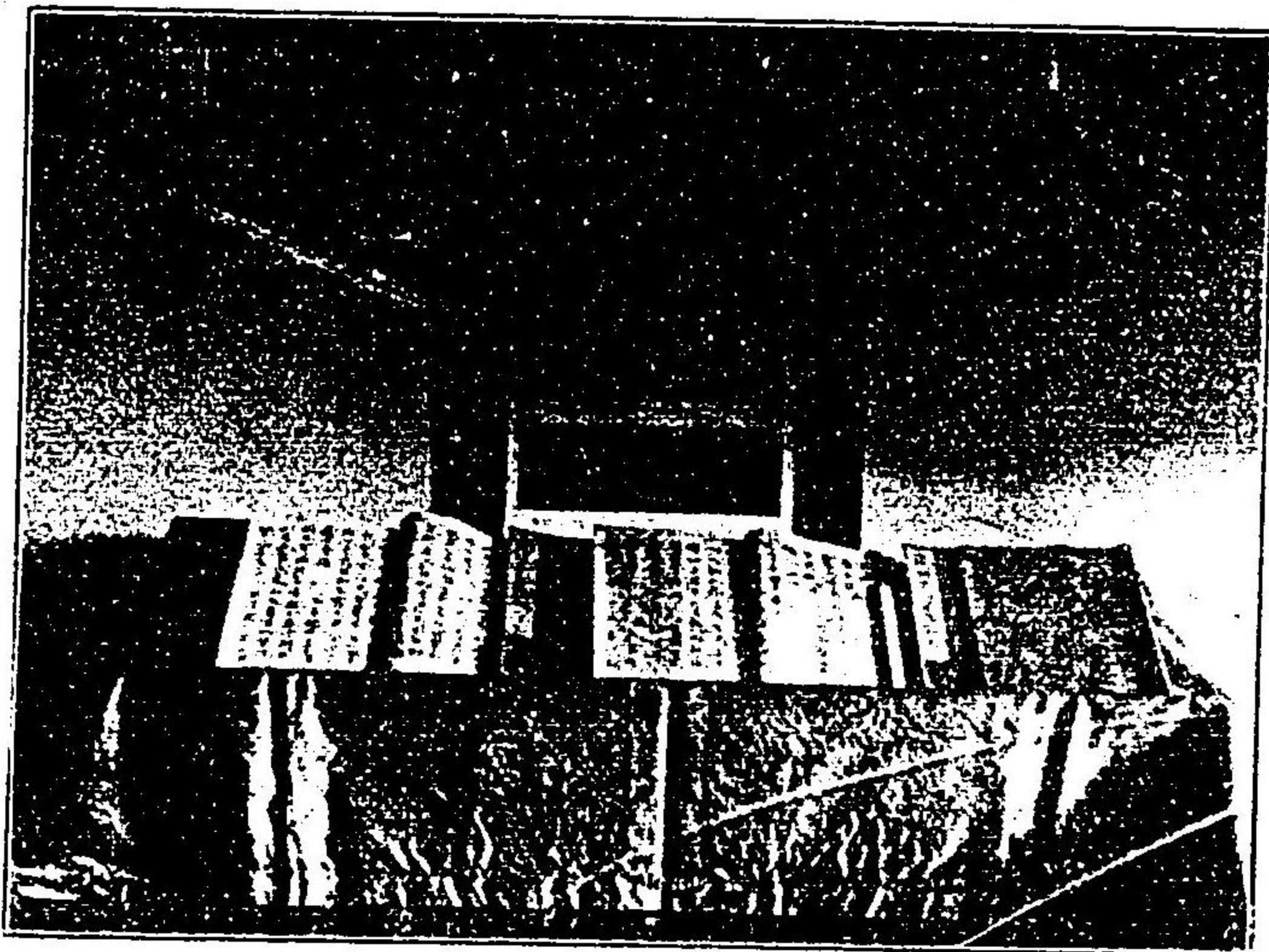
元首明なる時股肱良なりとは龍山和尚が希明禪師を頌せし句とす希明は越前

人天の眼目

龍興寺開山第一世にして越前味美井白の人姓は藤原母武田氏兒無きを憂ひ京都清水觀音に祈り奇夢に感じて希明を生む年甫めて七歳出家たらんことを父母に懇請し父母亦喜んで之を許し清水寺に入らしむ一日建仁寺に到り禪規の肅清にして則るべきを悟り景慕措く能はず衣を變へ衆と共に參禪研究す又龍山和尚の法を南禪寺に説くに臨むに方り龍山希明の容貌の峭拔にして且出語の肯綮に中るを見て大いに驚き激稱して曰く斯の子當に人天の眼目となるべく世未だ有らざる所なりと乃ち與ふるに道號希明を以てす後天真和尚に越前慈眼寺に師事し曹洞宗を勤究すること十年遂に印可を承く自ら曰く證を得ることは師に由り之を養ふことは已に在りと山中閑居庵を結び名くるに黙味を以てす數年の後緇素の懇請に應じ龍泉寺に遷りしが越前安居の藤原清長希明の爲めに龍興寺を搦造して之に居らしむ足利義政亦莊田若干頃を寄せ緇素遠邇を論ぜず希明の法徳を慕ふもの甚だ多し略中文安二年九月十六日寂す又法嗣禪龍宗穆融珍三人の若きも世に推稱せられたる法器なりき(日本洞上聯燈錄)

本向寺了顯

釋 門



本光坊腹籠の聖教と謂ふべし事詳かに次項の縁起にあり今猶其血痕
本光坊良顯の墓東西兩本山より特に建し所のものたり

本光坊良顯は明空と稱し、足羽郡市波村真宗本派本向寺五世の住職なり、越前大谷村に生る父を了真と云ふ、其頃坂井郡吉崎にて本願寺蓮如上人に師仕す、文明六年三月廿八日南大門の邊より火出て諸堂回祿す、時に上人教行信證を拜閱ありしに六卷の内三卷を机上に取殘したれば悲嘆限りなし、本光坊走り來つて之を聞き、聖教を取出し奉らんと衆の止むるをも聞かず、猛煙の中へ飛入り、聖教を持出んとする一刹那猛火に包まれ、自ら腹を屠りて聖教を腸中に納めて焼死す、其身命を抛ち祖師の遺著をして全からしむる實に忠實と謂ふべし事詳かに次項の縁起にあり今猶其血痕

浸染したるもの本光坊腹籠の聖教とて本山に秘藏したり、(上圖)故に吉崎山本堂の舊蹟にある本光坊良顯の墓東西兩本山より特に建し所のものたり

〔本光坊縁起〕能化平乗寺功存師藏

抑當院は 祖師聖人の高弟本光坊明空の開基なり、此明空上人は俗姓は大須賀四郎胤信と名く下總國住人なり、人皇五十代桓武天皇十七世の孫千葉介常胤の四男にして、鎌倉右大臣實朝公に仕して彼外戚の親族たり、建曆二年壬申歲正月十九日右大臣殿鶴ヶ岡八幡宮御社參の事ありて其儀式甚嚴重なりし事なりしに、其時此大須賀四郎胤信は調度懸の役にて歩行して供奉せよと仰付られけるに、胤信をもはく、これ吾身分に應せざる下劣の役なりと、憤を起し、又深く未然の禍を察せし事もやありけん、御前より直に罷り退き、信濃國の方へ遁れ隠れられける、公ふかく此人ををしみ、北條時政を以て尋出し歸參の儀を仰下さるといへども、胤信再び其志を改めず、そのころ幸に高祖聖人の行化に遇奉りて出離を求る心盛にして御弟子となり、出家剃髮して常隨の御弟子となり、本光坊明空と名く深く真宗の安心を極め六十五人の隨一となる、これ不可思議の宿縁なり、その後延應元年八月廿日聖人にさき立目出度往生の素

意遂られけり、其子明堅の代より第五代了顯に至迄當國吉田郡に居住せるに其了顯の代蓮如上人に隨ひ吉崎に移住せられけり、時文明第六年三月廿八日南大門の邊より火出て諸堂不殘、回祿す、其をりふし蓮如上人御本書御拜聞ありしに、八卷の内第四の巻を御机の上にとりのこし出玉ひて悲歎し玉ふ事かきりなし、時に本光房申上られけるは、其御聖教はいつれの御坐にて御拜聞被成候哉と委く御尋申され、我此火中に入て其聖教を取出し奉る事いとやすき事なりとて火中に飛入らんとせられたるに、傍なる人々本光坊の衣の袖をとらへとめていはく、火炎すてに四方滿繞れりいかんを此中に入て聖教をとり出し奉る事をえんやと、其時了顯とかくの返答に及はず、腰に帶せる刀をもつてひかへられたる左右のたもとときり拂ひ猛炎の中にかへ入れけるに昔人あきれて言はなかりける、かくて火勢漸衰ける故人々火をわけて尋求るに聖教御拜聞の處より二夕間を出て一の柱のもとに平伏して本光坊の屍のみ残れり、蓮如上人自ら御下知ありて燒殘れる疊ともに其屍をかき出し火を消して見たまへば、右の手に刀をぬきもち左の手に自ら腹を抱へて眼を見張て死せり、其腹を見れば、腸を擲出せるあとへ彼第四證の巻を乳の下へさし入

其上を抱られたり、其處にありあふ人々悲喜心にあまひ涙にむせび涕泣せざるはなかりけり、かく身命にかへられたるゆへに此聖教の今世にのこり玉ふ事にはなりけり、蓮如上人悲喜かきりなくまし、仰られての玉は、吾身一人の爲のみならず末世の御門葉往生成佛の爲に身命を捨られける事の奇特よとて、御なみだなから御手づから本光坊の面をなでまじくける、其時見張たる兩眼を眠れることく閉ふさかれけり、是本懷満足のゆへなるへし、上人御感歎のあまり御連枝同格の葬式を仰付られ御自身御燒香勤行あそはされける、是比なき忠勤のしるしなり、今の世に至るまで腹籠の聖教とて、御本山の寶庫に残りましますは了顯の命にかへられたる聖教の事なりけり、實に身に千焼を燃し又骸を火坑に投し玉ひし菩薩の因行にも類すへき志にあらずや、されば彼聖教に示しますます一念歸命の他力の眞因にて具縛の凡夫順次に大涅槃の妙果を證得する高祖の聖教を受る行者は、誰の人も身命をもをしむへからざる事そかし

上來舊記に依て其來由を略述す、具には本縁記にあり

維時安永二年癸巳秋三百回忌の法蓮の豫修するの刻時乃 法主往昔勤功

を追感ましく名香並に白寶若許を賜嚴重に法會謹修せよと高命を下し
玉ふ 龍谷侍講 平乗功存識

龍淵寺旗雲

拂佛魔塵。拭真如月。六十九年。傀儡擲の偈を書き畢り筆を擲つて茫然として逝く
者は誰ぞ。是れ武藏國龍淵寺旗雲祖旭禪師とす。旗雲姓は藤原越前の人にして慈
眼寺希明和尚を師とし、博記多聞論辯をた流水の如し希明之れを器とす。後新豐
寺天叟和尚に従ふ。初め諸嶽寺を領し次に慈眼寺に徙る。寛正五年下總國守成田
顯泰聘して龍淵寺に住ましむ。寺もと和庵禪師の創する所。多年荒廢に歸す。旗雲
黽勉これを回復す。文明年間越中光嚴寺に遷り亦之を新にす。明應元年十一月疾
に罹り其起つ可からざるを悟り廿八日病軀自ら浴を索め、偈を書して寂す。乃ち
遺骨を新豐光嚴龍淵三寺に分葬すといふ

論辯流水
の如し

越中光嚴寺上堂偈

古鏡一面黒似漆。從來不琢又不磨。忽然擊碎鈍槌子。喚倒毘耶維摩詰。
一句分明絕正偏。纒生擬議却經牽。木牛哮吼前村路。踏破三春萬里烟。

心境雙妄萬事空。鐵牛入海何由蹤。箇中消息誰敢識。半夜扶桑日夜紅。

龍穩寺玄彭

泰叟和尚
を躍倒す

天菴玄彭は姓藤原越前の人。稍長じて里院に投じて得度し、經論を窮覽して、諸老
に參見し、大泉寺の泰叟妙康の法徳高きを聞き往て之に従ふ。是より晝夜精勤し
て將に二歳に垂んとす。一夜入室す。泰叟乃ち竹篋を拈して曰く、只這水。特牛爲什
麼云云之に對んとす。泰叟慕直に打出して階下に到る。天庵忽然として悟り泰叟
を躍倒す。泰叟曰く這の風顛漢と。天庵筋斗を打して出づ。數日にして叟天庵の來
るを見て屏處より突出して曰く、正當與麼時如何。天庵曰く巖松無心風來吟。叟之
を然りとす。叟龍穩寺に住むに及んで天庵亦從ひ力を戮すこと數年。遂に印證を
稟け總持寺に出世し、龍穩の席を繼ぐ。文明十七年又最乗寺を主どる。上堂に廓然
無聖の話を舉して曰く二八佳人刺繡遲。紫荆花下囀黃鸝。可憐無限傷春意。盡在停
針不語時。上堂に觀音妙智力。能救世間苦。大衆を召して曰く觀音菩薩來る還て見
るや麼。案を擊て曰く還て聞や麼。良久して曰く杜鵑聲裏春老暮。滿地落花住不
留。一僧を勘して曰く張公喫酒李公醉。是何の意ぞ。僧曰く撞倒門前石敢當。又一僧

釋 門

に問ふ石女懐胎時如何僧曰く特牛生兒庵曰く是男是女僧擬議す庵掌す明應九年八月十七日世を謝して本山に塔す

(日本洞上聯燈録)

德正寺願知

願知は井上筑前守遠仲と云越前荒井の人文明三年叡山の衆徒四百餘人京都大谷なる親鸞聖人の廟を襲ひ堂宇を破却し燒き拂ふ時に蓮如上人宗祖の像を守り三井寺に通る衆徒勢に乘し宗祖の墳墓を破壊せんとす井上遠仲年比蓮如に歸依せしかば此舉あるを聞き身命を擲ち防ぎ戦ひ本廟こゝに恙なきを得たり其後衆徒の餘憤やまさりければ遠仲越前に歸らすしずて本廟を守護し遂に剃髮す蓮如其勳功を賞し法名願知及び威狀を與ふ是德正寺の開基なり大永七年丁亥正月廿八日寂す年八十九

〔德正寺小誌〕

洛陽德正寺の事歴を尋ねれば往昔越前國に清和源氏の後胤頼光の末葉井上三郎の苗孫井上筑前守祐遠とへる武士あり。祖師聖人北國御下向の時より一向専修の宗義を崇信す數代を経て遠仲と云へる人越前の荒井を領して祖

先の宗義を守る事最淺からず殊に如何なる不思議の宿縁にや武門の業を繼ぐと雖も累世父祖の遺詞を守りて専ら他力の一法を厚信して易往の直道師教に背せず深く蓮如上人に歸依し奉る事他に比肩す可きもの稀なり後に蓮如上人より法名を願知と賜ふ是れ實に德正寺の開基なり祖師聖人の御廟たる文永より文明に至るまで巍然として東山大谷に在せり然るに蓮如上人の御時に行化盛にして大谷の御本廟も年を逐ふて彌々隆盛となり參詣の諸人亦昔日にまされり茲に於て乎諸家の妬み發り山門殊に憤りを催し文明年中に大谷に日華門を建立し給ひしより山徒彌々憤をなし衆議して曰大谷は固より青蓮院御門主の境内なり彼祖流刑の昔を願ふに此地の居住遠慮ある可きの處慈鎮和尚の舊好を以て代々難教弟子となりて門主補任の子屬たるにより宥恕せし處近來の體たらく門下境内の遠慮もなく風闕の如く門を構へ殊に日華と名くる事實に傍若無人の振舞なりとて山上山下の衆徒其勢四五百計り俄に大谷に攻寄せたり于時文明三年二月十六日蓮如上人五十七歳の御時なりとて事既に卒忽たる間防禦するに及ばずして御堂遂に破却しけり折しも蓮如上人は御眞影を守り忍び落ち給ひ暫く隠れましめて遂に三井

戦て大谷
の本廟を
守る

寺の僧徒を頼み寺門に入給ひ、近松寺と云ふ三井の別坊に移り居玉ふ、是れ三井は山門の手に叶はざる所以あるを以てなり、然るに山門の餘憤尙已まずして大谷の御墳基を破壊せんとす、筑前守遠仲年比蓮如上人に歸依し、折節上京して御勸化に逢ひ昵近し奉る所、此舉あるに於て、蓮如上人に對して、如何なる淺間敷事をも致し侍らんと、其用心をさく／＼怠り無かりしが、案の如く山門より御廟を發掘せんとする事屢となり、遠仲固より心得たる事なれば、身命を擲ち防ぎ戦ひ、御本廟は恙なく守護し奉りき、其後尙御廟の退轉せん事を患へて、其身も故郷に歸らず、所領をも宗旨の重きに替へて、遂に剃髮して蓮如上人より法名を願知と賜ひ、且其信心の深きを感じ給ひて、御木佛を授與せられ、尙其勳功を感じ給ひ、御褒美ましく／＼て御染筆の御書を下し給ふ、其文に曰く、

今度本願寺依破滅、山徒之惡黨等、開山聖人御遺骨所欲掘返、願知依一身之才覺、全御番仕、不移轉之條、上古末代之名譽、神妙々々也、爲褒美、内木佛令授與也、難有存至子々孫々御骨所御番可仕者也。

文明八年正月十八日

蓮如 御判

願知へ

右御書は蓮師吉崎御堂建立の後、河内出口に御在寺の御時にして、其後實如上人證如上人にも深く願知の偉勳御褒美ましまして、同く御直書を賜り、御廟所永く子孫に傳へて、守護致す可き爲預け給ふに依り、願知茲に一字を建立し、願知了願願信祐願祐誓と、代々御番續せり、願知已來代々御廟守護し奉るに、折柄法華宗一亂の事あり、大谷の境内悉く灰燼に歸せし處、祐願才覺を以て舊跡を取立て、御堂元の如く建立す、其後信長公一亂の時、大谷の御堂再び退轉せり、蓮如上人より授與し給ふ御本尊、並に御影等深く隠し守る事、凡そ十八年にして再び大谷に移し奉る、其中前五年の間は粟田口村の且那總兵衛が家に移し奉り、其後同村常在光院の境内常圓か家に移し奉り、御尊骨も彼が後園に假に置奉りき、時又類火に遭ひ右蓮實證三代の御文書及寶物等焼失し終れり、然れ共、祖師の光明晃にして、蓮如上人より授け給ふ教行信證の要文等焼失せざりき、爾來大谷の御廟地一亂の後、須和殿の知行所となり、後又御壘所伊阿彌が所領と成る、時に四代祐願妻妙祐、大谷の境内退轉せるを救き時の所司代前田德善院

玄意法印へ訴達し、松田勝右衛門、味岡市右衛門を頼み、祖師御本廟の荒廢を慨き、遂に境内を再興し、御廟を立て、御遺骨を納め奉りき、是れ實に文明根本の御廟地なり。然るに此敷地は覺如上人御草創勅願の本所にして、乾元二年の院宣重ねて嘉元元年加賀守三善の傳達にて、王法公方の御朱印地となれり。然るに久しく御朱印絶えたるを以て、妙祐又之れを悲み、太閤秀吉公へ訴訟しける所、太閤其志を感じ、遂に天正十七年十二月朔日境内御朱印、同十九年九月十三日寺領御朱印を下賜され、永く御朱印所となりぬ。家康公知恩院御再興の舉あるに付、近隣の寺院悉く替地仰付られ、則ち太子堂は五條六條の中間へ、常在光院は天台宗なるを以て相國寺に移さる。我大谷道場の古御堂も二條猪熊いのくまに引移り、徳勝寺と號せり。聖人の御廟は、祇園の東今小路に替地仰付らると雖も、地所狹隘の爲鳥部野に替地拜領仰付られ、則ち祐誓の妹婿善了を留主居に指置き、祐誓自か猪熊に移り、寶物系圖記録等此地に納めんとす。時の所司代板倉伊賀守勝重より、替地御下知直書を賜ふ、今尙當寺に保存す。其後間も無く二條城廓御造營に付き、慶長五年現今の地即ち富小路四條に、南北五十八間、東西四十五間半の地を替地として拜領せらる。造營の後人家立並びて、遂に徳正寺町と稱す。

るに至れり。斯く大谷古御堂の移轉なるを以て、御堂及臺所等獅子口作りの構造にして報恩講の御初夜勤行並繪供華花束彩色の儀他寺に異り、持別の御免許有之、其他大鼓堂鐘樓堂の儀御本寺より一里四方には御免是なき所當寺は大谷の由緒淺からざるを以て、格別御免下され、尙又大坊主の首座仰付られ七晝夜には父子共に初中後の參勤を許さるゝ事他に例を見ず。祖師三百回御忌の砌にも總坊主の支配仰付られ、法服御免にて教如上人様御七條袈裟拜領仕りき。尙總坊主支配の儀一人にては困難なるを以て、江州上阪順慶寺善珍を同役に仰付らる。慶長八年より御本寺に七夕の御花盆の御燈籠始り、下間、粟津、徳正寺等出申されけるか、教如上人有馬へ御湯治之儀あり、七月八日御歸山に付花の枯凋を患へ立花を以てせしに、爾來徳正寺より献上の花は悉く立花の事と定まりしが、花の座の次第と云ふ事爰に生まれり。當寺を徳正寺を號するに至しとは、五代祐の誓妻妙正は、淺井備前守長政妹なるが、元龜四年長政死し、法名を贈正二位大納言徳勝寺殿天英宗清大居士と稱せり。茲を以て妙正は、太閤北の御方從二位内大臣秀頼公母公大宮院殿又太政大臣秀忠公北の御方太政大臣家光公母公崇源院等の伯母公なり。尙六代祐應は淺井右京大輔常政男則徳

勝寺殿の甥なり。斯る厚き縁故あるを以て當寺を菩提所とし、法號永存の爲にとて、德勝寺の號を稱來せし處、其後教如上人特別の思召に基き、文祿二年勝の一字を正と改め、德正寺と號するに至れり。(下略)

急度申入候。先日相定候通、家をも御こぼし可被成候。知恩院より度々被仰越候。早く貴所にも寺を可有御建候間、替地の儀は何方にてても可申渡候。恐惶謹言

月 日

板倉伊賀守

勝重判

大谷道場

〔大谷本廟沿革志〕 寫本

抑中宗大師の時、彼寛正法難の際、越前の願知越前荒井の俗名井上筑前禪禪髮髮して中宗の弟子となる兎徒を防禦し、靈墳を保護せり。後文明八年中宗河内國出口に居住の時、願知の前勞を賞して授るに佛像を以てし、且祖墳監守の恩命を賜ふ。依て願知庶を祖墳の側に結び、朝な夕な香華清掃の任にあたり、其の子孫了願願心祐善善了順次相續す。元龜二年善了織田氏の難を避け、靈骨を粟田中某家に藏めてこれを守り、廟

地は遂に武家の奪ふ所と爲り、他に轉ず。信長亡びて後は豊臣氏大に本山を外護せり。天正十七年朝命を下して大谷の舊地を復せしめ、且蠲稅の符を授與す。これ善了の母妙祐の懇請に由れりと。

〔本願寺沿革志〕 寫本

第八世勅諭慧燈大師蓮如上人弱齡以來崎嶇艱難身を興法利生に殉し、將に一宗を再興せんとするや、叡山の僧徒之を見て忽ち憎嫉の念を萌し、寛正六年正月來つて本廟を襲ひ、殿堂を燒く。大師眞影を護して、大津に遁る。惡徒更に靈廟を發掘せんとす。越前の願知之を防禦して、全きを得たり。既にして大師三井寺の南別所近松に小坊を建て、眞影を奉安す。近松顯證寺是なり。而して大谷の寺迹は回祿已後きりかへ墟きりかへとなり、終に靈廟の荒原に存するのみ。文明八年大師命じて願知及其の子孫をして永く靈廟を監守せしむ。

〔山州名跡志〕

正徳元年
坂内白隠著

京都富小路四條南にある德正寺は東本願寺末にして始め東山大谷に開き勝久寺と號す。開基願知姓は井上氏。越州荒井に住す。文明年中にあたつて叡山の惡徒當宗の興盛を妬んで親鸞聖人の廟郭を破却せんとす。時に願知在京す。走

向て退散せしめ大に忠勤をなす、大谷の法主蓮如上人感悦あつて彼か至末孫
他の法弟に不可混の書を授け、勝久寺に令爲維持、其子了願、願信、祐願、其子祐誓
か代に六條の本寺東に分るゝに至て教如上人に隨順して法を守る、今猶所安
置開祖聖人畫像の裏書教如上人の筆跡に明白なり、當寺中比所開在二條猪熊
其後二條の金城御造營に及て今地に令移、依て以て號德正寺町、此寺地昔細川
勝久の宅地なり、其井水今尙存せり、

心月寺大雄

大雄は亮磨禪師と云、越前の人、心月寺の四世の法嗣たり、天巖智樵に參して其法
を受け機縁語句皆其録を失ふ、獨り慈眼寺に入る時三門の佛事あり、拄杖に卓し
て曰く、一法の門外に在るを見ずと驟歩して入る心月寺もと、足羽郡一乘谷にあ
り後福井に移る、大雄天文十二年癸卯七月廿六日寂す、

大德寺宗歎

宗歎字は天啓、越前の人なり、小溪紹愆禪師に參究久うして印可を付せらる、天文

七年秋詔を奉して大德寺に住し百三世の法嗣たり、特に大智佛勝禪師の號を賜
ふ、二十年四月二十八日寂す、壽六十六、玉雲軒に塔す、遺偈に曰く、離卻京洛行脚能
州佛祖共殺活機自由と

(大德寺記)

大德寺江隱

江隱宗顯は、大聖國師古岳宗亘に繼ぐ、越前の人、破沙盆又は寒蝶子と號す、或は福
壽とも云ふ、天文二十年_亥九月廿一日敕を奉して入寺す、大仙院の二世也、大德寺
中に祥林軒を創立す、弘治三年_{丁巳}八月十九日後奈良帝特に敕して圓智常照禪師
と賜ふ、永祿四_西二月六日寂す、世壽五十六、頌に曰く、來時虛空七花、去時大地八裂、
拄杖子、轉機跳出龍峯窟、

大德寺紹越

祖心紹越は一休和尚高弟にして大德寺に在り、越前の人、朝倉氏の子、越前に空岳
庵を創す、朝倉氏滅亡の時寺亦燒失す、聞く周文の越に事へ會我蛇足の一休に全
する皆祖心の因由より來ると、眞珠庵古記録中朝倉より送りし文書數通有り、又

眞珠に祖心の像掛軸あり、越山主又は疎壁軒と號す、

大德寺古溪

諱は宗陳字は古溪自ら蒲庵と號す、大德寺百十七世の法を嗣げり、越前朝倉氏の子なり、幼にして穎敏大度あり、長して雪瀟禪師に就て得度す、後足利學校に遊學し、瀟公歿して紫野大德江隱顯和尚に謁す、一見其器なるを以て許して春屋と同寮練磨せしむ、其寮方六尺許壁間六物蒲團を置く、春机に對して書を閱すれば則陳坐禪す、陳讀めば春坐禪す、毎夜三更索を壁にかけ、兩人少しく寝ね、鶏鳴必起き、諷經す、未だ曾て一日も怠慢せず、笑嶺に參して功あり、天正元年九月勅を奉して大德寺の法嗣をつぐ、年四十二、雲衲來集し侯伯歸服す、十年豊臣秀吉總見院を紫野に創立し宗陳を請て第一世とす、平信長大祥忌拈香語に云ふ、三年光景多紛紛、半熟黄梁未足、云、莫問上方香積界、千花萬草木欣欣、十三年三月豊公根來傳法院を毀ちて其伽藍を泉州に移す、海得寺を再立す、請ふて開基とす、十八年十二月、千利休故あり豊公に忤ふ、是より先樓門を紫野に建て己が肖像を樓上に置く、公怒り曰、我れ常に山門を往來す、何ぞ不敬此に至ると、利休自盡す、四使を遣りて山門を

千利休自盡す

蘇生して法を説く

古溪和尚の自画像あり、大德寺に

古溪和尚の復讐方

破滅せんとす、陳對て委曲論す、懷中一劍を出して云、法の衰態此の如し、我唯死ありと、四使其雄氣を感じて歸りて豊公に答申す、遂に寺を毀つことを止む、十九年正月、大納言豊秀長立す、豊公哀歎、宗陳に懇請す、偈あり、榮辱昇沉入夢頻、閻浮五十有餘春、爲君誰贈還鄉錦、正月挑紅依舊新、文祿元年、大光院落成居こと一年、明年春紫野に歸る、先師に隨從す、市原常樂庵に隱る、慶長五年八月二日、病革る、弟子偈を需む、乃書す曰く、六十餘年胡喝亂、嗚、末後轉機不作一偈、筆を擲て逝く、三時の後蘇生し、說法常の如し、十二月、聖上、德風を敬仰し、大慈廣照禪師と特賜す、翌正月十七日、恬寂を示す、年六十六、著す所蒲庵稿二卷あり

古溪宗陳和尚花押

群賢押譜所載



〔望海每談〕

祥雲寺澁谷の廣尾にあり、大德寺派にして館中の三院より年々輪番持なり、始は麻布市兵衛町の先に有しが、丁酉の頃の大火より當所へ引移たり、開基は龍岳和尚なり、中、龍岳西國より出て東福寺の龍和尚の弟子にて、其の寺へ住居せ

釋門

し所に、關ヶ原合戦終て藝州の安國寺惠瓊和尚も罪せられ梟首に付て、此和尚は東福寺の先代のとなれば其首を取て葬るべしと龍岳頻りに申と云とも、大衆是を取らんことを恐れ、不得心也、依て龍岳一人思立其首を取埋め隠し、東福寺には出家たらんものは一人もなしと嘲弄し、五山派を捨て大徳寺派と成、大徳寺の廣照禪師古溪和尚には千の利休が木像の事にて太閤よりして御咎有しかば出寺せり、其後御免となれども歸寺せず、大徳寺の内の總見院をば弟子主甫に譲り、市原へ隠蟄し其居を常樂庵と唱ふ、後遷化に付ては弟子月岑に之を譲り常樂庵と號す、龍岳是より月岑の弟子と成を以て、古溪の横難の時若僧徒に不似合罪を得ば忽生害せんと志し、懷劍を嗜み給ふ、其刃後月岑方に傳へありしを龍岳譲り得しかば江戸へ下向し黒田家溜池の屋敷に暫時居所を持參し、其後肥後の妙解寺の住持は龍岳の弟子成を以是により今の肥後に有之候由、龍岳後年市兵衛町の先に一寺建立の時祥雲寺と號したり、世説に石田が首を龍岳盜取しより直に江戸へ月岑の同じ會下に有之、敬書記には石田に縁有故同心の僧徒之を盜み得たるに付敬書記理を盡し貰ひ得たるなり

大徳寺宗哲

明叔宗哲は大徳寺百廿一世の法嗣にして越前の人、院庵と號す、又宿庵子と云ふ、天正六年勅を奉じて入寺す、本山に眞乘軒を創す、後陽成帝特に靈燈普光禪師と賜ふ、慶長十年六月十六日寂す、壽七十六

福王寺日源

日源は筑後日蓮宗福王寺の中興なり、今立郡五箇村の人、出家して諸國に歴遊し、文祿の頃筑後下妻郡溝口村に至り、矢部川岸の土地肥沃にして水石清麗なるを愛賞し其村の古寺福王寺に留り、幾もなく忽然去り、再び弟子數人を携へ來り、始めて紙を製造し其法を村民に傳ふ、村民大に喜び相共に業を得、柳河侯立花氏の功勞を嘉し福王寺に田地竝に製造用の家屋器具等を給與す、因て益製造の業を興す、世に溝口紙と稱し諸國に出賣するとなる、慶長十四年十月十四日其寺に寂す、寂後其地に紙の製造大に盛となり、慶長中筑後侯田中氏の封土となり元和中久留米侯有馬氏の封土となるも舊例により器具等を給與し其業を獎勵す、元和、中肥後侯加藤氏寛文中筑前侯黒田氏いづれも師の弟子を聘して其法を傳へ、元祿中肥前の人納富某亦其法を傳へて業を開けり、後世師を九州製紙の開祖

製紙業を
授く

と稱す

(日本佛家人名辭書)

大徳寺宗璘

琢甫宗璘は、越前の人、大徳寺百四十九世の法嗣なり、慶長十二年出世す瑞光院の開祖也、瑞光院は義士の墓あるを以て有名なり今猶存す、寛永元年寂す、年六十一、偈に曰く、六十一年、苦屈苦屈、機前一喝、大地破裂、

六寶山世譜による

桃雲寺徐芸

徐芸字は象山、姓は三田村、越前の人、朝倉義景に仕ふ、寶圓寺大透、圭徐に従ひて祝髮し侍者となる、去りて諸名宿に歴参して寶圓寺に歸り首座となり、其の席を補して同寺に住す、後總持寺に出世し、永澤龍泉二寺に歴遷す、加賀前田利家の請に依りて寶圓寺に住す、慶長五年前田利長、高德山桃雲寺を扨し、師其一代となる、同六年宗富尼總持寺の三門を造り師に請ひて説法せしめ、其傍らに芳春院を構へ師を開山に招く、輪島の檀越、蓮江寺を扨し、師を迎へて住せしむ、師大透を開山とし、自ら次位に居し、後桃雲寺に退き、元和五年五月二十四日寂す、法嗣廣山、恕陽あり

(日本洞上聯燈錄)

茂林院清閑

福井曹洞宗茂林院清閑は、山川朝秀の嫡男なり、父卒後五歳にして出家し、大休清閑と號す、家祖山川讚岐守朝貞は、徳川秀康公に従ふて越前に來り、志比谷にて一萬七千石に封せられ、初下野にて山川千七百貫を領したり、故に山川を氏とす、是結城四老の一なり、元和六年八月八日朝貞卒す、年三十、其子讚岐朝重を上野南光坊天海僧正に託す、忠昌公の時、其事を白して藩に仕へんとす、許されず、去て關東にゆく、次子牛之助朝秀を藩に留む、幾くもなく天海寂す、再び藩に來り、長子内膳に四百石を賜はる、牛之助は府中にて僧となり、秋國と云、其子竹松は福井茂林院にて僧となり、清閑と稱す、

花もみちいろ香もよそにある庵は

清閑

あきはうしともおもはさりけり

〔越翁雜話〕

寫本

中島茂林院の清閑和尚は、俗姓山川讚岐守の曾孫也といへり、悟道の僧にて一

休和尚の風也、常にやぶれたる衣を着し薪など求めてうちかづきてあるさけり、或時瑞源寺へ行夜に入て歸られけるが道脇に大きな狼の居たりけるを足もとへのさくくと歩きよりければ、夫なるは狼か我は清閑なるぞ必ず食ふなといはれければあまりに平氣なるに恐れけん狼逆失けると也、此和尚にはさまくの話あり或時大橋の上を盡頭歸けるに殊の外腹もへりけるため、寺町のかたより小僧仲間連たる僧出來れり、清閑おもひけるは是はいか様法事の非時食に行くならめ路より行て見ばやと打つれて行ければ、吳服町邊のさも有徳そふなる家に入りたりつゝいて入ければ亭主出迎へ挨拶をなす亭主は彼寺の連來りし伴僧とおもひ彼寺僧は且縁の貧僧よびたるとおもひけり、さて佛前に經よみ非時の出たりしをしたゝか打喰ひ布施物も取納て彼寺僧に向ひ貴僧の御蔭忝しと一禮述て、足ばやに歸けり、また壽命院の住僧いつにても來り給へ蕎麥切まいらせむといひけるが、或時清閑ゆかれけるに、折節大般若轉讀なり濟候まで御待候へと内の者申ければ、只待も無下の事なり供に轉讀せむとて本堂に出衆僧の後にて聲をあげ、大般若くと暫はいひけれども腹へりむつかしくなりければ、をりくと早くくと被申けり予か祖父抔方へ

清閑の奇行

は毎度被見、夜嘶の會などありしとなり、いつも夜更てひとり歸られ候ゆへ御歸の道すがら氣味あしく心もとなく候と申人有ければ、いやとよ夜行には袈裟を逆に引掛てあるさ候へばいか成迷ひの者にも逢ふまじと答へられしと、出家の申さるゝ事故眞の袈裟と心得て法衣の徳は難有物に候と挨拶せしが能々さけばけさのさかさまは酒の事にて有けるとのことなり

波着寺空照

元和五年六月加賀藩主前田利長石川郡白山祠の爲めに鐘を鑄る、銘を空照に命す、空照は實に越前の人なり、曾て二兄あり長を少藏と云ひ、次を九郎兵衛と云ふ、共に藩の爲に戦死せしを以て、藩主深くこれを憐れみ、空照をして二兄の後を繼がしめんとす、然れども母これを背ぜず、二兄の爲めに菩提心を勤め遂に僧と爲り、去つて金澤に到る、前田侯之に地を賜ひ、乃ち波着寺を建て、後再ひ命あり地を小龍野に轉すと云ふ

波着寺を建つ

〔燕壹風雅〕 卷七

空照波着寺主僧、本姓九里前越人、有二兄、謂少藏九郎兵衛、少藏從我國祖闕死武州

八王寺役、九郎兵從能登侍從、死加州大聖寺役、以故瑞龍公憐其絕炊、立空照欲繼二兄後、然其母不肯、爲二兄勸、菩提心爲僧、且去南越、來金澤、微妙公賜之地、以建波着寺、此地横山忠次舊第地云元和巳未、再有命轉地於小龍野、今年六月、空照奉旨作石川郡白山洞鐘銘、迺今存者是也、蓋在我國初、而僧爲文辭、空照其嚆矢、此後密僧有金剛寺、義明、嗜文辭、貞享戊辰、作桑村山長樂寺、記記中謂、乾竺無畏三藏來開此山、又謂僧空海過之手、自雕俱哩迦像、以爲本尊、奇怪之談、不足信

白山鐘銘

僧 空 照

加州白山大神宮者、本地觀音圓通菩薩而出現、天神第七之宗廟、伊弉諾尊、尊者天照大神之母君也、亦考舊記、丁元正天皇、養老元年、感泰澄和尚之修驗、而垂跡於斯山、慈眼視衆生、誠哉、自示以降靈光耀于今矣、仰猶有餘者也、粵大守參議源朝臣利光公、發素願、命冶工鑄洪鐘、欽致明信、伏乞冥助、尤可喜尙矣、雲間昏鐘也、耳聞者忽聞聲、悟道花外紅音也、眼聞者必見色、明心唯庶幾令大鳴之警、祭祀之送迎、緩打之匡神樂之起止、寔其功用不遑縷陳者也、於是願主捧幣帛祝曰、君臣快樂、子孫安寧、銘曰、加州靈境、白山神精、鎮護國土、濟益民生、仰而可尙、經之以營、鑄範陳設、梵鐘新成、筍處高掛、蒲牢能鳴、寒山月落、豐嶺霜清、遺百八響、報長短更、鏗鏘夢破、殷殷耳

明唯君所異、懇祈致誠、武運延長、政治太平、德被四海、威及八紘、

元和五年六月吉日

願主參議從四位下源朝臣利長 多田有閑齋書之

後藤重正雕之 奥村快心永福盛之

西念寺祐存

祐存は幼名祐千代と云ふ、福井眞宗大谷派西念寺の住職也、下總國結城に生る、實は岡崎三郎信康卿の子なり、當寺もと結城川中島にあり、嫡女某岡崎家の御奥と勤めしに、卿の愛寵を蒙り、遂に懷妊す、時に家臣某々、竊に謀惡を巧みたるを以て、勤め居難がたくして、退て西念寺にありて出産す、奸臣等謀事露顯して、男女各處分せらる、後再び勤むべき様仰出されたるも、辭して出ざりけるが、その後信康卿の生害せられたると聞き、女悲嘆に沈み、速に剃髮して、陰ながらの菩提を弔ふ、其子を祐千代と號け、僧となして祐存と法名す、母子西念寺にありしが、徳川秀康公結城家へ御養子となられしとき、此事を承知せられて、祐存共に懇命を蒙れり、慶長六年、越前へ移封のとき、供奉したりければ、北莊觀音町に一字を造營し、敷地を下さるゝの恩命を蒙る、因て結城山西念寺と號す、今清川上町にあり秀康公の寄附の自然

岡崎信康の生害

自然石の觀音像

石観音像を寶物とす、かくて祐存は寛永五年戊辰十二月十七日寂す、年六十、同寺内に墓あり

〔西念寺記録〕

抑此観音石像之濫觴を委く尋れば人皇五十六代清和天皇十六代上州新田之郷に義貞之末葉に有親卿と申人あり尊氏天下の事なれば形を改め剃髮し給ひ持宗之僧と成り法名長阿彌と付給ふ御子三人あり第一を法阿彌と申し俗名を親氏卿と申す也第二遊阿彌と申し俗名を康親卿と申す第三は女子にて妙阿彌と申す也親氏卿參州松本村太郎左衛門之養子と成り給ふ其松平太郎左衛門に從來傳る観音無類自然之石像也太郎左衛門より親氏卿へ譲り又舍弟康親卿へ譲り給ふ又陽に岩津之信光公へ譲り給ふ夫より親忠公へ傳り夫より段々相傳る口傳也長親公七十四歳にて逝去し玉ふ猶是より秘す信忠公此人は其性馬鹿にて酒宴を好み武道疎なる故家來共隠居させる清康公廿五歳にて不慮の死を遂爲ふ廣忠公御病氣にて逝去し給ふ難儀し玉ふ事有天家康公より慶長五年七月景勝退治之被爲蒙命候節御拜領秀康様武運長久御守常に御信仰あり

天下和順

南无阿彌陀佛

祐天

日月清明

慶長六辛丑天清明十八日

西念寺祐存上

秀康様より御寄附 御直言石像大切に守護仕頼に不可爲令拜と御仰也

寶圓寺泰山

元和元年徳川家康公兵を總督して伏見に駐在す時に諸宗の徒を徴して城に入れて顧問とす、泰山雲堯も亦た與かる、雲堯は越前の朝倉義景の第三子にして、義景敗死の末四方に流寓年甫めて八歳、寶圓寺に入り象山和尚の扈從と爲る、後雍髮光國和尚に遠州の大洞寺に參し、又廣山和尚に越中瑞龍寺に謁し、量山和尚に加州寶圓寺に見ゆ、量山其脱落を喜て第一座に居らしむ、初め能登の長齡寺に住し總持寺に昇り芳春寺を兼攝す遷て桃雲寺に居る、大守の飯依亦た甚だしく法會を設くる毎に雲堯必ず上座法要を修む、さて家康の徵に應じ諸僧各祖脈の源を述べ寺院の本支に及ぶ、家康永平寺を以て曹洞派の本寺と爲さんとす、雲堯

永平總持
を兩本寺
となす

上書して曰く總持禪寺は後醍醐天皇敕願の名刹にして開山瑩山に命じて宗を匡さしむ、繪旨あり其略に曰く曹洞出世の道場に補任す宜しく南禪寺に相並んで紫衣を服し國家延長を祈り奉る、次て歷朝天子の宸翰皆斯の如し、仰き望む閣下請ふ先例に隨へ家康乃ちこれに従ふ、遂に永平總持二寺を陞せて兩本寺と爲す總持本寺と爲るものは實に雲堯の力とす、後大守の招きを稟て寶圓寺に遷る幾はくならずして永澤寺に轉し總持寺を董す、慶安元年正月廿七日入寂、時に偈を書して曰く、一彈指頃七十五年、末後行脚、掘地索天

(日本洞上聯燈錄)

寶圓寺徐天

死を前知
す

加賀國寶圓寺關空徐天は越前の人、性河合關空弱齡にして寶圓寺象山和尚に依て祝髮し夫より曇山和尚に護國寺に參し又泰山和尚に謁す、嗣て其席を主り桃雲寺に遷る寛永八年加賀大守中納言前田利常侯請うて寶圓寺に移らしむ、慶安二年正月元日坐して曰はく、吾今日行かん、とす各努力すべし、侍僧之を怪しみ曰ふ是れ如何和尚行脚の事か、關空曰く老病今年七十七、曰く末後事履、一句作廢生、

212265

關空曰く毛吞巨海芥納須彌、乃ち蒲團に倚て歿す、依て茶毘一炬に付し遺骨を收めて後山に葬れり

久遠寺日奠

身延山に
諸堂を造
營す

身延山久遠寺廿八世妙心院日奠上人は越前の人、字は義道、始め日傳と云ひ入山の際、奠と改む、萬治二年石川縣羽咋郡上甘田村瀧谷妙成寺より入山し在職八ヶ年、寛文七年十月二十三日寂す、年六十七、本山奥之院諸堂は往昔本山附近にあり、狹隘にして見苦しかりしが之を現今の所本山より一に移し、諸堂を造營し道路を開き、參詣に便ならしむ、又三光堂より水屋に至る、一帶の地、皆他領なりしを計策して、本山の所領たらしむ、山林に樹木を増植し、東照宮並に八幡神社を建設せし等功蹟甚だ多し、

欣淨寺總通

總通は越前淨土宗欣淨寺の開山なり、英譽と號し越前に生る、運正寺隨流に投じて剃髮受業し丹生郡白濱の欣淨寺開山となる、後伊勢山田に於て寂す、時に延寶

元年なり (淨土總系譜)

圓覺寺善龍

善龍は眞宗本派、福井圓覺寺二十三世の住職なり、祖先は冷泉天皇御子佐里皇子、越前に遷流せしめて西の山中に一字を建て、欽仰寺龍泰と稱せらる、もと天台宗なりしが、十七世學龍院了蓮如宗主に歸依して、本願寺末寺となれり、時に文明三年十一月廿一日なり、猶指圖を蒙りて本覺寺蓮光の子龍尊を後住として相續す、然るに當寺顯如宗主の時代教如に附隨して分派のとき東派となる、後福井に移り本瑞寺に寺務をとる夫より六世善龍の時本瑞寺不取締の事あり、役寺等打寄り之を矯正せんとすれども同寺は連枝格にして藩の重臣永見志摩守壇徒の一にして當國一派の末寺を統轄し其威嚴に恐懼して之に當るもの無し、善龍性豪毅にして學徳あり慨然として自ら其任を負ひ、侃々大に教誡を加へ事成就せしが永見己が名譽を毀損せりと爲し、深く憤慨し或日大勢を指揮して欽仰寺を破却し地所を取上げたり、善龍不意の亂行に遇ひ僅に本尊を抱きつゝ、舊縁ある西派本覺寺へ遁れ、本山及び藩に訴ふるも、永見兎角に故障を爲しければ、遂に

本瑞寺其
當時は坊
と稱す今
別の大谷
院なり

大野城主松平但馬侯へ言上に及ぶ、即福井松平光通公へ仰上られ其指圖によりて昔の由緒を以て本覺寺良慧、良秀父子の懇切なるにより西派本山へ轉派を願ひ出づ、寂如宗主其寺弊を矯正せし事を感賞されて祖師の肖像下賜せられ且福井西御堂地内祐乘屋敷の後を拜地許さるこゝに堂宇を再建し圓覺寺と改稱す、時に寛文三年十一月廿一日なりかくて善龍は忠勤に御堂事務を執りしが正保三年八月十六日寂す、虞明庵と云故を以て善龍以來代々別院内に住して院務を執れり

〔圓覺寺文書〕

(寛文三年六月十三日本願寺下間少進より福井本覺寺良慧宛の狀)

欽仰寺門徒御預り之通、尤思召候、併早々御案内不被仰上候處不念之様に思召候、右之門徒欽仰寺歸國之節、必御返し候様にとの 御意に御座候 恐惶謹言、

六月十三日

下 少進(花押)

本覺寺様 (同添狀)

御飛札辱致拜見候、如來命今度歸參仕候處御門跡様神妙に被爲思召候、由於御前少進殿被仰渡蒙御感難有奉、存候并御老中様何れも預御懇情辱存候就者本

瑞寺より何かと申候に付我等門徒貴院様へ場參仕候之由蒙仰候辱奉存候則門徒中よりも其段申越候近頃御不請可被爲思召候へ共出入仕法義無油斷相嗜申候様に被爲仰付可被下候則門徒中へも其通申遣候まへかたより貴院様御意懐に被爲思召候間猶以以來御目被下可奉願御引廻候而頼母敷奉爲御事に候實以御芳書之趣可冥加奉存候先様歸國仕候砌期拜顔心事御禮可奉申上候恐惶謹言

六月十三日

欽仰寺善龍(花押)

本覺寺様

猶以御念比之段 次第不淺候私は後候在洛可仕候間憚千萬に候へ共門徒中御引廻奉願上候御事候以上

(下間少進より福井西御堂役寺宛の狀) 任幸便一筆致啓達候先以 御門跡様彌御機嫌能被成御座候間御大慶可被思召候然者其地欽仰寺屋敷之儀淨善寺屋敷にかまひ可申候間祐乘屋敷と二三軒も間仕置候間祐乘屋敷之後に而寄のきの儀は其元にて御相談候而先御渡可被成候爲其如此御座候恐惶謹言

六月廿九日

下 少進法印(花押)

照護寺様

眞宗寺様

本覺寺様

人々御中

尙々淨善寺屋敷は廣望いたし候故別被下候折之ためにて御座候間祐乘屋敷のうしろと申事御座候坪敷寺中に總なみ程御渡し尤候以上一書致啓達候其地欽仰寺門徒貴様へ御預り之分町々幾人其外村之名書付申候其下に幾人と御しるし候而無相違様被致吟味被成此御返事に可被仰越候委待入存候恐惶謹言

七月九日

横 内藏助(花押)

下 少進(花押)

越前

本覺寺殿

青松寺秀的

釋 門

九歳の記
一讀の時
憶ふべく
誦す

江戸青松寺回祿の災あり、莊嚴の伽藍一朝蕩然として灰す、時に寛文戊申の年なり、秀的禪師前年本寺に移り幾ばくもなくして此禍に遇ふも心屈せず、却つて大雄寶殿を計畫し僅に一年にして落成、兩廡及び衆寮次第にして就る、凡そ十有一年、蓋し法徳群に絶する者と雄偉の資ある者にあらざれば爲す能はざる所なり、秀的は越前志比の人、父は山崎氏、母は波多野、九歳にして塾に就き、書史目を過れば、輒ち誦を成す、遂に永平寺佛山禪師に従ふ、佛山授るに正法眼藏を以てす、佛山又謂つて曰く、汝か志氣確實にして造詣人に絶す、予老せり復た成褫すべからず、大了禪伯といふ者あり、汝去てこれに見ゆべしと、既にして大了に參す、大了趙州洗鉢の話を看せしむ、半年全く入るに由なし、後ち高巖禪師に請益す、終に月餘にして覺えず、伎倆已に盡く、遂に二老垂手の處を明め得たり、初め永平寺に出世し、後上州の耕雲寺に遷り、又青松寺に轉す、寛文丁巳の年北遊、永平寺に上り、先師の塔を掃ふ、次に大了禪師を訪ひ、疾に山房に臥す、大了また來て伺候す、秀的危坐、欸話して別る、忽ち侍僧を顧みて曰く、我行かんと倏然として化す、時に延寶五年九月十八日、年五十有七、(日本洞上聯燈錄)

月照寺流安

流安は生蓮社長譽と號す、延寶七年五月出雲淨土宗月照寺の開山なり、姓は岡村、越前大野に生る、隨流に就て剃髮し、戒を受く、出雲松江に出て、月照寺を創立す、延寶七年五月二十日寂す、(淨土經案譜)

誠照寺秀誠

眞宗誠照寺派本山十五世秀誠は秀山筆蹟の子なり、一名念智と云ふ、宗義擴張に功績あり、本山中興秀如上人と崇む、能書にして名號殊によし、元祿四年辛未十一月六日寂す時に五十歳



藏幅寫

小泉了諦氏

本遠寺日近

日近甲州日蓮宗本遠寺第四代なり、日近字は舜說、常寂院と號す、越前の人なり、寂照院日乾の外姪にして、心性院日遠に就きて剃髮す、飯高談林にありて教化に盡

能書の琴
あり

龍華寺は
東海の名

越前人物志 中巻
百八
すこと殆んど二十年、貞松寺主席を空くするに方り請を受けて住す、後甲斐の大野山本遠寺に主となり、大僧都に補せらる、晩年駿河有度郡村松里に觀富山龍華寺を造營す、元祿十年閏二月八日寂す、壽八十四、平素讀誦算なく經を寫し佛を刻せり（本化別頭佛祖統紀）

法林寺惠南

鯖江町眞宗誠照寺派法林寺惠南、一に圓智坊と稱し淨榮の子なり、本山法主秀誠秀海秀如三代に歴仕し、特に木蘭色九條袈裟同色衣白地金紋輪袈裟を法主より許され世々之を襲ふ、本山曾て豊臣に寺領朱印を引上げられたるを復舊請願せんとの志を起し、徳川幕府へ願出づ幕府許さず成就せざれば歸らずと決心し江戸に滞留すること三年、旅費に盡き苦辛慘愴遂に乞丐の姿となり、東叡山の境内に起臥す、其常人に非らざるを輪王寺宮の知し召す所となり幕府へ紹介の勞を賜はる、終に享保三年戊戌七月希望成就して歸國す、其節幕府大老老中の方より書簡あり

一筆申入候、今度誠照寺首尾能寺領御朱印等拜領且於東叡山紫衣頂戴段々首

乞食姿を
願望を
透す

尾無殘所仕合珍重之事候、彌息災可爲歸寺と察入候、此度在府中彼是其老世話故と大悅申儀候、彌可爲堅固存候隨而粕漬鮒一桶令投進候、恐々謹言

九月十四日

本 隱岐康慶(花押)

法林寺

なき跡のわすれかたみにもなれかしとしころ手馴し硯りやうしを
くり候とて和歌二首

いく千とせときはの石のなもふりし

よはひを君に添んとそ思ふ

としころはあかすむかひし硯の海に

わかちもかけはうつりもやせむ

書札之趣得其意候

念 智

七月十日

秀 誠(花押)

惠南方へ

轉 門

是秀如上人より贈りし賞品の添狀其外本多筑後守太田攝津守本多下總守の書翰あり惠南享保九年甲辰十一月六日寂す時に年六十八

眞福寺實貫

字は泰音號は梅國越前丸岡の人江戸新義眞言宗眞福寺第十二世實積院快心に隨ひて剃染受戒し四度行業を修練し智積院に掛錫す奥州守藤原公師を龍鳳精舎に請し待遇優渥なり詩書を討論し古今を商確し往來して虛日なく公和歌を善くし書に巧なり師亦書を善くし意氣相投す未だ太平御覽を得ず太守有司に命して長崎に使はし清本の御覽三部を得一本を師に賜ふ享保三年十二月二十六日寺社監土井伊豫守師を召し四年正月十九日眞福寺に住せしむ享保四年七月二十八日寺社監戸田山城寺封戸の朱印を賜ひ五年四月六日寂す著作寶鑑纂鈔解八卷同序注一卷付法傳纂解鈔六卷性靈集便蒙鈔十六卷同文考一卷同序一卷同考語五卷三教指歸鈔九卷櫻陰廡談二卷光明眞言照關鈔纂靈鈔并拾遺十九卷延命地藏經冠註二卷あり (新義眞言宗史料)

太平御覽
を賜はる

勝授寺峻諦

峻諦しゅんたい名は寂清坂井郡三國町眞宗本派勝授寺第九世の住職なり寛文四年甲辰福井本覺寺に生れ延寶元年十歳にして入寺す幼にして穎悟笈を京畿に負ひ能化演慈院知空に従ひて佛典を修行す其師に事ること謹厚恰も奴僕の如し貞享五年九月寂如法主其學を嗜むを聞き紫柏語録を訓點せしむ其博覽強記を賞し宗祖自作の像及び白金廿枚を與へらる業既に成を以て弘法是れ任とし育英を事とし嘗て楞嚴經を講ず知空書を贈つて之を稱し末世の法鏡と曰ふ法主進學圖の三字を書して之を賜ふ享保七年正月五日寂す年五十八著す所大無量壽經會疏觀

知空は江
州高宮園
照寺住職
たり

紫柏語録
を訓點す

越人
峻諦

筆蹟

諸江照流氏

藏幅寫

經疏會疏眞宗橫堅圖義開持記引證北窓偶談祖德頌等なり其親に事へて至孝謙德殊勝にして奇迹甚だ多し

〔峻諦詩稿〕

寫本
勝授寺藏

叢林夏日自一言至十言

釋門

寺寺無憂無喜。醫王丘古佛地。開月照幽。清風拂智。寂然別勝遊。泊如常熟睡。雖慕
衡廬朋儔。更羸陶家幼稚。吟詠何覓拙鳩。風景時嘯古人詩。雀羅任他設柴門頭。
蚊蟻多隙奈燈前。魅恨短宵數十年。役詭謀。樂長月一兩歲。又依倚。短宵長月總是
江水之流。朝暉夕陰。贏得塵中之瑤。

(倚四歌三十首中抄出)

憶孝情

檐間乳燕屢來往。巖洞鶴雛和母鳴。孝思天眞詎得遮。滿襟愁淚日盈盈。
恩光赫赫塞天地。欲儀形容絕語心。賢聖垂垂千萬軸。辨明孝道更幽深。
墨湛於萬河之濤。筆禿於千兔之毫。使逸少書賈誼。辨何殫慈母一般勞。
華藏初開百行本。微塵戒寶由此恢。後人勿謂无生佛。父母自是活如來。
佛日欽光双樹林。感懃願命慈恩深。十月三年萬般苦。四海蕩蕩同古今。

本向寺祐忍

足羽郡市波村。眞宗本派本向寺。十二世祐忍は祐玄の二男なり。幼名猿丸と云ふ。そ
の性豪膽。吉品公同村若宮ヶ淵にて石火矢を打込れけるに。俄に烈雷暴雨四望暗

經云世若
元佛善
事父母一
者即是
事佛也

藩主の危
難を救ふ

黒たり、一同騒動す。祐忍公の身の異變あるを知り、七條袈裟を持ち走つて公の身
を掩ひて守護し、其危難を御籠の中より救ひ出し、抱きて寺に歸る。公其厚意を喜
び、地所を賜はらんとす。れど辭すたゞ諸役殺生禁斷あらんことを乞ふ。遂に五ヶ
條の制札を定めらる。又昌明公より紺紅の末廣を賜はる。袈裟は茶色にして、金雲
鳥の丸散し模様紫紐を付す。是寂如法主の着せられし寶物なり。同寺に祐忍像あ
り、高さ二尺五寸。羽織を着せし姿、福井隆松寺にあるは同寸にして、法衣姿也。是公
が江戸へ參勤のとき、駕の中に伴れしもの。福井に同寺の支坊あり。前流を祐忍川
と云ふ。是祐忍が水に不自由の話を聞召されて、新たに支流を設けられし者なり。
以ていかに寵遇を受しかを知るべし。祐忍享保十年正月朔日入寂す。年九十五歳。

〔越翁雜話〕

吉品公御代若宮ヶ淵にて御秘藏の鶴沈みて行がたし。れず依て大に御立腹あ
りて此淵の底に何かくせ者有成べし。石火矢を打込べしとて、すてに其用意を
なし。公にも御覽ありて、彼石火矢を打込せられると、淵の底わさかへりさしも
晴天なりしに、俄に黒雲舞下り、雷御乗物の上に落かゝり、夥敷こと中々言葉に
述難し。依て御供の面々皆、刀をぬぎ御槍長刀の鞘をはづし、御乗物の上に置

隆松寺四
世下道和

けり其節宇坂本向寺の住僧祐忍坊川をよぎ御見舞に参り七條の袈裟を御乗物に打かけしと也其節阿波賀の春日大明神に御祈誓ありしといへりさて漸に雷もしづまりて御歸殿ありけり其節御供の面々に生たる心地なく面色土の如くにて有けると也されども公雷しづまりて後中村太郎左衛門に仰けるは先刻の雷鳴は餘程つよかりしぞと有けると也祐忍坊は其節より恩遇あつく御夜詰などにも出けると也彼法師の像を御刻ませありて江戸へ被召連けるとなり其像は今鹽町隆松寺にあり隆松寺は以前御伽僧にて有ける故預り置とかや本向寺の院家に成たるも公の御蔭なりといへり隱居して落合祐忍といひしにやこの法師正月十四日に牛に乗て本町へ出けるといへり滑稽のみの法師にもあらざるにや落合祐忍傳來の采拜紙の法などある也祐忍の像は大久保氏にも拜領して所持有なり

宇坂市波村

本向寺

定

一寺内門前諸役免許事

- 一從本寺相定寺法者勿論當寺從先代相傳來寺法之儀未寺等不可異儀事
 - 一寺内不可殺生事
 - 一於境内不可剪採竹木事
 - 一不可寄宿狼籍事
- 右條々堅可相守此旨若有違犯族者可處罪科者也
仍而下知如件

貞亨五年九月

昌明

(朱印)

〔眞雲草紙〕

松平慶永著本

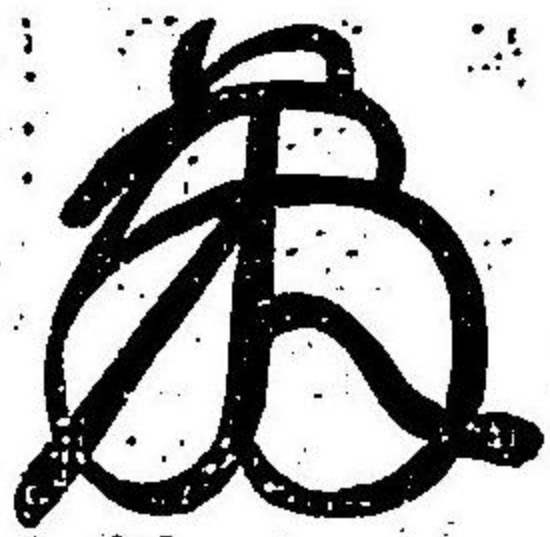
松平吉品

昔探源公南川若宮淵に大鯰の住居せしを聞玉ひて火矢を水中に射放ち玉ふ歸途大暴風雨にてあり市波村本向寺へ立寄りせられ本向寺宗門徒御供申て歸城し玉ふとかの傳説あり又鯰が坊主に化して本向寺へ参りしと云事もあり全く無根の説に似たれども公の若宮淵へ火矢を射放し又此日歸途大暴風雨ありしは無間遠事なり然れども鯰の化したる杯はとるにもたらざる説なりと國事叢記に見えたり

釋門

誠照寺秀如

天顔を拜
をし給はる
を賜はる



秀如上人

筆蹟花押

誠照寺派本山十七世秀如、父は膳所城主本多隱岐守康慶の男、十五世秀誠の嗣となり、元祿十四年五月参内して天顔を拜し御紋付輪袈裟を賜はる、享保三年戊戌七月幕府徳川吉宗公より寺領並に境内諸役免除の朱印を申し請く、天性能書にして名號殊に妙なり、享保十四年己酉十二月六日寂す年五十四

普門寺空念

足羽郡南山村曹洞宗普門寺の開基空念、俗姓は寺木甚左衛門、南條郡八飯村の人、十二歳のころ福井に出て、槍術師範藩士荒川彦太夫高吉號トの若黨となり、力量人に勝れ、槍術を習ひ、鷹をよく餌飼するが故にト順ト之を愛し、外出必ず寺木を伴ふ、鷹御免なりければ時々鷹を居まさせて山野にゆく、或日鷹の雁をとりて常の如く首をしめけるに、いかなる故にや死せずして甚だ苦痛す、其雁の涙一滴已が足

雁涙火の
如し

後ろを向
て大悟す

洪水を泳

の甲に落けるに其熱きこと火の如し、是に於てか發心し熟ら思ふに人間の生を受る一生朝露の如し、然るに其命さへ惜かるに同じ畜生の生を殺して樂む事やあるとト順に向ひ其心情を訴へ暇を請ふト順聞てうち留たく思へども斯思込たる堅固の心を翻さむともあるべきやはと望にまかせ暇を遣はし孝顯寺の紹介にて府中金剛院朝泉和尚の弟子となす是より空念と改め禪學を修すある日途中にて甚左衛門と呼ぶ者あり己がもとの名なるが故覺えずふりかへりて應と答へしが忽ち大悟せしとなむ嘗て荒川に勤めける時猶母一人ありて食しければ、日數を約して母を省すさて歸る日連日の雨なれば定めて洪水の憂あらむ、今日一日滞在せよと勸むれど主人に約束せしなれば家にあらば母主家にあらば主命をひきがたくたとへ死すとも参らんと出立しぬ、母云ふ老身に憂目を見するとの歎しは勘當すと言放つさて寺木は所々の水をわたり殊に福井の入口江端村邊一面海の如き洪水を泳ぎて辛ふして歸邸す、荒川の一同驚き、今日は歸らぬと思ひけるにと其物語を聞きト順さても勘當を受けて迄約束を守る、清庵率直と大に感じ使者を以て母へ詔言しければ母も一段の怒りに汝が命知らずを可愛さの餘りに爲せし事とて却て其無事を歎びけるさても空念は其後母に死別

鐵履て種
國す

普陀洛山
の觀音像
を感得す

身投男を
救ふ

れ兩親の菩提の爲めと諸國へ巡錫し法華普門品一部宛を奉納し、記録の印帳數十冊を笈の中に納め鐵の足駄を穿ひて首途す、時に元祿三年三月十八日なり、先若狹近江五畿内より始め、六年正月には薩摩の法等寺の案内にて河邊郡加世田の外城日新寺に宿る、其夜沖の波間に光明あり傍人云ふ龍宮の満千の珠ならんと、空念海に入り之を取らんとせしに忽ち梶音に夢覺めぬ此に觀音の靈像を感得し笈の中に安置し、是より駿河の富士の裾野にいたり宿かる處もなく夜更ければ木かげに休み、笈中の小鍋にて飯炊んとて水を求めんと彼此あるくに、年若き男一人あさましげなる衣装して佇立せり、何人にや飯にても振舞んと云ひければ近づきよりぬ、其顔を見れば乞食にもあらぬ由ありげなれば、問糺すに江戸に住する旗本の嫡男色道に迷ひて親の勘當この有様と物語る、空念憐れみもはや本心に返る心はなきやと云に、斯淺ましき成果にて一錢の貯さへ無ければ、谷川へ身を投ぜんと思へり、空念さるにても痛はしき事かな笈の中金子あれば參らせん、男驚き知らぬ御僧に御惠みを受けていかゞはせん、我運命の懺悔を爲してせめての罪業を滅ぼし一遍の御廻向にあづからむと思ひしのみと言はば、空念怒りさても言由斐なき心かな我こそ三界無籍の身、和殿命あらば本領へ立歸る

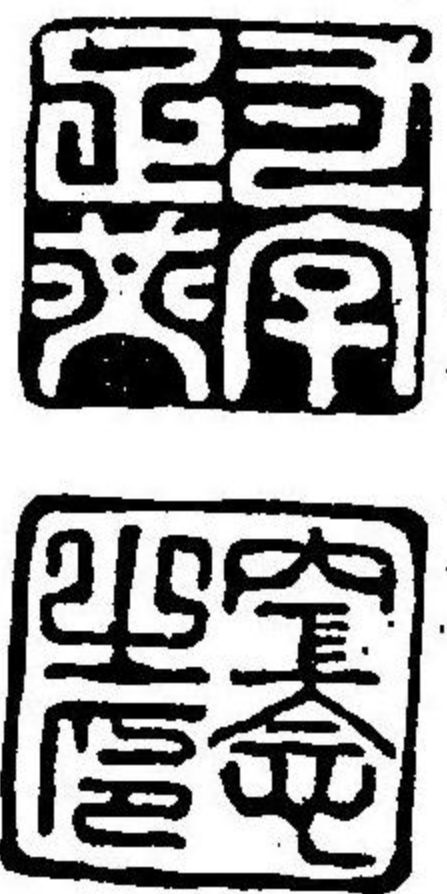
東海寺萬
和尙に
關す

道もあるべしと説得す、男涙を流して金を受け、生涯此御恩は忘れず御僧何處へ志し玉ふやと問ふ、されば東國を巡りて品川東海寺萬庵和尙に謁し奉らんと思ふされど和殿と再會無用なりと云て別れける、さて男は江戸へ歸り親類に頼みて詫入れば兩親もはや此世に亡き者と思ひたるが聖僧に助けられけるを喜び、毎日東海寺に使をして空念を待けるが、程經て寺に來り萬庵和尙にあひ又彼男の親の招きにも黙しがたくて往ける程に、大に喜びくさくさの饗應を爲し幾月にて滞留をすゝめけれども、修行の身の早暇申さんと、別に臨み笈中の觀音の靈像を物語るに主人は此事を桂昌院殿の御聽に達しけるに、參拜なされたしとの事にて徳川御奥にて開帳を爲す、何か望みあらば申せとの事に廻國に船場にての困難を言ければ船切手を下されいろくくの引出物を賜はりけるを受けずして、又奥州路へと巡錫す、さて此旗本と云は加藤越中守とて桂昌院殿の家老にして、此男改心してあとを嗣き榮えけるとぞ、さて萬庵和尙に謁したるは元祿十年六月の事にて其時の送別詩あり左に記すかくて空念は十八年目にて歸國し、足羽郡花堂はなどうの山に庵室を結びて住けるを參詣の人夥しく、元來花堂山は御坂とて雁鴨網打の藩主の御場所ゆゑ障りありとて同郡東郷の南山に新に地所を賜は

井水を持
去る

りける時に享保三年七月なり、いよ／＼南山へ庵を移すとき、かねて花堂山に佛
供の爲井を掘て清水の湧出ければ、いよ／＼南山へうつる時近傍の人々に向ひ、
此井水は取て参りますと、暇を告げてゆく、さて南山の上に井を掘るに忽ち清水
湧出づると同時に、かの花堂の井は水涸けると、人にて奇とす、享保十六年七月十
五日寂す、年七十七、正光空念墓同寺境内にあり、又遺物數種あり、綠質大雷斧、石器
鐵履、菩薩結緣帖、錫杖六尺五寸、笈高五尺、等あり、空念は著名の豪僧なり

正光空念拜



筆蹟

普門寺所藏

寫經奥書

〔普門寺文書〕 元禄三年

此空念我等弟子紛無御座候、諸國回國仕候、若何方にて相果候共、則其所にて御
取置可被下候、國本へ御届必々御無用御座候以上

越前府中 禪宗 金剛院 印

一空念拙僧剃髮弟子禪宗紛無御座候、若何方にて吉利支丹宗門之訴へ於有之
者、拙寺罷出急度、時明可申候、仍而如件

〔江陵集〕 卷三 庵著

越前府中 禪宗金剛院 印

送空念道者詩

噴濤之魚不生、湫越微武夫多赴赴、借問驍勇今有誰、空念道者膽如斗、壯齡蓬髮著
方袍、兩脚生風無伴、耦履險臨冥不覺、艱塊看五嶽、倅培塿朝披莽蒼、森陰崖鐵錫不
攝、熊虎吼、按行鬼窟、扣揉宮欲、駕六螭、鞭電母、東嶽一穴閉、仙靈千古稀、人窺洞口、前
年襄裳入、凌兢石滑、苦澁勞踐、疾風滅炬、里霧腥、瑟縮寒泉、鳴左右、躡輿不能涉、塗
洳、遂巡歸來、惆悵久、每說數日、踰山深、萬木蕭森、絕飛走、爛表松皮、當稊糧、霑濡風施
眠、巖藪今年、東邁覽仙臺、歷跨諸藩、極南部、蝦夷靺鞨、豈謂遐契、丹阻絕、徒回首、嗟予
壯齡、夙枯羸、空披圖籍、面牆牖、懷古難、摩神禹碑、何時相攜、攀岫嶼

眞蓮寺圓環

敦賀眞宗大谷派眞蓮寺圓環は、大阪最勝寺に生れ、三十一歳にして當寺に入り、法
名圓環、又超空、今日庵釋道中とも云ふ、幼より歌道を好み、七歳初て歌を詠む、最も
宗學に精しく、眞如法主の前にて三經を講す、法主其賞典として、六字名號念珠を

七歳歌を
詠す

釋門

賜ふ享保十九年甲寅五月二十一日寂す年三十九京師講堂にて本山より大谷に
墓を建つ門弟二百八十名加賀能登越中江州等に多し著書あり二尊二教圓圓喻
等なり

〔今日庵和歌集〕

元文五年二月
角鹿環戒撰

題しらす

超 空

こゝろひる筆のはやしにもろ人のこと葉のはなの春やたつらひ
春やけふこえて關路の名にしるさかすむ行衛もひさしの原
春も今にほひそゝむる山の端の霞にこめて明る日のかげ
磯山は暮行まゝに物とほくかすむ千ひろの春のゆふ波

山 霞

わきてまつ春のちきりやむつましき霞にこもるいもとせの山

峯 霞

あもかけをまつさきたてゝ花はまたとほちのみねに霞たなひく

野 霞

旅人もふみやまよはん春ふかく霞む生野のみちのゆく末

河 霞

いくひろそかすみの衣そめくゝてほすやさほちのすゑもはるかに

橋 霞

浦波もそらにやかよあさほらけかすみにわたす天のはし立

江 霞

幾しほかなみたちかさね難波江やかすみそみつのうらもひとつに

瀧 霞

水かみはをとばかりして落瀧はかすみをくゝる瀬々のしら波

河 霞

春は猶くれて行ともみなせ川なかれもやらしふかきかすみに

竹裏鶯

のさちかきかこひの竹に夜をふかみ寢覺をさそふらくひすのこゑ
題しらす

我宿の文このむ木に千代かけてはつ音もかをれ谷のうくひす

子日松

釋 門

世々かけてためしにひくも二葉より松はこと木のたくひやはある

水郷若菜

かはちかくすめる里人はよそよりもまつ初若菜のみはやすらし

澤若菜

世々かけてふるの、澤のわすれ水わすれすはるのわかたつむらん

餘寒水

寺にあへすみねのみゆきのとけてしもなかれはやらてまた氷るらん

絶ておとつれさりける人のもとへ前栽の梅の花を折てやるとて消息の

ついてによみておくる

そめてある心のいろにむめのはなたもとにうつせよしあさくとも

題しらす

世は春のかせにやなきの糸による道のちまたのゆくえさためつ

閑居花

さすかなほみねのあらしもさゝわひぬうき世のはなのにほふをりく

ひさしくおとつれさりける人の花のころ來りけれま

つれなさをはなにわすれて蓬生のつゆのやとりを人やとひけん

暮春

もろひとのをしむわかれにゆく春もいまはかすみのそてやしほらん

〔超空師行狀〕

師諱圓環、字了輪、號超空、攝州浪華産也、俗姓佐野氏、其先世信州佐野名閥也、幼不與群兒戲、常默然獨處、六七歲稍知賦和歌、八歲離乳母、心潛悲、偶見櫻花、詠和歌曰、小櫻乃色波、白色名爾負波、乳滴乳母波、姥櫻哉、按小櫻蓋自比姥與、又詠躑躅花曰、躑躅花今遠盛斗思之、爾早入相、乃鐘能惜久毛哉、諸人傳播稱神童、後就師習、句讀、季書法、皆秀群輩、寶永六年十四歲喪父、因投京師西福慧空師爲弟子、空師者蓋淨宗棟梁一時宗匠也、師侍左右、殫力精思、傑然蚤成、正德癸巳十八歲患義疾、退師席、僑居京師七條、自以爲佛法權實法門優劣不通、諸宗學無由比校、欲趨四方、講筵聽群經論、及疾漸瘳、聽江南賀山性慶上人講法華、于泉州堺津、又聽有人講華嚴五教章、自是覃心于寶首天台教、以爲華嚴法華二教、爰出諸教上、非諸宗所及、遂以觀心爲服味、爲几杖、享保四年二十四歲所請、允持越前州角鹿眞蓮寺、凡停留角鹿十六年、講說唱導無曠歲、有餘暇、則遊藝和歌、賞茶、賞香、筆散樂、曲藝之微、莫不貫練、爲人寬綽容物、無有

畛域以故老少智愚日夕隨從杖屐常滿然其平居未嘗問有無費不儲餘名人魁士鮮不與善接引後進有恩意嘗有疑聖道淨土本末權實差降及近世講流解淨土教義者不得佛祖面目至今十有餘年工夫不能成片三十四歲大悟佛祖玄旨從來疑霧一時歸晴乃謂十劫正覺非果後方便十即無盡之義說凡歷是其證猶乃至十念滿數之例吾祖以十劫正覺爲久遠古成外十劫正覺別非有所斥先輩不能脫自性唯心之氣習以大經因位果上之說爲一條本事因緣不深留意故有差或彌陀始本二覺說彌陀本迹說華藏各互徧說皆是聖道意非佛祖本旨也明年秋爲門人所招講小經於江北伊香郡妙覺寺盛談所見又有本願圓頓說安養華藏同異說聖道觀心淨土信心同異說聖淨權實說十劫久遠說西方十萬億說皆前出疑問後爲辨解詞義明白聽徒聳聽以爲親聽佛祖之真說想時或有訛者以爲新義以爲好拗同年冬洛西松尾華嚴寺僧游上人著明導剞一篇徵詰淨土教義差其難意多在向小經講述之中辨論於此乎始訛者服師說信從者多又或舉他宗疑難之旨問師師舉其根蒂者兩三件辨之錄爲一卷號二尊二教圓圓喻門人刊刻流傳四方十六年辛亥春爲門人所招講觀經於江北淺井郡勝圓寺凡淨土經論祖疏其旨密微箋注紛羅聞師講論者如客得歸師聲名逐日籍甚四方從遊士繼于門十七年壬子遂本山大

和尚選任講經且命講小經於本山學校同秋八月應順應師蓮照誓師款待到江州八幡講正信偈於蓮照寺十八年癸丑夏又有嚴命講觀經於本山學校蓋應衆所請也同秋所請遊賀州講觀經於金澤道場因遊化越中州井波城端高岡本吉宮腰所所四遠道俗艸靡風化會當其先師慧空老人十三年忌辰講十住論彌陀章以擬報恩之營同十一月應本蓮營公請到小松講正信偈于正行寺同臘下旬歸角鹿十九年甲寅欲赴京師以其辱講經職而衆請之也師此年春有微疾親舊門人等謂曰師頃歲經歷都鄙不顧其勞恐損道體况今春有病希勿行加保養漸達本志未晚師曰我不似幸聞佛祖正道願會出世事大不千歲嘉遇乎若以予言佛祖正旨粗得傳則雖滅死無遺憾其志確乎不可奪同四月六日發駕赴京師途經湖東湖南到處欽名望處處遮止願承一言教師爲述佛祖之玄旨如出己丹腑雖愚不肖善言開發無倦色道俗輻湊如市同四月十日到京師同十五日開講大經於學校亡何師罹瘧疾門人恐其勞屢請願養師耳如不聞一日不廢講廿一日講到第十八願文此日師志氣清爽詞義明晰異連日門人各悅謂師頃患瘧起居不適今日如此得快乎講散歸僑居未刻手書書札數通附鄉使報平安親知故舊以安遐想至晚門人數輩隨侍師談笑如常至酉下刻俄然而寂隨侍人怪其言語止近前窺之氣息頓絕皆驚愕失心走四

方求醫衆醫來救療百計無驗遂長逝矣實享保十九年甲寅五月二十一日夜酉刻也享年三十九臘二十六前二十日師謂門人某等曰吾二谷大師宗旨遠超賢首天台立教實諸教根本諸佛心印也予生數百歲後依佛祖之靈獲聞無上正道故不惜微軀事傳法普化二三子與我同志欲擴復佛祖之遺教誠可嘉獎然人命不定朝不謀夕况予生質多病固不足恃二三子持志如今日予不幸死中塗猶存後乃門人相共謂曰師預知其寂遺屬乎師生平雖傍觀諸宗博覽群籍一爲明淨教之助耳嘗慨曰今時大谷遺教遍海內稟教之徒不知幾千萬而多至終身不偏覽祖書如此焉得祖教深旨亦何足稱其徒也故自熱復參互愚禿文類已下祖書句櫛字比義理貫通使四方叩問之徒先熟讀祖書最用意大觀二經其於大經也以爲出世本懷根本法輪也不啻淨土三經中爲最大藏經大千經卷莫不流出從此夫華嚴聖道一代教根本輪而大經序分華嚴三昧演說之菩薩爲一時來會衆則知一代教大經弄引之說彰彰悲智二段一經至要大谷一期行化莫不流出於此二法門學者容易看過不知深意在故悲智二段其說詳悉其解稍與古人殊其於觀經也以爲淨土攝末歸本輪也不可不講究焉近世講流局西山諸師說不能得大谷真詮凡講觀經入遍講錄改稿四度字字句句本之祖意最極純正五六年來內院傍構一小屋爲書齋始入學

窓時賦和歌曰其乍市廛中爾毛住留身者心似忍山哉靜計幾世務一談家人日夕讀書自號道中又號今日庵生平著述大經弘願義十卷觀經要門義八卷小經真門義三卷正信偈定說二卷二尊二教圓圓喻一卷和歌集五卷論注講錄選擇集講錄淨土根本教義大谷教義指要十住論彌陀章科解皆未成書越同五月二十四日門人如法茶毘大和尚賜黃金若干而擬贖且使有司監喪事乃會下大衆三百有餘人圓柩送喪各感悼涕慕如喪考妣野哭衢泣傍人爲墮淚二分遺骨一分合收洛東大谷惠空老人塋以顯負薪之功一分送越角鹿鄉里親知遺弟令慰追慕情師開門戶待學者幾數歲而方來之士幾及千人同五月二十八日厚志門人百有餘人會洛東靈山矢終身奉遺訓各歸于本國弘所承義云乙卯三月上旬不肖門人安環謹狀

天然寺月舟

勢州洞津天然寺十五世眞蓮社等譽月舟上人は越前福井の人なり幼年にして出家し學業早くなりて初め攝津平野滿願寺に住持し後此寺に移住す自行化他專修念佛し說法勸導つとめてものれが任とすこれによりて淨信開發して日課念佛するもの尤多しその中にいたりて正直なる市次郎といふ男ありさくまゝに

冥途へ隨

信じて常によく念佛せり、或時和尚此ものに向ひて我極樂に往生する時汝供して行くかと申されしにいかにも御供仕るべしとて其後は此事をいひ出て約する事常のことなりけり、享保十九年甲寅和尚病ありしを京にのぼりて療養せられしに功驗なかりし、公みづから時のいたれるを知りつとめて念佛し翌年乙卯正月六日京都の旅宿にて目出たく往生し賜へり、時年五十一歳なりき、かくて遷化のこと津に告至りければかの市次郎これをきゝてやれ御往生にはかねて御供の約束なりしに後れにけりとて、頓て天然寺の本堂にいたり高聲念佛しけるがそのまゝ息たえにけり

(近世往生傳)

智積院亮範

眞言宗智積院中興十五世亮範僧正、字は岳泉、坂井郡新保村の人竹内氏、一郷の豪農なり、母は久末氏幼にして狀貌衆に異なり、稍長して他の遊戲なく、年十一禪門に歸せんと欲するの心あり、父母に告ぐ依て三國町瀧谷寺慶範和尚に屬す、師奇とし弟子と爲す孝謹よく勤む、穎敏實に老成の風あり、幾くもなく粗大義に通ず、時に智積院八世信盛僧正に就て學び且外典を搜る然れども資給繼がず、餘暇以

寫字料金を得てて世觀を助けて筆と稱して正と

孤松の夢

て寫字を爲し且其一分を割て遠く雙親に供す、師慶範常に曰く吾寤寐汝の學稱するに足らざるを惜む、肌寒骨にいたるに至て之を憂へずと獎勵す、毎に郷書を得て必ず敬戴して開く或は喜ひ或は悲み恰も其側にあるが如し、師弟の間誠敬斯の如し嘗て法華を北嶺に、唯識を南京に研究す、又雜華梵網經論等に善く、すべて經典論釋涉獵せざるなし、元祿七年江戸湯島靈雲寺淨嚴律師諸導密軌を開く乃ち慶範と俱に其會に預る、是より先慶範靈雲に進具す、柳澤出羽守保明風を欽し一字を邸中に創し知寶と號す、慶範を請し幕府其化に歸す、仁和寺寬隆一品法親王徵して性靈集を講せしむ、諸德來聽す、親王親から茶器を賜ふ、同十六年南山城蟹滿寺に住持す、本山を隔つる此間三十餘里弊衣麤粥炎寒を問はず恒に本山に服勤す、齡四十一、乃ち密壇を築建す、範海覺純快應等登壇職を斯に受く三日の夜結緣灌頂に接す、時に寶永七年なり、六波羅密寺隆譽會て法味を殫服す故を以て秘訣章書悉く亮範に附與す、夏蟹滿寺を辭し本山に還る、梅寮遍照院の傍に居る復瀧谷の請に應じて建壇灌頂す、因て郷里新保村に省觀す、家君夢に孤松千尺其綠陰に師塵尾を乗りて座す、醒て想ふ松は幕府の姓異日其庇陰に據ものならんと果して、江戸芝愛宕眞福寺圓福寺の命あり進んで智山集議に登る、受法印璽

釋門

を請ふ者百六十九人、明年醍醐に至り、寛順僧正の室に入り、其奥に極む、報恩院有、福大僧正に秘旨を受く、秋父逝く、自ら往て其喪を收む、正徳六年儀軌を本山に開き、冥學するもの八十餘輩、翌年學徒の請に依て、大日經住心疏を勸學院に敷釋す、集會三百餘人、毎年講授の章疏秘軌數ふ可からず、享保三年七月六波羅寺に轉住して、本山第二座となる、翌年冬母没す、慟哭已す、廢食數日、自ら喪に奔らんとするに、法務に妨られ、上足範海を往かしめ、追福を薦す、六年八月、傳法大會の精義に嘗て薩州覺眞堅者と爲る、然れども、氣度沈靜、群議紛戰恒に手を袖にして傍觀す、其論筵に臨むや、義辯天發、微旨明拆、いかに碩學も相酬抗する者罕なり、冬眞福寺補席となりて、東都にゆく、灌頂五日、十二年城北火あり、眞福寺災に罹る、尋て新建莊麗昔に超ゆ、翌六年台命ありて、智積院主席に補せらる、九月辭して京に入る、勅して權僧正に任せらる、學僧印可を蒙るもの一千五百、明年範海光範等と日光山神廟を拜し、一品法親王に謁す、下總海寶寺故上人の廟を拜す、士民之を争ふて岐路に輻輳して拜し、且感泣す、後正僧正に轉す、十六年上人遠忌に丁り、自ら胎金梵字曼荼羅及び無垢淨光等陀羅尼若干卷を筆寫し、滿山の雲霧に飯し、及施浴弟子一人を度す、名尊英と稱す、後金字曼荼羅を書して、大報恩寺に供養す、以て智積十四

大曼荼羅
幅の裏書

世智與先師に進薦す、十九年高祖九百回忌に當て、庭儀法會を行ひ、莊嚴全く備る、大師請來大曼荼羅及眞蹟七祖を模寫し、畫工をして縮寫せしむ、其禎背の紀亮範師書する處、本山に藏す、夫より德化の及ぶ功績數るに遑あらず、嘗て風痺を患ふ、普門院俊淨を擧て補處となす、遷て瑞應山に通る、八月誕辰に至り、弟子壽を奉ず、師喜んで曰く、緣謝久しきに非ずして、齡古稀に及亦何の幸ぞと、如幻和上を請して、法話談笑、平日の如し、元文元年九月二十二日、自ら病の漸むを覺り、諸子を召し、誠囑畢りて、夜二更右脇累足手に密印を持して寂す、年五十有五、良木朝、摧堅樹夕、萎終に本山に歸葬す、嚮に自筆の一偈あり、本山に納む、(僧正亮範和尚行狀)

智積院僧正亮範

筆蹟
三國町瀧谷寺所藏
經文與書

悼

瑞應山僧正亮範大和上示謹結一偈伏弔

僧 本寂焚香拜記

大悲息化拒難留、緣謝及時豈自由、雜菊已開而摧雨、庭蘭猶馥不堪秋、禪床寂寂風虛

釋 門

廣音房本
武州院百
四光州院
一代信明
の産聲州
に達す

落遺像依依淚欲流、千資傳燈雖可見、定扉一閉別愁情、

得生院自隱

自隱法印大僧都名は公慶、字は適堂、福井の人、城州山階毘沙門堂久遠壽院准三宮公海尊者の弟子にして、初め江戸四谷自性院の寺務たり、後愛宕山に移りて長床房主と爲る、洛陽に移りて閑居す、東叡山三世公辨法親王得生院室を賜ふ、既に老後願て院主を辭す、東叡山六世公寛法親王自隱と稱せらる、一期無事に了る元文三年正月十四日寂す、年八十三、弟子等遺骨を收めて京都廬山寺に葬り塔を建つ

自隱墓

(京都廬山寺にあり)

自隱法印大僧都、名公慶、字適堂、越前州足羽郡福井之産也、山隱毘沙門堂久遠壽院准三宮公海尊者之弟子也、初知於武州四谷自性院之寺務、後移愛宕山而爲長床房見住、其後遊于洛陽樂閑居、於是東叡山三世公辨法親王賜於得生院室、既老後願辭院主、又東叡山六世公寛法親王被稱自隱、一期無事、所作成辨、至元文三年孟春罹病終焉、年甫八十有三、弟子某等收遺骨於廬山寺、以建塔矣

時元文四年龍集己未夏五月

南唐清謹書

教順寺下關

名は宗賢、十關とくわん又潮音と號す、金津眞宗本願寺派教順寺に生る、父を宗受と云ひ下關はその二男なり、三國勝授寺に住して峻譚寂清に師事し佛典を學ぶ、元文三年戊午十月十五日寂す、年六十三、法名釋宗賢と云ふ著す處安心決定鈔、江記六卷、眞宗答客難一卷、本願歸命篇一卷あり

辭世吟

行盡十方三世程、曉風殘月入花城、箇中無改眞三昧、法樂自然常稱名、

碑銘

漚和流和域、般若湧若耶、嘉運厥誰啓、游藝煥文藻、此津出金華、
依仁育道芽、悲訓夕指月、禪味朝咀霞、丹青染入手、揮塵傾五車、
金湯護宗力、操觚敵百家、定焉張鳥號、慧矣磨鏡鄒、追慕世千恨、
圓寂天一涯、餘威確乎石、誓茲河帶除、

昔元文三龍集著雍敢祥十月五日

門人 慧鑑 謹誌

釋門

勸學堂
善學堂
門下
と

平乗寺慧鑑

慧鑑一名は西淳玉鉉、又は巽堂と號す、坂井郡御油田村濱仙寺淳信の二男にして、嘗て金津教順寺下關に就きて業を修め、足羽郡太田平乗寺に住持せり、寛延二己巳年十一月十五日寂す、年五十八歳、本山より顯明院と諡を賜ふ、能化職に非ずして學講によりて院號を賜ふるもの師を以て始とす、大學林に於て講釋する、二回著書三部、阿彌陀經繫帶錄二卷、四十二對勸辨一卷、雪窓隨筆五卷、淨土百詠百詠詩集雜詠等あり。

百詠詩集

吾門不事詩賦、况於如予蕪才乎也。而據廬山誠心雜則不事之豈不宜哉。予雖耻此論、數所率俗態、偶有挾吟哦之情焉。惟夫無讚正道之微志、而有吟餘事之鄙俗誠可耻、可傷者歟。也是以欲償此罪、聊哦志之所之、而為讚頌一端焉。略題法門各經一絕、又效之先哲淨土百詠云爾。

慧鑑玉鉉艸

法藏比丘

悲智一如起法藏、行因草率事饒王、袞龍榮貴做鞋趣、爲止含靈流轉狂。

現土選擇

世自在王威至誠、堂堂神化忽施成、華藏二百一十億、塵刹現前選擇精。

五劫思惟

說偈入山坐靜中、星霜五劫願心濃、花晨月夕思惟久、四十八章將建功。

無三惡趣願

群迷久據妄因居、鬼畜獄城苦不疎、本願偏憐常沒者、無三惡趣大悲初。

不更惡趣願

苦樂昇沈加糾繩、青雲富貴不常恒、今開不更三途願、正教小人有所憑。

悉皆金色願

空聞玉骨具冰肌、肉股粉容費面脂、佛建願因吾得果、悉皆金色自然姿。

無有好醜願

業因雜雜報彬彬、妄諍研熅有效驗、桃李一般無好醜、願功平等樂邦春。

宿命通願

大悲願用此相由、宿命神通豈外求、生死茫茫塵劫事、一時和智到心願。

天眼通願

萬重塵刹雙眸裡千里關山一望中。瞎眼忽成天眼報只由願力有神功。

天耳通願

不依定力發神通天耳豈比人世聰願力聞持無一誤十方遠近理圓融。

年の前無益の詩文を好みし誤りをおそれて淨土門の百詠を嘖し侍る故今さら及ばぬ和歌の道なから世の常に好みければ同じく綺語の罪のみに慕しけるをくやみ百首の詩に類して百首の和歌をよみ侍る是ひとつに讚佛乗の勤め一端になそらへ佛祖の冥加を仰きて世の人の見んことを思はざるのみ

玉鉞草

淨出撰擇

花紅葉あまた照あふ四方の國の妙なるはかり撰ひ納むる

五劫思惟

年月の積るも知らすかさりなく人を恵みに思ひ盡して

無三惡趣

住人のためを願ひて國內に三津瀬の川の浪のたえせし

不更惡趣

四方の國の苦しさ道に立歸る人あらせしと又思ひぬる

悉皆金色

生れ來る人は悟りの道のくの金花さくはちすとそせん

無有好醜

人ことに同じ姿や見にくさも見よきもなんそへたてあらしな

宿命通

迷ひこし幾前の世の物事をともひそ出ることるさやかに

天眼通

白雲の幾重隔たる國々も見るにさはらぬ身とやなすらん

天耳通

四方の國の佛の御聲おしなへてをちこち問て聞たものなり

他心通

諸人の包む思ひをさやかにもしるき心は障りあらしな

聖無動院遍亮

胤將は大和古市城主胤清孫

大僧正遍亮字は雲照、越前大野郡石徹白村白山中居の神職杉本某の次子なり、姓は三神岡崎亞相國久の猶子となる、貞享三年丙寅二月八日生る、天資聰敏にして毎に佛乘を慕ふ、元祿十年江州大津古市西坊法印胤將の家胤將四弟法印門跡坊官胤將深く愛して子と爲す、名を虎丸と云ふ、時年十二、翌年長等山に登り、三藏坊法印亮、央和尚の附弟となる、二月和尚寂す、十二年十一月十四日薙髮して寶昭院大僧正、遍雄大和尚を拜して戒師と爲す、名を治部卿公遍亮と改む、其室に入り、胎金兩部の大法護摩蘇悉地の秘法及び諸尊の儀軌次第等を傳授し、復授決集を稟承す、十六年三月權律師に任じ、法橋に叙す、尋て大僧都に任じ、法印に叙す、時十八歳なり、常に學を好み、日夜倦ことなし、賀山瑞師の所に往て諮詢す、師深く其篤志を感ず、又圓滿院覺尊親王の命に依て四教儀を講す、後衆務を停めて靜室に牖を閉て學ぶ事殆んど廿年、享保二年三十二にして權大僧都有盛に従て悉曇を傳授す、此年七月承業の師遍雄和尚寂す、七年九月廿六日靈鷲院前大僧正舜定和尚を拜し、傳法阿闍梨と爲り、唐院に於て灌頂壇に入り、胎藏界清淨金剛の尊位金剛界智遍金剛の尊位を得たり、十年賀山の瑞師三井北院の地に於て法明律院を建立す、

四教儀を講ず

悉曇の傳授を受く

大樹公に拜謁す

此時専門の住僧肯ぜざる徒多く、亮浪眞舜の二師と勉勵衆の共許を請ふ、故に大衆甘心共に地を割き、瑞師に與ふ、是に於て法明院落慶す、十一年學頭代に補す、年四十一、翌年正月一山の總代と爲り、江府に參し、大樹公に拜謁す、十五年學頭代を辭す、翌年長吏義周親王の命に依て圓宗院に轉ず、九月住心院大僧都晃珍等の十餘輩唐院に於て灌頂す、關山の請に依て大僧都鎮忍と法會の奉行と爲る、廿年義周親王の命によつて善法院に轉住し、法光院を兼ぬ、元文二年五十二歳十一月六學頭の員數に入るなり、六月四日勅して法華會を行はしむ、題者は寶昭院僧正延清、堅者南松院權僧正實光なり、時に第一の問者に當れり、然れども享保十六年冬より沉痾身を侵して未だ息ます故に、辭す、則大僧都諄映第一問者と爲る、三年六月四日勅して法華會を行はしむ、初め探題南松院權僧正實光第一の問者、圓宗院大僧都忍玉にして、遍亮堅者となる、十二月權僧正に任じ、參内して天顏を拜す、翌年探題に補す、六月法華會の初探題と爲る、八月護摩の秘法を圓滿院門跡祐常大君に授け奉る、五年金剛界の大法及び諸尊の儀軌次第を祐常大君に授る、十月廿九日智證大師八百五十年の遠忌法會を一七日間修す、廿七日合行曼荼羅供、廿三日朝座講師と爲る、廿四日より三日間朝座の證義と爲る、寛保元年滿山住僧の第

一藤と爲り別當に補す延享二年三月十三日詔を奉じて唐院に於て灌頂壇を開き傳法阿闍梨位を法印永尊及び定剛に授く翌年十月詔を奉じて唐院に於て再び灌頂壇を開き四年三月授決集を祐常大君に授く寛延二年七月四日大僧正に轉任す時に六十四歳なり三年櫻町上皇崩す勅して般舟三昧院に於て御追福法會を七七日の間執行す時に唱導師と爲る四年齡六十六歳四月十一日寅刻右脇入寂す聖無動院と號す其平生氣稟質素にして衣食を食らず意志仁慈にして温順和雅且宗祖大師の高躅を追ひ聖無動尊に歸依して屢靈驗を得る事あり故に廟に名づく

(聖無動院前大僧正略譜)

縁成寺如日

寶永のころ福井縁成寺の住持如日和尙はいと無慾の人なりある時檀越の人來りていふ何某に金子をかし侍りしが約束の限りもとくすぎぬれどもいまにかへさず此人も御寺の同じ檀越なるをひじりより其事さとし給らんやと頼みける日かず經て如日より彼かしたる人のかたへいにし日の玉ひし金子の事わかりぬれば告げまいらせんと思ふなりとく來り玉へといふをこしける其人よる

盗人を寺
男とす

こびて來りけり如日いふあたへし物なればこそあれかしたる物をかへさぬといふ事そのれいかにしてもわきまへがたくてひるも思ひ夜もかんがへにしが昨夜始めて其ことはりを悟りければいそぎつげまいらするなりこは前の世にて彼よりかりたるを今世にして返したるなり凡人は前世の事は知り侍らねばひたすらかしたるとのみ思ふめれど誠は返したるなれば再び返すといふことわりのいかであるべきさにはあらずやとなん雪ふりていと寒き夜縁成寺に盗人いりて米一たはら脊負て出行んとせしを如日起出てあなあやふし路も凍るものをとくいければ盗人驚きてとく走り去らんにも重き物を脊負ぬればさもなし得てせんかたなくかしまり居たりける如日近く寄りて汝がかゝるわざするもあしき事とは知りてもこゝゆるとゆるるとにせまりての事なるべし幸に今此寺に下部なくてこゝに居るなり今より此寺につかへなんにはうゆる事もこゝゆる事もなかるべしいかにやと問ひければ盗人涙を流してさなし玉はらんには再びかゝるわざをいかてなすべきたゞ此上は大慈悲を願ひ奉るのみといひてやがて下部となりて居たりけるが其後はいとまめやかにつかへしとなん

(初音草)

如日照和尚實曆六年丙子五月廿二日示寂緣成寺其頃は吉田郡松岡に在り什資中夢想觀音自贊の一軸あり

〔梅園笑話〕 天覽之卷 甘露智著

群雀屑にとまる

慧日禪師は何許の人と云ふことを知らず縁成に嗣法して日に鉢多羅を持し斗鉢を行せられしがいつも雀が三四隻師の肩に就き鉢に入つて米を啄むを随ふて拂へば随ふて集るを常とす師豫め死期を知りて故に檀信の家に就て告別し終に佛像の前に坐化す

大乘寺玄趾

玄趾字は慈麟即一と號す越前燧村ひらきの人、姓中村元祿三年に生る長じて出家し諸國を歴遊し後加賀大乘寺に住し大に曹洞の宗風を擧揚す明和元年十月九日寂す年七十五 (近世禪林百行録)

善行寺惠船

惠船一名慈雲丹生郡清水谷道場に生る同田中村真宗本願寺派善行寺の住持なり

り、京都宏山寺僧撲の門人にして佛典に精しく篤學の稱あり安永八年己亥十二月十一日寂す年五十三、著書信行辨一卷あり

淨勝寺暢道

暢道一名順誓大野町真宗本願寺派淨勝寺の住職なり、福井教重寺に生る篤學にして大學林にて講釋すること一回寛政二年庚戌正月十二日寂す、本山資性院と誣を授く、年四十三

平乗寺功存

能化功存講主、字は子成、義洞又靈山と號す、法主より實明院と賜ふ、今立郡小坂村真宗本願寺派明正寺に生る、父を慧祐と云、功存天性高悟、風丰明肅、幼より學を好み、詩文書に志す、年十八近江正崇寺法霖の門に入て佛學を研精する事十餘年、實曆元年父の命に依て歸住す、夫より足羽郡太田村平乗寺慧鑑に從學す、慧鑑子なし、再三請て遂に子と爲し同寺の住職となる、自他宗の競ふて其德化を慕ふもの多し、こゝに僧俗安心義に就て惑亂起り福井別院にて數十日之を諭す、其功を奏

安心惑亂

して法主より賞與あり、五十歳にして能化大講主と爲る。後桃園天皇の龍顔を拜し、寵を受けて書を講じたることあり。寛政八年丙辰九月廿三日入寂す。年七十七。子あり功嚴と云。亦學を好みて父を師とし、佛學は自他の經義を明かにし、且漢學を修めて詩文を能くす。功存大學校及び別院に於て講釋せしこと三十回。大經稱揚錄五卷、往生論註風航記九卷、安樂集太田錄五卷、序文義私鈔二卷、定義義講錄二卷、領解文大意一卷、肉食妻帶碎疑鈔一卷、願生歸命辨一卷、他力信行問答二卷、歸命辨疑問答釋一卷を著す。

〔學苑談叢〕

明治廿四年三月版 前田 蓮 雲 著

實明院功存道心堅固にして、其門弟を導くや、行を先にし、學を後にせり。桃花房智洞道心稍薄しと雖、行儀は一に實明院を以て模範となす。是を以て法門改革以前、叢林の學侶、風儀整肅にして、李光弼^つ磨^つ以下の士卒の如しと云ふ。詩に曰く、采菲采芳莫以下體と、左義の人と雖、豈非芳の采るべきなからんや。但其下體を以てする莫ければ可なり。教導を以て自ら任ずる者は、若くば學問若くば道德の常人に超異する所の者なかるべからず。然らざるときは、豈能く人をして崇敬を致さしむることを得んや云々。

功存の道心堅固

龍谷學職第六世釋功存銘碑銘并序

講主名功存、字子成、少時呼義洞、自號靈山。後大法主恩賜實明院。越前今立郡小坂邑靈鞍山下明正寺產也。天性高悟、風宇明肅。六歳之時、父慧祐命、飯命于彌陀佛、自爾常言其飯心敢無移動、相續歡喜耳。後事平乘寺慧鑑閣黎、習學道馳聘玄律、人稱其法器。十八歳、自笈隸于本龕、開演暢講主說、勤翹奉事、未嘗懈倦。遊學五畿、掛錫大和輕邑道場也。凡九年、時有瑞夢、而感得彌陀佛像。學成之後、飯住明正寺、再修堂舍、輪奐盡美。復遭回祿、四十歳受法主命、移住師跡太田平乘寺。當此時、編述願生飯命辨、壞邪教、復正義、以大揚名教之美。更數往來京師、或侍講於錦華、或副講本龕、或與同志研學、或與異學對論、思結頹綱於道廢、緝落緒於衰運。五十歳任學職、振靈風於日域、敷妙化於澆末。本國荷勅、巡行則化跡、彌盛大莫不飯降焉。嗚呼悲哉。七十七歳、以寛政丙辰九月念三日、逝矣。朝曦落光、寶岳崩頽、人天改容、林樹皆泣。從嬰病之日、未必須藥、對問疾、人則述安心、恂恂勸誘、亦○○示之、實佛門棟宇、吾宗干城矣。今爲不忘首丘之仁、分其身骨、樹小坂邑、乃立碑錄銘曰、仰見高躅、俯偃靈風、端坐越國、響同日東、應運方適。

釋 門

時望尤雄 穆穆道德 巍巍勳功 鑽之彌堅 用之無窮 何誨不曉 何壅不通 學探深奧 慈被禽蟲 恂恂誘人 言諭愚蠢 肅肅談法 理會圓融 如蘭之馥 如天之洪 芳花春盛 朗月秋中 一念勸信 三業會同 安振有奇 願生那空 吐哉無常 嗚呼此公

寬政丁巳秋七月 龍谷學林後職 京兆桃華坊 淨教寺智洞謹識

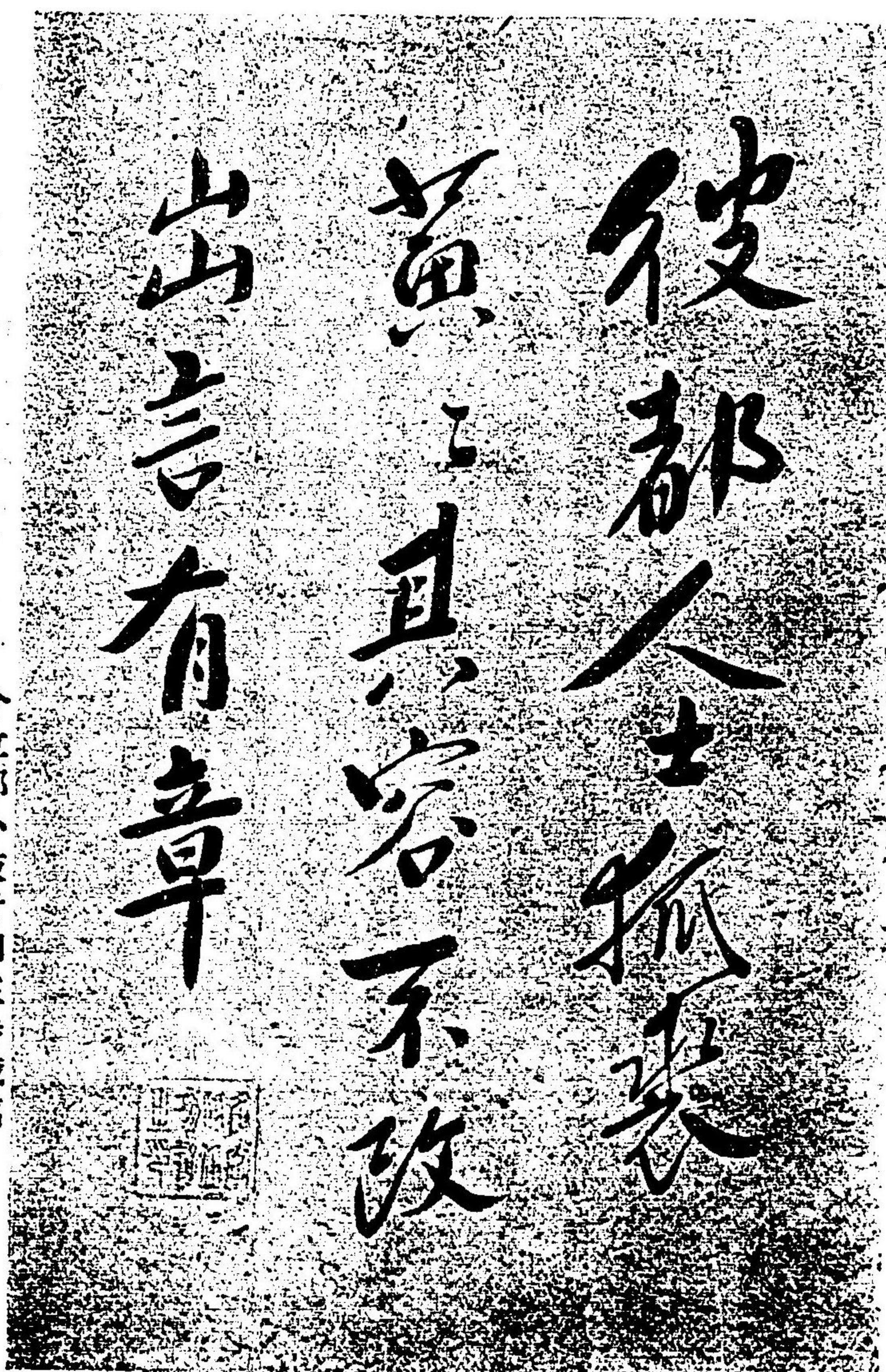
〔詩歌雜草〕 寫本

靈山功存作

奉哭講主巽堂大和上。無似功存自志學。時忝備師門之員。常蒙慈育多年。於斯矣。或承句讀。聞教義。其德如山。其恩如海也。然今者我師示化於寬延第二己巳仲冬望日。慈山月隱。祇林華翻。一期能事畢矣。嗚呼前導既往。高蹤復誰追。吾曹深悲。洪蔭德澤之難酌。亦嗟祖門尊宿之益稀也。余心惛惛不勝愁憂。即作七字述其情耳。講法堂前悲昔遊。祇林月隱不須留。寥寥鐘磬斷腸切。唯有德聲滿神州。

安永九の秋法主の命をうけて法をひろめんとてかし原のふるさ都のあとなる畝火の寺に参り見れば山のけしき月の光なところむかしみなれしおもかけにてはあれその諸人はみにしらぬ面とはなれる法の道をたてんとて此里のわたりなるあかりのみやのふるさあとなるのりのいをりに十と

實明院功存講主筆蹟



今立郡小坂村明正寺藏幅

時望尤雄 穆穆道德 巍巍勳功 鑽之彌堅 用之無窮 何誨不曉 何壅不通 學探深奧 慈被禽蟲 恂恂誘人 言敏思養 肅肅談法 理會圓融 如蘭之馥 如天之洪 芳花春盛 朗月秋中 一念勸信 三業會同 安瓊有奇 願生那空 吐哉無常 嗚呼此公

寛政丁巳秋七月 龍谷學林後職 京兆桃華坊 淨教寺智洞謹識
〔詩歌雜草〕 寫本

靈山功存作

奉哭講主巽堂大和上。無似功存自志學。時忝備師門之員。常蒙慈育多年。於斯矣。或承句讀開教義。其德如山。其恩如海也。然今者我師示化於寛延第二己巳仲冬望日。慈山月隱。祇林華翬。一期能事畢矣。嗚呼前導既往。高蹤復誰追。吾曹深悲洪蔭德澤之難酬。亦嗟祖門尊宿之益稀也。余心惻惻。不勝愁憂。即作七字述其情耳。講法堂前悲昔遊。祇林月隱不須留。寥寥鐘磬斷腸切。唯有德聲滿神州。
安永九の秋法主の命をうけて法をひろめんとてかし原のふるさ都のあとなる畝火の寺に参り見れば山のけしき月の光なところむかしみなれしおもかけにてはあれその詣人はみにしらぬ面とはなれる法の道をたてんとて此里のわたりなるあかりのみやのふるさあとなるのりのいをりに十と

實明院功存講主筆蹟

彼都人士孤喪
蓋其容不改
山言有章



今立郡小坂村明正寺藏幅

せはかりすみてをばつせの寺杉立る山のふもとなとこ、かしことたつねありさしを指ををりてかそへみればはや四十歳あまりの昔とは成けり今や六十歳あまりの老となりてはからすも此里にきたり昔をしのふ老の涙に宿れる月はころしも秋の最中の夜にもあひぬれは拙もかくそおもひさやむかしをしのふ旅衣またきてけふの月をみんとは

侍下關先師五十回忌梵筵

憶曾先師渡生年。石點朽榮講教前。荷法六旬三歲後。息肩十萬億西蓮。尙爲趙子蘭孫在。更取德音遺訓傳。此日滿山雲集衆。豫修半百報恩筵。

信光威上人者余嘗負笈南詢之親友也。茲歲寶曆庚辰春奉大法主尊命來於南越。幹事福城寶坊矣。其中明糺法門真僞大化國中真俗矣。茲歲明和乙酉秋畢其能事歸錫於和州舊林也。臨此時離別情實不可盡故聊賦七絕並國章以呈之云。由來因緣此相違。奉命六年制毒龍。今日離筵無限思。何時指此越山松。

をりにあへは歸る山ちの紅葉もにしきの袖のかけかたとそ見る

丁未除夜

窮陰屈指似飛梭。炊夢前程能幾何。机上經書多不讀。年年回顧惣嗟陀。うつりゆく月日はけふにかきらねとたゞ何となくをしまれそする

歸山の邊を曉にこえけるをりしも残月のいと明らけさに時雨のふりければ

朝またさかへる山路をこえ行はしくるゝ空に月そのこれる
奉命千山路。溪泉到處聞。不患攀百折。唯喜侍明君。

鏡山にて

見々めても三十二とせのかゝみ山我身老その影もはつかし
法力房就信之坐繪之贊

願力信心不由賢愚。宿種熟不遲速致殊。兇刀忽變立斷羈纏。三毒泥下即生金蓮。東行馬背尙向西天。四儀稱發謙敬彌堅。宜哉函犬直契直傳。

彌生中頃小倉山の舊跡をたつね時雨の亭にやすらひ昔をおもふころしも春雨の少し降るを眺て

小倉山春さへ袖はしくるなりふるさ紅葉をしのふなみたに
歸郷の頃越の中山に遅櫻の盛なるを見て

釋門

誰ためと春のかたみの残らん見る人もなきみ山さくらに

行路梅薫風

袖にうつるにほひも今はわかぬまで行く里ことの梅の下風

霞中軒梅

軒端ちかき梅かたち枝も見えぬまでかすむ中にも匂ふ春風

古郷のことをおもひいてつらね侍る

ねさめにもふるさとをおもふ心こそ旅の夜毎の友となりぬれ

浪花より都にかへる舟中にて

難波江を月もろともに漕出てよとの川瀬にかけそかたよく

よには江のそこにも長さあやめ草引手にたえぬ根こそしらるれ

生谷氏の清風樓に十六夜の月を見て

くもるとてきのふうらみしなかめにてともにはれゆくいさよひの月

卯月衣かへの日都の旅にたちいつるとて

花に染し袖のわかれもつらき日にたちかさねてや旅ころもきん

ゆくも見かへる木々のわかみとりみなふるさとの森のおもかけ

天明五年丙午秋

さらたてたに寐さめかちなる老の身の草の枕にむしの聲々

わか宿のまかきの小萩いたつらにみる人もなく今やちるらん

乗秀先師は余か十二歳の時より四年の教をうけし慈恩の廣大なるこ

とわすれすおもひ出るに月日はやく過て五十年の昔とはなれり今此

梵筵にまゐりていと昔をおもひ出られ

和田津海の深きめくみの末遠く五十年の法に袖ぬらすなり

先師かくれさせ玉へとも深きめくみの耳に残りいと尊く覺ければ

月影の入にしあとも今更にひかり絶さるもりの下みち

善超院先師七回の法筵に侍りいとむかしなつかしくて

花におもひ月にうらむるわかれ路もはや七とせのけふのおもかけ

廿夜に法友と同一性故證菩提といふ文をかたり合て念佛成佛よろこ

ひぬるとゆめみければ

おくるいも花に咲へさみよし野の木々の梢そためしうれしき

尊牌を拜して

おもひ出る袖の涙そそのまゝに花の臺の露とこそ見れ

寶號の折句

なかさむかしものためなるあはれあるみにしみてこそたふとかりけり

寒江漁父

風さえてかすむそらなき入えにもぐるしと見ゆるつりやたるらん

寒夜讀書

寒夜のこぼれるおもひとけにけりみぬ代の人にあふこゝちして

金澤宗春老老母の往生後營の詠草を見て六字折句

なかりしむかしのゆめ路あとたえてみのゆく末はたのしみのさと

次宏雲首座見寄芳韻謝諸賢友

陞羊荷錫恐虛名不量寸心護法城無那孤僧情根亂只嘉四衆道芽生
叨甘糟粕輕龍象徒引葛藤愧跛盲勿笑闇燈殘炷小諸賢傳照萬年明

酬惠韻送惠亮上人還初州

留詩報別叩禪扉從是中原識者稀客路萬里雲拂面關山千巖霧沾衣
毫光夜照牛車去紫氣日遶金錫歸堪耻林間衰衲子徒甘糟粕事多非

寛政元三月十三日賀余七十歳生辰開筵席上之作

生辰憶舊意杳茫慚愧七旬日日忙春夏秋冬爭幻事東西北化他郷但淪界外妙
甘露不羨人間仙掌漿且遇兒孫開賀宴心恭父母笑銜觴

晚發浪華城還京師舟中之作

戊戌孟秋
第六夜

共有法門好此尋砂坂來越山橫北盡龍水從南回鷹窟餘陳跡疎松鎮舊臺不知何
代寺弔古重徘徊

追悼究達院廊上人

歎哭叢林標由來護法城九州傳大業龍谷賜茶名濟筏雖難繫遺文復渡生紫雲西
去後何處法雷轟

山間

曉發山間路百花秋草香飛泉石苔古棧道薛蘿長露冷早紅葉嶺高留夕陽此行非
探勝奉教事津梁

至三國津舟中作

解纜福城橋下隈秋光千里一帆開遶山傍野坐相望無限紅林次第來
賀清風樓主入避世入桑門

轉門

連年佐得法王功。今日飄然瀟泊中。從是長遊方外興。清風樓上更清風。

謹謝淨華臺主師。枉駕更賜佳什而步其高韻。

始接紫眉道味長。清談別後有餘香。即今適得新詩賞。更覺陽春一段光。

哭惠雲長老 和遺言

荷錫越城四六年。點頭頑石說經前。紫雲此日向西去。本國息肩百寶蓮。

講暇遊靈山

三十年前陪此遊。如今再到鷲峰樓。座中龍象多新識。欲述吟魂摩白頭。

壬子歲旦書懷

七十三春如置郵。幻身惣是賴浮漚。堪羞孔聖獲麟歲。回首歎嗟夢蝶遊。

越前靈鞍南麓明正寺鐘銘并小引

越南州今立郡靈鞍山麓。小坂邑明正寺者淨土真宗之道場也。其山者往古安和之歲。營天神影現之跡也。其寺者中頃享祿之年開徽基而後寬永之歲立寺號焉。從爾第四代住持釋慧祐亦曰善法師深信於宗教且勸誘時人矣。是余先考也。然余依龍谷法王之嚴命有不可脫之由。移住於同國太田村平乘寺。其時余次弟功嚴者住持此寺。時有置鐘之願。雖得本山許命而未果。鑄冶之功而卒矣。其後親弟靜嚴者住持焉。

有深由龍谷法王親命賜寺階一等是不測之幸也。然來甲寅年十月八日者正當先考慧祐師三十三回是故思彼重恩且繼亡弟志以余衣鉢資餘並四方有信助資遂鑄此梵鐘一口以懸此寺矣。惟願永世日夜傳二尊遺勸以欲利樂無邊群生耳。因茲銘俚辭曰。

二尊遺勸 從來無邊 悲哉迷徒 聾盲長眠 教音託物 幾發待緣 猗斯梵鐘 妙用亦然 頑銅獲倖 妙音方宣 靈山南麓 寺號明正 宿願時熟 鑄冶新成 杵杵法施 朝朝夢驚 群生耳目 從是開明 無窮利益 至龍華盛

寬政第五癸丑晚春

龍谷侍講第六世先住平乘老翁實明院釋功存謹誌

現住 明正寺靜嚴

敬覺寺玄伏

玄伏一名諦淨と云。丹生郡黒川村真宗本願寺派敬覺寺の住職たり。平乘寺功存に佛典を學次。寬政四年壬子十一月十五日寂す。年五十五。本山より謚を眞因房と授

かる、大學林にて講釋すること一回、著書四部あり、曰く往生要集立談一卷、彈妄釋疑編一卷、彈妄釋疑第二篇一卷、歸命行信辨一卷、等なり

光福寺簾溪

簾溪一名乘應、足羽郡小稻津村眞宗本願寺派光福寺の住職なり、平乘寺功存講主に就て學ぶ、大學林にて講釋すること二回、寛政七年乙卯十二月十五日寂す、年六十一、本山より瑞正院と諡を授く

松樹院闇如

闇如は坂井郡嵩村眞宗高田派松樹院の住持なり、同寺に生れ、佛學に精しく、明和二年本山の命により、安居本講を勤め、後准講師に任ぜられ、文化元年二月廿五日寂す、年七十五歳なり

永臨寺深勵

香月院深勵講師は坂井郡金津町眞宗大谷派永臨寺の住職なり、師字は子島龜洲

深大八世男
勤行の永也
智女九也
母殿の九也
弟殿の九也
世を嗣ぐ

と號し、一に垂天社と云、同郡菰浦大行寺に生る稟性穎敏にして姿貌魁偉頗る大人の風あり、六歳より三部經を讀誦し、九歳粗經義の一端を悟る、永臨寺壽天養つて法嗣とす時に八歳なり、其後京師に遊び、理綱院慧琳、開轍院隨慧、香光院寶月等の諸徳に隨て深く一宗の要を究め、又豊山の智道僧正、仁和寺龍山法印、長泉律院普寂等に隨て博く内外の典籍を學ぶ、精勵刻苦のち浪華袴屋新田の經藏に在りて寶景、大安、蘭洲等の諸師と探立記を精練す、安永元年廿四其師香醉諱は隨土福乘寺に住す、光遠院慧空の嗣にして、香嚴院慧然の法嗣なり、寛政六の命を受けて俱舍論年深勵の推薦によりて講師職を贈らる、蓋し大谷派准講師の始なりの命を受けて俱舍論

讀書曉に
達す

頌疏を其會下に講ず、是より連年講讀休む事なく、寛政二年請に應じて浪華にありて講を起し、學徒雲集す、同三年四十三歳平野郷に在りて無量壽經を講ず、乘如宗主夏講の命を下し寮司職をぬき、擬講職を授く、同六年六月廿二日累進して講師職を拜し、香月院と號す、時に年四十六なり、師の一度講を學寮に開くや學徒雲集來り謁するもの數を知らず其盛なることを知るべし、傳へ云ふ平居常に諸典を涉獵し、晝夜三更始めて床に着く、然かも覆臥猶よく外典諸史國風諸集を開き往々明曉に達せしと、又人に對するや白衣の子女と雖誘引頗る懇切を極め例を卑近に求め諄々教へて倦ざらしむ、享和二年五十四歳の十一月羽州酒田

異安心を
教誨す

深勸の屏
居

の淨福寺公巖異安心の事あり、即本山の命を稟て教誨願ふつとむ、公巖歸寺の後深く感得する所あり、もし師なかりせば來世を誤まるべかりしとと殊に使を永臨寺に派して感謝の意を表せりと、以て其德化の如何に卓絶せるかを知るべきなり、文化八年六十三歳二月十八日故ありて屏居申付ちる是より先文化七年尾州遍慶寺了雅正本寺秀山安養寺靈瑞願正寺任誓正賢寺阻海等勸化不正義の事あり、嗣講皆住院風嶺命を奉じて教誨す、蓋し師の屏居は此事に關して起れり依て門弟信徒其辨解につとめ幾くもなくして許さる、師進級以來頻年の夏大學寮にあつて講ずる所左の如し、寛政三年入出二門偈を講ず、同五年往生論註、六年觀經玄義分七年觀經序分義及ひ定善義、八年觀經定善義及ひ散善義、九年正信偈、十年愚禿鈔、十一年淨土和讃、十二年高僧和讃及ひ正像末和讃、亨和元年安樂集同二年無量壽經前半を同三年無量壽經の後半を講じ、文化元年文類聚鈔同二年阿彌陀經同三年選釋集同四年往生論註の前半を同五年往生論註の後半を講ず、同六年觀經の前半を七年同後半を同十年淨土和讃を同十二年正像末和讃を講ず、以上寛政三年以來累年講ずる所は大衆悉く之れを筆記し、積んで數百の巻を爲す、其餘宗主の殿に講ずるもの、各地の寺院に講ずるもの、自寮に在りて講ずるもの、亦數十部あり、御本書嘆異鈔末燈鈔御一代問書等是なり、其他不正義を糺彈するもの數十卷あり、幽を撥き玄を竭し、沈深清練、隱然天下萬世の摸範を立つ、本宗開創以來講述の盛なる未だ斯の如きものあらざるなり、中門弟甚だ多し、香樹院德龍香雲院澄玄威德院靈曜一蓮院秀存德母院良雄妙香院了祥等最も名あり、其門流の盛なる知べきなり、かくて文化十四年七月八日永臨寺に寂す、年六十有九、遺骸を寺後に葬る、徒弟等碑を建つ、師の辭世に

（香月院器錄撮要）
 遺骸を寺後に葬る、徒弟等碑を建つ、師の辭世に

おもはずも迷ひのはては盡にけり

さとのりの岸は今日や明日やと

大谷講師勵公碑銘

正三位式部大輔菅原長親撰並題額

夫開奧秘明誓願固良雖難化顯愚拯沈溺豈是爲易師諱深勵字子昂號龜洲生而敏捷姿貌魁偉邁資誌依鍾山六歲能誦三部類德安在荊州九年粗悟一端既而取證名匠追隨播之香醉履跡淨域住持越之永臨加之應變本無定方旁究顯密化道何止一隅周及南北彝器所成寵辟即至寛政六年大谷法主延爲講師於是登寶壇主僧盟繡

素子來慕念，敕佛令演宗風，衆徒廣集，忻戴排異，閉邪，俊彥服懸河辯，解迷開暗，頑鷲致脫網喜，金仙妙輪，由其長不退轉，聖人遺教，自此愈得紹隆，可謂釋門棟梁，巨川舟楫也。



飛彈國大名田村願生寺所藏
深勵講師肖像

後謝老永臨寺，改稱香月院，仍勉講讀，無敢懈怠矣。師以寬延二己巳九月三日得龍吐之瑞，以文化丁丑七月八日會星滅之異，享年六十有九，葬于寺後之山，嗚呼永夜不曉，追號何及。徒弟等將樹貞石而傳芳聲，以余嚮居文章博士。

院曰香月，世稱龜洲。講師嘗撰法主所求提撕後進潤色先修眼透紙背談點石頭邪覺軍道正宗道周山海恩在消塵未酬。

天保庚子十月後學雲華大舍敬題

文雄書

今爲式部大輔，和興議請曰：我師積德累績如此其著，盍賜片言以垂龍光乎？匪唯貧道之願，而亦往者之榮已。余喜其篤志且欽其遺美，遂勒銘以與之。銘曰：

懿哉勵公，僧中之宗。齋齋厥德，溫溫厥容。栽菩提根，磨涅槃鋒。道俗景仰，聖几陶鎔。義轡難繫，寒岩遶縫。鳴此佳城，永留靈蹤。徒弟等建。

香月院講師筆蹟



平等無高下
龜洲書
福井市
慶福寺所藏

〔草堂雜錄〕龜洲釋深勵撰寫本抄出

復西邨直時在龜洲探玄記

釋深勵

華絨至矣，曩所遺留，閱藏知津一卷，併附洲人見寄乃來示云：知津之作，名實不相當。云云。僕雖慮淺，輒緣來意，聊呈鄙言。伏惟佛法大海，茫而無涯，苟非大覺，則卵率開士亦未能實知其津。豈翅雪峯師而已耶？雖然，河海不擇細流，故能成其深。素咀纜有言，一切示現，無有餘是。故今古賢聖相繼，問津各挹波瀾，悉遊薩婆若海，此迺吾遮那智。

藏海浩漭包納之德也。靈峯師之知津亦是知其津者也。自叙云：若權若實不出一心。若廣若約咸通一相者。蓋此謂乎請諒察焉。且夫東流之法門。歷朝之翻譯。黃卷汗牛。繚緗充棟。大小混雜。權實失準。若是單本。若是重譯。譯語巧拙。幾趣具闕。始涉之徒。何以辨之。耶靈峰師之知津。所由而撰也。卽先大乘典後小乘典。各分三藏。曰經曰律曰論。更據出曜別立雜藏。及梵漢之作編次。作叙又經藏中自華嚴而至涅槃者。部表條然。以典於大蘇之妙悟。又論藏中有釋經釋宗論釋之別。復重譯中選其巧者爲主本。其餘卽列於後俾不能徧閱者。但閱其一則卽可得旨矣。惟經惟論譯人及失譯並卷軸不同。南北函別。無事不記矣。悉標跋渠之目。預述旨歸。則七千餘卷之妙旨將思過半矣。自晉時逮于明代。錄者殆數十家。此撰特覃精緻矣。稱曰閱藏之要津。豈不可耶。願夫藏經者生死岸頭之大車。而波羅密多之巨舟也。此撰於藏經也。既是要津。則此撰再稱曰到彼岸之先導。亦不宜哉。公幸附此石室流芳。百世俟輩所以隨喜者是也。又僕嘗聞五代之兵火。古典滅絕。以故明朝之編流多亂。宗途至于性相之判。則靈峰師亦有白壁之微瑕。由此願之經錄之撰亦有臆度乎。他日得魚兔之後果。而冰釋耳。吾輩飯袋子無恙。虛延歲月。華嚴疏二局前月下浣。方卒講業。春來接芝眉。聊有閑議。論耳。鑒察不宣。

寄雜華庵

頃聞尊大人老師倏然化去之狀。慨然驚悼。阿羅漢心猶沒。憂海親屬之愛。豈不悽然。傾慕之哀。何以堪居。且審尊老臨北首時。病魔悉去。怡然開眉。輕利安眠。如入禪那公。及澄公潮公芝蘭玉樹。周匝在目前。則乃囑以未來法要。口念佛陀。奄忽示滅。願是華藏海會之大士。寄言於閻浮有心輩耳。公其勉旃。大振尊老遺業。則洪大之孝福乎。伏惟節哀自愛。

刻品類足論五事品凡例

李唐三藏譯出五事毘婆沙論以降。千有餘載。于此而未審其本論目。五事者爲是末度。爲是失本。闕疑日尙矣。近讀世友尊者品類足論第一卷中有辨五事一品。試擬諸五事本論。則如合符契。是以別錄此一品云。五事毘婆沙論文來未盡。以故貼之。五事品則其所釋。僅不過兩三紙。而今之所錄。具一跋渠者。要在令讀五事毘婆沙者。知如是五事之法而已。今之所寫。一仍黃蘗山本。而有字訛者。以高麗本揭于其上。而不輒改換矣。若夫字畫不同。所字作。貯總字作。摠之比。不枚舉耳。

天明三年癸卯之夏 越前州 釋深厲識于京兆高倉寮

古狸會序

古云不語怪力亂神。今者不然。吾曹不能放情丘壑。則本無吟月咏風之雅致。而非王

字畫與
動同

公列卿之貴則何爲縉紳君子之遊又非破家亡賴之徒何耽舞伎絃歌之譙復非老伯村老之黨則不必事方正敦樸也只是山野間散客而未能免俗狼狽世間出世間者也是以躬自顧之非務則是獼非狐則是狸故今命茲宴云古狸會

刻梵本阿彌陀經序

小阿彌陀經者兩尊出世之大意四輩入道之要門也其文簡約籠五岳於一篲其義含弘統四海於寸波學淨教者誦持依行此經爲先在昔秦朝創譯唐代重翻乃會意譯經羅什爲最敵對翻語玄奘是能以兩家之譯文雖左右要其所歸旨則不違自爾以降物換星移千有餘年于此梵軌罕談聲明誦講當今之世跋尙於古參考梵文者幾乎鮮爰有墨峰律師法諱法護嘗從其和上親稟指誨鑽仰累年造此經梵本之釋直翻貝多回綴字句詳量梵軌互證異譯書字參考悉出其一手雖謂羅什再生玄奘復出殆不誣矣嗚呼此撰一出俾今人溯知千載之古雖其不愉乎余友有惠默寂昧二子與律師舊相識一日携其本來示余且乞余一語以冠其首余也不敏雖梵軌之事本所不能知而於斯盛事何不隨喜遂不自揆敢題蕪言於卷首云爾維時寬政甲寅七月越州永臨寺釋深厲詰於京兆高倉學寮

龜屋平兵衛樓心樓記

儒典云孝百行之本吾釋教以孝養父母爲初以遠跡娑婆栖心淨域爲一大事矣山本平兵衛義武爲人至孝早喪其父而老母在堂日隨其所欲無不孝養其母每夏苦暑熱乃爲之構一小亭於屋後以爲納涼之處亡何罹祝融災悉爲烏有矣義武造家乃亦以其母避暑之處爲其先是以其家之爲結構也重屋三級其第三級樓上方僅一丈以充其母遊息之處然方修葺未成其母奄忽沒義武哀服哭踊乃言重屋層樓今而何設當毀折或止之云不改其道不亦孝于鬼神義武從之於是樓成而義武延僧於其樓便說吾宗法要爾後每歲如之而是日義武追憶父母之恩未嘗不失聲如此者六年于此矣寬政甲寅之秋七月請延余其樓而求樓名并爲記其樓東睹叡岳西望愛宕黑谷梵刹加茂神祠隱映于林叢之間其他鞍馬船岡諸山森森羅列競秀呈奇冬宜雪景夏宜納涼是其樓之勝槩也然義武則每登茲樓于月于花未嘗不思慕父母而思慕父母則未嘗不遠跡娑婆栖心淨域云是以余爲命曰栖心樓凡人之處世也恒汲汲焉衣食是求居處是謀至甚則大厦高堂華榭書棟尙且不足嗚呼以夢幻之身徒勞心於容膝處者豈不愚耶日夜汲汲乎遂自斃耳義武則不然樓之結構本爲孝而起而今乃欲以爲栖心淨域之基也豈不希有乎豈不希有乎余嘉其本志之所在因爲之爲記

尾州大精舍大藏經募緣序

以夫貝葉真詮文超恒沙龍宮寶偈品等塵數大矣哉難得而稱矣自白馬西來赤軸東被踰越沙河履跨危險流傳于我日域者猶汗牛充棟即今大藏中所編入三藏聖教是也然我高祖以聖道一代教咸為弘願一乘之由漸則一大藏經亦是我宗藏經耳尾州名古屋城大精舍吾大谷宗廟之支剎而大法君親臨化之處也創建以來三寶法器遂緒完備殿堂壯麗門廡巍巍實無減于京兆本剎矣但憾向來未嘗藏經閣嗟呼可不言闕典乎頃二三子慨然興志與本院例住某謀此事而奉本廟命以募衆緣于諸檀越云維時余亦奉命開講本院而二三子令余為募冊序余雖謫劣遇茲勝緣何不欣喜以告四方善男善女豈未聞乎舍衛三億不見不聞吾曹澆季末俗非宿因多幸則何得與聞此一大盛事耶伏乞朋心戮力若半卷若一帙任意施貲萬卷大藏經不遠有致云爾于時寬政六年甲寅冬閏十一月誌于張藩大精舍

刻舊譯二十唯識論序

唯識二十論者婆薮槃頭菩薩之所造也昔覺愛三藏魏朝初出家依法師陳代再翻爰及李唐三藏玄奘法師更譯茲論即云舊譯詞甚繁鄙義多缺謬其徒有基法師作釋翼贊新翻一家當時大鳴矣於是舊譯二論讀者鮮少東之高閣不講年尚矣嗚呼

李唐以前經論皆謬乎可謂偏黨耳余社友有加賀州賢幢者奮然校訂舊二論且為句讀授之剗剛以公大方庶幾使海內同志者知舊論亦不可不讀云爾寬政八年丙辰三月越州永臨寺釋深厲題于京兆高倉學寮

寬政己未八月十五日六日登叡山紀行五首

白川道中

與二三子朝發京而行且讀名所圖會故三四句言之

携手雲山路石門曲曲通人行看書去不識在圖中。

過山中因超寺

偶叩禪室暫徘徊地接天台衆壑開屋后雲深鷄犬吠風流却怪問津來。

登比叡山

因訪東塔四教院與午齋餘飯且其院前有千手水亦名辨慶水傳云昔此山西塔武藏坊辨慶詣于手掌凡千日每作阿伽水因得此稱故三四句及之

乘秋攀良嶽梵剎儻嵒嶮午後飽香飯階前聽水聲林端人影動脚下片雲橫短景行

將暮隔溪問路程。

又并

拜此山四大師及惡心吾祖舊蹤而有感故賦之

台嶺稀人跡靈區杳巨尋畫樓蜘蛛結網飛殿鳥空吟開業千般苦流芳異代心只探陳迹在懷舊淚沾襟。

宿坂本旅館今夜仲秋無月

釋門

湖上秋風雲未晴。金天何處月光明。夜闌燭影難成。寐客夢偏驚蟋蟀聲。

讀經方法

不必欲遠及但示於與予同意者

將讀經時、必先洗手漱口、恭戴經本、當發此念、是經者、渡三有海、船筏證大菩提、資糧
世世、巨遇生々、難聞、今幸值遇、而后以殷重心、可讀誦、先哲堅制、不可疾讀、見經文則一字具佛諸德、故讀二字則一字具佛諸德、也何得疾讀耶 又不可以口氣拂經上之塵、吾徒必不可違此制、又讀習音
吐一仍吾本山風調、若學他宗派、則髮髻於改宗改派者也、龜洲深厲謹識

送賢幢上人歸加州得蕭字

山樓寒橘柚、送別自蕭蕭。洛水鴻來日、琵琶月出霄。陰蟲鳴切切、知己去寥寥。行矣爺
孃在、莫愁驛路遙。

又

醉別山樓魂欲消、馬嘶北郭草蕭蕭。白雲秋色追君去、人道逢關紫氣驕。

送大合上人歸豐前州

落木江頭路渺漫、東林寂莫菊花殘。思鄉客向豐城去、到日龍光紫氣寒。

悼惠默者宿

婉非流水曲、子去少知音。往事渾成夢、舊遊誰語心。人間腸耐斷、寶國道正深。悵望秋

雲暗、聊歌蒿里吟。

天澤庵隱山

諱は、惟瑛字は隱山、大野郡伊野原の人、姓杉本家世、白山神祠の祝人たり、先世は秦
澄大師より出づ、師甫て九歳美濃興徳寺禪規香を白山祠に進む、群兒方に魚を小
溪より捕ふ、師傍にありて睇を凝らす、規之を異とし、夜其家に宿し、父母に勸めて
出家せしむ、曰く此兒素風塵中の物ならずと、遂に規に屬す、則ち携歸つて老山和
尚に従はしむ、是年十月五日落髮受戒、師訓を守り、聊も忤逆すること無し、因て深
く愛せらる、年十六嘗て自ら念ふて曰く、生死事大、無常迅速、安得悠悠、虛度歲月乎、
と是時越前瑞昌寺萬國和尚盛に正眼國師の宗旨を唱ふ、師往て従ふ三年を歷て
得る所なし、年十九武州永田の月船和尚方に三春の高乾院に住し、門風最も辣な
りと聞き往て教を受んことを請ふ、寺中の掌事曰く、今制來集の衲子甚だ衆し、是
を以て其後に至る者は皆之を辭す、且子の年二十に滿たず、參禪未だ晚しとせず
他師に従ふて學ぶに如かずと、師固請すること七日、涕泣流血に至る、掌事其至誠
の他無きを見て、月船に告ぐ、乃延見して曰く、何をか爲さんと欲するか、答るに生

涕泣血を流す

死事大無常迅速の故を以てす、曰く我這裡生大なく死大無く復何ぞ迅速か之あらん曰く唯生死無きこと、是小子が從來疑を懐く處、請ふ幸に衷憫を賜へ、船曰く汝後世雖僧果して修禪に意あり去て參堂して可なりと、是に於て晨參暮請懈怠有ことなし、二十一歳初て入制接心、微しく所得あるを覺ゆ、室に入て將に所見を呈せんとす、船其狀貌の異常を見、便ち言ふ不問有言不問無言、試に道ひ來れ、師口を開かんと擬す曰く果然情識裡に墮在せりと、言畢て遽かに竹篋を打す、恍然堂に歸りて日夜涕泣するのみ、衆以て狂と爲す、一夕定中忽然として無生大無死大を見得し急に入て所見を呈す、船曰く是は則是なり願ふに暫時の岐路のみ以て足れりとせず、轉た進んで已ずんば他日自ら生涯あらんと、是より古人の機縁言句或は頌或は拈或は評以て進む、船熟視之を左右に導き一も可否する所なし、以爲らく佛語祖語通明せざるなしと、廿六の春、儕輩と相伴ひて徧く都下及び關西諸大老に參し室に入て宗旨を問ふ、老師皆愛撫亦毒螫を施すなし、以爲く扶桑國裡を盡し復明眼の宗師無しと、還て船に參せんと欲す、道を濃州に取り過て老山に見ゆ、是より先老山興徳寺にあり、鐵崖に命じて席を繼しめ、別に梅泉遺趾ついでに、其て自居十四年、又風嶺をして梅泉に主たらしむ、更に小庵を其傍に構へて閑居自

ら養ふ、已にして崖没す、風嶺亦事に困て院を出づ、老山困て師をして梅泉に住せしむ、秋位を妙心寺第一座に轉ず、梅泉もと壇越なし、庄田無し、師枯淡を守ると十餘年、偶禪客あり來て云ふ、方今永田弟二世、我山和尚盛に鶴林の宗旨を唱ふ、實に天下第一の慧眼なり、師聞て即日包を腰にし、途に上る、已に都會に入り、峨山天澤山に在り、結制碧巖集を講ず、緇徒講に侍する者六百餘人、其始て見ゆ、峨山手を展て曰く、因甚道手未だ答に及ばず、又脚を展て、因甚道脚師口を開んと擬す、峨山手を拍て大笑す、師茫然として退く、明日又入室す、峨山曰く、今の修禪者皆容易古人難透諸訛の因縁を過去し、曾て着實の工夫を下さず、或は頌或は拈、皆口に任せて亂道し去る、故に佳山後多く道心を失ふ、例へ無事過るも初より一箇半箇の師爲ること能はず、眞に憫む可き也、汝果して修禪を要せば、從前の悟得盡く放却し去り、單單究明更に乾峰和尚法身に三種病二種光有り、是什麼道理と道まじを看得せば、則ち可なりと、蓋し師の病處まじに中る、是に於てか涕泣して退く、麟祥侯廟に入り、刻苦精究二時の粥飯の外復出ざること數日、一旦忽然乾峯の醜面皮に撞着し、疾走室に入り、所見を呈す、峨山大に悦び、是より日日入室、諸訛の因縁盡く蘊奥を得たり、時に三十九、是年九月峨山に辭して梅泉に歸る、四十一歳二月復永田に至り

氣息絶んとす

初て室に入る、峨山曰く、巖頭道ふ大小徳山未だ未後の句を會せず、汝試に道へ、師一轉語を下す、更に子細にし去べしと、又數十語を下す、皆以て然りとせず、已にして師又曰く、大風起兮、雲飛揚、威加海内兮、歸故郷、峨山大に怒り罵て曰く、這瞎禿奴、恁麼見解、堪作什麼用と、竹篋を枯して打すと、數下、氣息將に絶んとす、師以爲く我道得て諦當なる、何ぞ惡發此に至ると、意深く憤懣を懷き、疑團釋けず、五月復梅泉に還る、是秋峨山聘に應じて、濃州清泰寺に入り、又梅龍寺に移り、講筵を開くこと二十餘日、師前後從ふて左右にあり、乍ち竹篋下痛痒の處を知り、便ち曰く、大小巖頭徳山和尚、總敗闕了、峨山説て曰く、須知佛法、譬如大海、益入益深、豈得容易看過乎、別に臨み書して曰く、隱山座元研究功績不合、撞着獨妙禪師發明底大事、學海波瀾一夜乾、全不堪歡喜書以爲證と、後出入相從ふもの七人、寛政五年峨山聘に應じて、駿州蓮光寺に入る、亦從ふ是に於て、江湖の雲衲師の不在を候ひ、梅泉に就て勝會を舉んことを謀る、官に請て僧堂及び諸寮を構ふ、師還り見て、大に怒り、拄杖を擧て盡く衆僧を趕出す、仍留り挂搭する者七十四人、師日夕鞭策、誨勵、怒罵、衆皆勇進、寢食を忘るゝに至る、九年師年四十七、是春梅龍師を請て住持せしむ、固辭す可かず、已を得ず、遂に入る、碧巖集を講ず、雲衲來會するもの三百人、是年峨山寂す、秋に

衆僧を遣出す

至て師亦明峯座元に命じて、梅龍の席を董せしむ、則ち東浦山堅相寺遺趾に就て草庵を結び、優游自適、雲衲又之に踵て、蟻集す、其居を東浦に移すや、衆に示す偈曰、幾年孤鶴翹松頂、忽看片雲過別山、去住雖然無染着、遲遲引步碧溪間、驟步師の偈を評して云ふ、師蓋し父母の邦を去の道を謂ふ、願ふに絶壁斷崖真に攀易からずと、師東浦に住し八年、殿堂門廡及び鐘鼓みな一新を經、爵として叢林を成す、雲衲の從ひ居る者常に五十餘名、已にして其煩を厭ひ、又經岳座元に命じて、席を繼しむ、師聘に應じて、制を江州總見寺に給ふ、既に畢り、悉く緇徒に遺を散す、從者唯五人、播州鹿谷山中に至りて、其幽寂を愛し、包を解て、緇晦終焉の計を爲す、衲子亦來り集る者猶二十四人、鹿谷に居ること三年、道俗皆徳に歸す、俱に殿堂を經始し、將に以て演法の地と爲さんとす、是より先、金寶山瑞龍禪寺年を経て荒廢す、諸老相與に議し、使を馳て請て云ふ、瑞龍開祖入寂以來、宗風振はず、門庭亦寂寥、其廢毀に就くを座視するに忍びず、師寧意無からんや、是に於て師又已むを得ず、其請を許す、文化三年春、將に還て瑞龍に入らんとす、仍留ること數日、京都森見某之を聞き、使を遣して邀請すること三たび、五月師京に入り、病を森見に養ひ、九月濃州に歸る、金寶山中瑞龍庵に卓錫す、庵後に天澤と更む、始て庵室に至るに、懸磬の如き上漏

下濕、主伴復膝と容る處なし、日に衲子と荒を剔り、穢を除き、勞劬百計、始て鼎新を



像肖尙和大瑛惟山隱
幅藏場道門專寺龍瑞市阜岐

得たり、復僧堂及び浴室を構へ門廡倉庫亦皆備る、是に於て祖風大に振ひ衲子の常に從居する者七十餘人、五年夏京都嵯峨要行院の請に應じて虛堂錄を講ず、大覺法親王數來聽せらる、九月

詔して紫衣を賜ひ正法山に住せしむ、明年秋又京に入り關山國師四百五十年忌齋を修す、十月闕に詣り恩を謝す、詔して復瑞微に居らしむ、八年六月興請に應じ鶴棲院を中興す、風川座元に命じて之が主たらしむ、十四年十一月微恙に罹る、廿九日遺偈を書して徒を聚め後事を屬す、蛻然として寂を示す、壽六十四、法臘五十六、鶴棲西北の丘に火浴す、八月に至て特詔正燈圓照禪師の謚を賜ふ、師の正宗を嗣ぎ化を一方に盛んにせし者、太元、棠林、雪關、願鑑等諸人とす、師の至る所雲衲常に堂に滿ち法規森嚴にして其後世に功を貽す者最も大なりと云

荒廢を興復す

特詔發號を賜はる

大野郡石徹白村
杉本氏所藏書翰拔寫

筆蹟

大野郡石徹白村

〔怪石談〕明治四十一年三月發行
京都中外日報所載

建仁寺管長默雷禪師談

美濃に齋藤秀龍が金華山に城を築て偉い英雄であつたが、終に信長の爲めに亡ぼされた、其時家來の末々までが借に打死した所千人塚と云ふが岐阜にある、之に就て種々奇怪な譚があるから話して見やう、來四月早々から岐阜の瑞龍寺に隱山和尙百年遠忌の爲め大會を執行するが、其近邊を瑞龍山と云つて、最初隱山和尙が齋藤一族が打死した墳墓即ち千人塚を壊して逆的濟度をせん

釋門

百七十七

千人塚の怪事

が爲め其所に僧堂を建てられたのが天澤庵である、天澤庵と云へは同國伊深の正眼寺と共に名高い僧堂だが、其千人塚の墓石を僧堂の大衆等が毎朝洗面する手水盥を置く、臺石として居た此塚に毎朝多くの雲衲等が痰唾を吐き棄て居たが地下の靈を侮辱したと想ふたものか、深夜になると齋藤の娘が甲冑に身を固めて多くのものを率ひて幽霊となつて出て來た相だが、其幽霊はへぼ雲衲の邪魔はせないが却て力量のある雲衲のすきを見て邪魔をするので少も油斷が出来なかつた、それで根機養成の爲みには幽霊が出て呉れるのが却て薬になつたと云ふことだ、しかし何分怪事であるから初心の雲衲等が恐ろしがるので僧堂の外は鬼哭嘯々と云ふ有様であつた、深夜に至ると妖怪が色々の邪魔をするので、隠山和尚は何汝等は道力が足らぬからそんなものにつけこまれるのだ、どれあれが夜座をやつて見せてやる、と和尚が僧堂に徹夜座禪して王三昧に入居らるゝとがたりとも云はさず何のこともないので、それ見よ何も出てこないぞ汝等の力量の足らぬからだ、と云はれたが、しかし隠山和尚がそこに夜座をやつて居られぬ夜は必ず妖怪が出て來て大衆等の邪魔をするので、和尚が一週間も引續て夜座をせられたが何にも出ぬ、そ

徹夜の座

礎石

こて隠山和尚が座禪をして居る姿の木像をこしらへて、之に和尚が開眼をして僧堂に置いてから以後は其の僧堂に何にも出ぬ様になつた、隠山和尚の徳が高かつたと云ふとが此一事でも分る、隠山の會下に告林あり告林下に雪潭があつた、此の雪潭下に凌州和尚と云ふものがあつた、此和尚は毎夜礎石に向て丁寧に經文を讀誦し回向をせられたが之は順的の方面で誠に穩和で有たか、何でも今より十四五年前の事であつたかと思ふが瑞龍寺の禪外和尚が、其向ふに見ゆる天澤僧堂を瑞龍寺へ合併せんと主張せられた所が多くの僧侶や信徒等は隠山和尚以來天澤僧堂と云ては天下に鳴り渡つてあるものを、濫りに轉移合併するのは善くなしと諫言するものが多かつたにも拘はらず、此和尚は非常な逆的な方て一旦こうと決心した事はどこへまでもやつて仕舞ふと云ふ氣風であり、且天澤も瑞龍も共に此の禪外和尚の主權の下にあつた所から、何差問があるものかと云ふて誰が何と云ふてもかまはず、轉移合併を行した所が、茲に稽事が起て來た禪外和尚は終に天澤僧堂を瑞龍寺と轉移合併したのみならず元千人塚の在た所を打こはしてしまつた、しかも例の礎石をも瑞龍僧堂の茶席の前に移してしまつた、然るに僧堂の評席即ち時の主座

が深夜に正念相續する時一寸の間油断したので齋藤嬢の亡霊の爲めにやられてあゝしまつた齋藤の娘にやられたと呼んで死んでしまつた又其次の力量ある評席も同じく齋藤の娘にとりこらされたとして居る内に師家の禪外和尚も大病となつて百日間も起つこと能はず就中三十日間斗りは實に絶食の大苦を受けた加之從來皈依して居た信徒の大部分は離れて了ひ種々の悪評が傳えられたそこで和尚も之は到底助らんと覺悟したものと見え本山の妙心寺に出養生をして居たが死にたいと口癖に云て居たが終に前田誠節が住職をして居た瑞泉庵に出て來られてそこで死なれたとだ隱山と禪外とは大分違ふ所があるだろ何にも高德な先輩がやつてゐたことを濫りに破壊するには及ばぬことだ千人塚の墓石であつたものは現今でも若し少ししても之にふれるものがあれば忽ち震について瘡病を煩ふものであるから土地のものは能く之をおそれて決して之に接近せぬ元氣のある雲衲等が其事を疑つてなにそんなことがあるものか若しあるとすれば一個の精神作用だ乃公がふれたればとて何の障りがあるものかとから見識をだして故意に其石に觸れて熱病を煩ふたものが澤山ある畑の水練的學者あり此の石を

實地に就て研究してみたがよい

淨願寺賢藏

賢藏諱は利淳、姓花園、三國町貞宗大谷派淨願寺の住職なり、父は利峯、字は軌覺といひ、著名の人也、母は武田志摩守治秀の女、師幼にして佛典を山門に學び、後智積院にて修行し、眞宗高倉學寮に在て宗乘を研鑽すると年あり、嗣講役を命ぜられ僧俗を教化し、異解者調理に其功特に多し、文政七年七月廿七日寂す、年六十二、同寺境内に墓を建つ、達加法主教王院と法號を染筆さる、之を墓に刻して別に誌を刻せず、是遺言によるものなり、三國湊新古名所記一卷、日卷誌三卷あり、尚佛書の著書數部あり

憶念寺良雄

良雄字は德母、別に金洲と號す、眞宗大派谷南條郡金粕村憶念寺の住職也、幼にして穎異、香月院深勵講師に就て佛典を學び、又京都に従ふ傍ら顯密の諸教を跋渉す、青山侯其人と爲りを愛し、其學を勵ましむ、文化四年一夜祝融毒威を逞ふし一

金粕村は美濃郡の領地也、青山侯の領地也

異解者を調理す

梵文を能す

山の伽藍を灰燼にす、同十年學成て寺に歸り、力を竭して再建し、のち輪奐の美舊に倍す。是師が學徳の力なり、爾後笈を負て其門に來り學ぶ徒多し、専ら宗風を演し、痛く邪解を排して、佛祖の眞理を述示するを以て道俗を化す。又梵文を善くし、本山の學徒就て學ぶもの多し、法主延て擬講と爲す。時に文政十一年也、老を謝して佛行房と稱す。然ども教誨怠らず、天保十年己亥の夏、淨土見聞集を講し、七月十三日結講の夕、微恙あり、其月廿日阿彌陀經を誦すること一遍、念佛しつゝ、溘然として寂す。年六十二、寺の東隅に葬る。

筆蹟

南條文雄氏藏幅



佛行房之碑

師名良雄、字德母、別號金洲、住越之憶念寺、幼而穎異、日就州之深勵師、攻其所業、又從遊京師者多年、傍涉顯密諸教、青山侯營愛其爲人、微以勵其學、文化四年之春、祝融爲祟、一山烏有、同十年學成歸寺、竭力再創、不日而成、輪奐倍舊、皆係師之力也、爾

後負笈之徒雲集其門、大演宗風、痛排邪解、述示佛祖眞教、以化道俗、又善梵文、本山學徒學梵文者多出其門、矣。文政十一年大谷大法主延爲擬講、尋謝、老稱佛行房、講讀相續、教誨無懈。天保十年己亥之一夏、講淨土見聞集、七月十三日結講之夕、忽染微疾、同月廿日阿彌陀經一遍、但心念佛、溘然而化、行年六十有二、葬于寺之東隅、師前營經藏一字、修多羅雖未具、略辨其財、頃日資界雄繼其遺志、遂具全藏、又與徒弟議建墓道碑、狀其平生、乞予銘銘曰

講讀莘莘 徒弟如雲 佛神之意 布在于文 淨土之要 易知難分 誰其分之 德母出群

天保十三年歲次壬寅秋九月

從三位祝希烈撰併書

天保十四年癸卯冬十一月

現住憶念寺資界雄建

蓮光寺大鐵

大鐵は丹生郡米浦眞宗大谷派蓮光寺の住職なり、同寺に生れ、高倉寮に學び、文政三年寮司となり、俱舍頌疏を講じ、其年擬講となる、四教儀末燈鈔を講じ、文政十二

釋門

年八月五日寂す

観音院鑱明

鑱明は武藏國秩父郡三峯山観音院の住職なり、福井に生れ姓を幾田と云、幼にして出離の志あり、始め三國眞言宗性海寺の弟子となり佛學を研鑽し、後福井神明社別當壽福院に住し、武州観音院に昇轉す、同寺は關東著名の大地也、文政七年福井神明社内に常夜燈二基を笏谷石を以て建設し、又性海寺へは御影石を以て常夜燈を建つ、一は以て我産土神を敬ひ、一は以て師恩に報ずるの冥福を祈る、何れも巨金を寄附し其利息を以て燈油料に充しむ、今に至て其壯舉を仰視せしむ、師の如きは其初を忘れざる徳義に富める人と謂つ可し、天保十年九月十五日寂す、福井浄土宗清圓寺遠譽は其母の弟たるを以て分骨墓を同寺に建て、權僧正鑱明光院觀雅大和上と彫れり、

〔常夜燈碑銘〕（福井縣社神明社境内にあり）

我國都之北郭、子位南面有國社、以祀天照皇太神、稱神明宮、密宗壽福院、祠職牧田氏也、世〇併奉焉、東至勝水、南至羽水、西至西山、里北至北里、巨室小民家、于其間者

常夜燈を寄附す

凡子生而男三十日、女三十一日、必使抱其子詣於社、禳以長無留世稱之生社、今羽水以南東北松本里、往往異其生社、雖然距都東一里餘、至今和泉村西至安居村、總二十村到、于今春秋必祀神明宮、東西村民尙爾、特松本里異之、不知何謂也、武藏州三峰山観音院現住鑱明僧正者、我北里産也、世姓幾田氏、幼而蓬髮、奉以眞言密宗、藉于我三國港性海寺、積其功臘、遂躋僧綱、至今之任、蓋天朝之制、僧正位比參議、可謂顯貴也、然後僧正之喜可知也、於是乎欲建石籠燈二基于神明宮側、遠寄書于其知友久保健、享使幹其事焉、籠燈每基高一丈五尺四寸、方跌八尺三寸、每夜點燈、欲曉世稱之常夜燈、其石工及燈油資總數十金、其燈油金二十片、屬之壽福院、而現住雄辨法印、恐久而逋負、納之寺社司署、而司署每歲頒息銀若干、以充油資、即降公券于壽福院、永以爲左驗矣、且僧正復使三國港人某、石于攝之浪華、以建二基于性海寺、先師祠堂前、其價及燈油資亦復數十金矣、無慮損金百六十有餘片、夫僧正視金素當如石矣、然十家以上產談、亦何容易、嗚乎如僧正、可謂不忘其初矣、一以報生社德、一以資先師冥福、何其厚于本能如斯也、初健亨來謀於余、乃刪潤其籠燈銘、且授楷法于其男、以中使書銘于石籠也、又健亨之言曰、僧正有母弟曰遠譽、和尙松本里清圓寺現住是也、有侄曰幾田善四郎、家于北里、二人亦既與參此事焉、遂應需以爲

記云、

常夜燈銘

本藩 蓮湖 橋本周保撰

維神之德萬方所服永載休命以介福祿繼明照闇法燈永傳神靈昭昭國家安全

文政七年甲申夏五月 武州三峯山僧正鑠明建

本藩 僧正世姪 幾田善四郎參事 久保健亨幹事

男 以 中 書

淨勝寺丹山

一切經を
對校す

順藝字は志道丹山と號す丹生郡絲生村真宗大谷派淨勝寺の住職也父を順慧と云性學を好み博識にして最も佛學に精しく夙に一切經對校の大志を起し京都に往て建仁寺所藏高麗版の大藏經に就て校合すること三回年を開すること十一年文政九年より天保七年に至る此間明藏の關たるを厯藏に就て謄寫するもの凡五百餘卷是護法の盛事にして其苦辛想ふべし丹山殊に文雅の心深く當時の大家頼山陽其他數名と熟交し我書齋を不如歸山房と稱す記文山陽の選ぶ處

なり又覺如法主の遺墨消息を模寫し之を石搨として有志に頒布せし事あり聞く覺如時代淨土真宗未だ盛ならず法主財政を慮かり一莖の筆猶よく秃するに至るを用ゆと云丹山其墨蹟をして創業時代の苦境を想ひ識らしめんとして斯秃筆書のものを印施す筆勢實に見事なり其厚志感ずるに餘あり弘化四年卒年七十三著書あり二願希決金剛般若心經續言南無者講述二門譬言御傳歎啓二種信心略説真宗行儀辯美能里乃友等あり

不如歸亭記 (淨勝寺所藏)

越前丹山師名其室曰不如歸之亭以其寺多杜鵑也師以校經數往來京畿因見余請文以記之余聞師之所住淨勝寺在州之丹生郡群山綿亘南北其最高而近者蓋古所謂丹生山師所以自號也寺踞山西麓一水帶之山水之間皆古樹老樹環抱擁壓於此亭萬綠相映蒼鬱深邃每春夏之交則不如歸之聲相答軒窓間師取而名之其有所感乎然此聲也警羈旅之人促其歸鄉也師生此鄉住此寺佛龕經庫百年不遷雖促之歸亦將安歸哉且釋之爲說幻假四大無東西無南北何爲客何爲歸則聞不如歸之聲其心未嘗有所感也而以名亭何歟吾聞比丘之求其道也一鉢一錫經涉江湖跋履雲水至羸穿足繭無所底止而問所謂一悟者或未之得焉噫是豈如歸

釋 門

而求之於己哉、丹山師蓋知之矣、吾想師之坐此亭於雲暗月淡之夜、鐘歇漏盡、燈殘香銷、一念不起、萬緣皆空、當是之時也、向之所經涉跋履而不得者、忽現於前、可觀而不可捉、可知而不可言、仰而聞不如歸之聲、其將言曰、信乎不如歸也、不如歸之名於亭、其以此歟、是爲記、

文政十二年歲在乙亥秋八月念五日 山陽外史頼襄撰并書

善玖寺法賢

開得院法賢は今立郡粟田部町眞宗出雲路派善玖寺の二男なり、性學を好み殊に法相學としては海内無雙の稱あり、雲華院大含講師云ふ法賢の法相學本宗の名物也と、嘗て吉田郡寮村勝縁寺にて義林章の講義を爲すや、期せずして會する十三ヶ國の僧侶、實に百七十六人の多きに至る、弟子中尤學者多く、能登國廣岡了榮講師亦其一人なり、中年にして越後出雲崎善乘寺に入りて、後寂す、時に嘉永四年三月二十五日なり、年七十

海内一の法相學者

唯泉寺澄玄

澄玄諱は普天香雲院と云大野町眞宗大谷派最勝寺の衆徒某寺に生る資性温厚幼にして穎悟笈を負て諸山を訪ひ大に得る所あり、性相法門最も蘊奥を極め遂に金津香月院深勵講師の門に入る、學徳日々進み出藍の譽れあり、後大津唯泉寺の住職と爲る、夙に佛堂の頽廢を歎き再建の業を起す、經營速かに成り頗ぶる輪奐の美を極む、次て經藏を設け佛書を蒐集し新に鐘樓太鼓樓及び門宇を築き更に當寺永世相續維持の方法を設く、常に高倉の學寮に在り、屢講述の筵を開く、名聲日に揚り擢られて擬講と爲る、齡方に三十有八蓋し先哲年未だ四十に滿たずして此階に昇るもの幾ど稀なり、四十九歳進んで嗣講となる、時に靈崎頓成なる者あり、異解を首唱す、澄玄哀感諄々として曉諭す、頓成屈せず却つて澄玄を怨み百方これを陥る、門生これを憤り提携して頓成の罪を訴ふ、事稍躁暴に涉る、幕府これを捕ふ、頓成及び關係の吏員數名と江戸に護送せらる、澄玄も亦與かる、寺社奉行親らこれを推鞠し澄玄應答流るゝが如し、正邪忽ち判れ頓成罪に伏す、事遂に寢み澄玄亦寺に歸る、嘉永四年八月六日病を得て歿す、享年六十有五、高山寺に葬る、明治二十年嚴如法主澄玄の勳功を追賞するに講師を以てす

宗論の爲に護送せらる

眞宗講師澄玄之墓

釋 門

香雲院講師諱普天一名澄立越前大野郡最勝寺衆徒也資性溫厚幼而穎悟甫負
 笈遍訪諸山碩學大有所得性相法門最極蘊奧遂入香月院講師之門淬勵刻苦學
 德日進有出藍之譽焉及爲大津唯泉寺住職夙歎佛堂頽廢起再建之業經營速成
 頗極輪奐之美次設經藏蒐集佛籍後新築洪鐘堂太鼓樓及門宇更設當寺永世相
 續維持之方法常在高倉學寮屢開講述之筵名聲日揚擢拜擬講齡方三十有八蓋
 先哲年未滿四十而昇此階者幾希又善教細素渴仰四十九歲進爲嗣講時有靈崎
 頓成者首唱異解師獨哀感諄諄曉諭頓成不屈却怨師百方陷之門生憤之提携訴
 頓成之罪事稍涉躁暴幕府捕之與頓成及關係吏員數名護送江戶師亦與焉寺社
 奉行親推鞠之師應答如流正邪忽判頓成伏罪事遂寢矣師亦歸寺嘉永四年八月
 六日得病終歿享年六十有五葬之於高山寺師之弟子數百名拜講職者五名也明
 治廿年嚴如法主追賞師功勳以講師嗣子義天與余親善頃者囑余墓表先考嗣
 講爲師之門生則於余猶和上荷恩不淺余雖不敏豈得敢辭乃略叙其事蹟如此銘
 曰

辨才無碍 萬卷胸充 深矣義海 高矣德風 關邪論安正道 法城中大英
 雄

明治二十六年十一月權大贊教大谷勝尊篆額 一等勸令使不二門諦觀撰

文書科員榴堂東南家實書

圓藏寺濟忍

圓琳字は濟忍坂井郡宿浦眞宗大谷派圓藏寺に生る人と爲り敦厚易直にして人
 と戻ることを好まず幼より學を好み香月院深勵講師に従ふて大小乗の佛典を
 研究す文化九年二十六にして始て自他宗部若干種を講ず弘化四年淨土見聞集
 を貫練堂に講ず聽者頗る多し同五年秋病に罹り在苜日を度る然れども仍能く
 講說怠らず嘉永六年四月十三日寂す年六十七聞香院と諡す寺後に葬る徒弟等
 碑を建つ

大谷擬講琳師碑銘

師諱圓琳字濟忍爲人敦厚易直不好與人戾幼而好學從游香月院龜洲講師研究
 大小乗文化壬申師年二十六始聚徒講自他宗部若干種弘化丁未師年六十一蒙
 法主命爲擬講師嘉永辛亥秋允命講淨土見聞集於貫練堂聽徒頗夥同五年秋
 師罹疾在苜度日然仍能講說不解及翌春病勢漸劇遂不起實嘉永癸丑四月十三

貫練堂に
 碑を建つ

日也、距生天明七年七月八日、得壽六十七、諡曰聞香院、葬於寺後先塋之次、嗚呼哀哉、遂勒貞珉、係以銘曰、

嗟惟琳師 令德易良 猶玉在璞 溫溫厥光 闡幽顯微 緇流提綱 解迷拯溺 愚俗津梁 其人雖逝 其德孔彰 圓藏之阜 松柏鬱蒼 勿剪勿伐 幽魂所藏 徒弟等建

智教寺謙壽

謙壽は三國町眞宗大谷派智教寺廿一代の住職なり、福井淨慶寺に生る、性温良にして慈仁廣大なり、壯年比叡山に登り、當時八宗唯一の大學匠安樂院の大和尚惠徵律師に隨從し、俱舍唯識華嚴天台等の講學研究すること實に十箇年なり、而立の頃降山して浪華に學林を開き破塵觀と號し、法華經等を講授すること又十餘年、隨聽の衆稱數十輩あり、其名遠近に轟ろき、緇素悉く服從す、然に當寺壇家の切なる懇願に依り天保八年入寺法燈を繼ぐ、爾來二十年、全く名利情欲を脱却して俗界に超然たり、故に凡庸の徒には其真相を知り難かりしも、識者は皆高德を崇仰せりと、終に安政三年三月十二日五十有八歳にて入寂す

親勝院縁起書

筆蹟

木津祐桓氏藏幅寫

本覺寺覺嚴

覺嚴一名本證と云、福井市眞宗本願寺派本覺寺の住職たり、篤學にして最も佛典に精しく、遂に勸學職の學階を本山より授かり且顯眞院の名を與らる、齡古稀に及びて法主より鳩杖を賜はる、文久二年寂す、年七十八

〔藥屋文集〕

本覺寺老院の六條殿より鳩杖の賜もの受られたるに

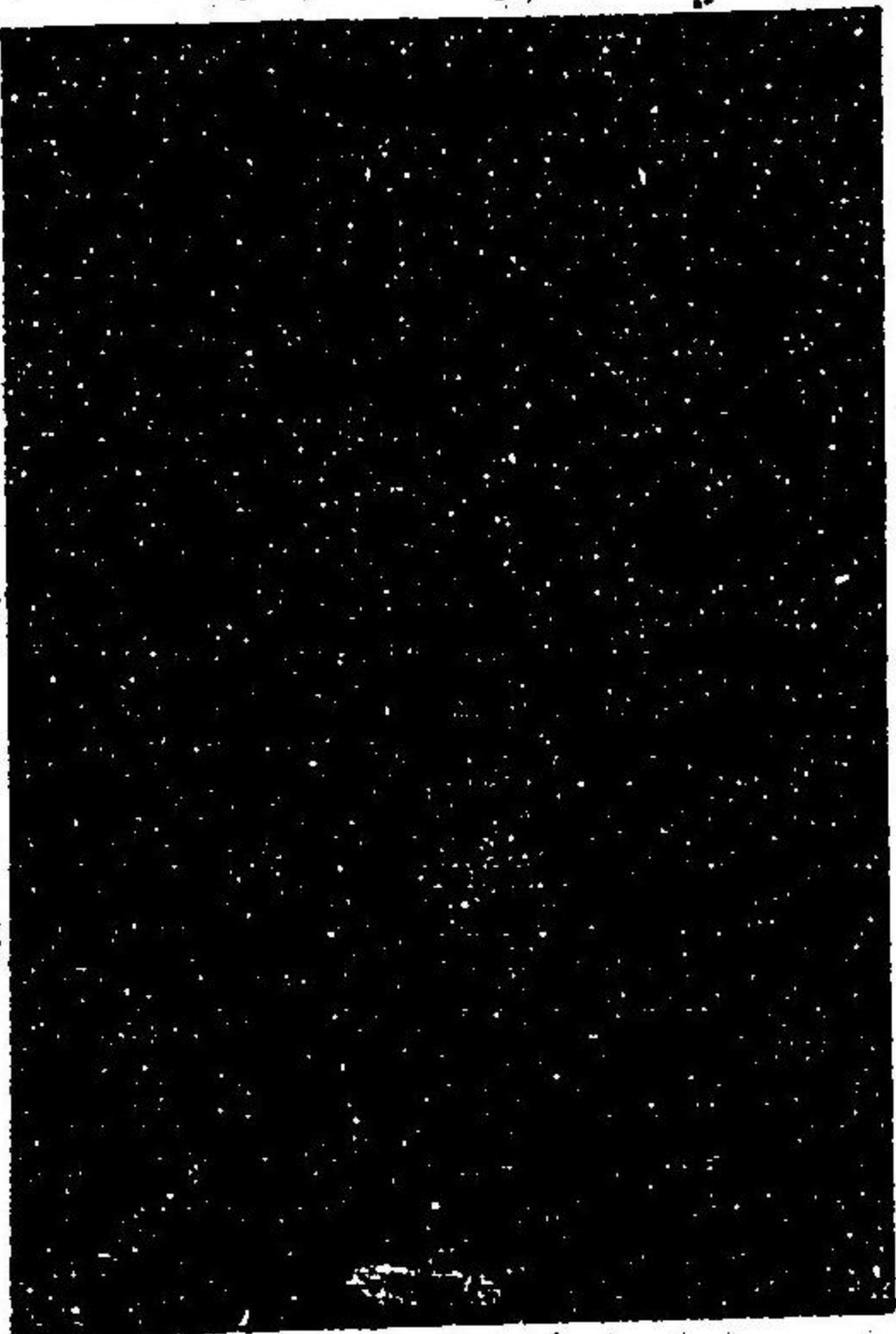
本覺寺顯眞院君は、學行すぐれ給ひて、世に有かたき大徳になんおはしける、年ころ御病に惱み給へれと、御心強におはして、朝暮の御勤は更なり、説經して人みちひき給ふ事は、た撓み給はず、今年御齡七十七になんおはしける、みな月ばかり也けり、六條御殿より鳩の杖賜はらせたりけり、かく高き御齡を累ね給つしも、法務堅固におはしますを、褒め給ひてなりけり、顯眞院君いとたふとさきことにおぼして、此賜物永く寺の寶とせせまほしき、所由一わたり記しかかれぬは、さうたし

鳩杖の記

さむさなり、たよりよからんやうに、之に物しぐれよとの給へるにより、有しやうをかいつみてなん、後の寺務知給はん院主君達、此賜物を世々に傳へもてあかまひはた我心行ならひねとの、下の御心自らうちこもりてあるらむとぞ、
文久元年酉夏 曙 覽

瀧谷寺道雅

道雅諱は憲意、笑溪と號す別に支願子の號あり、京都六角通田邑氏に生る、三國町眞言宗瀧谷寺四十三世の法嗣たり、初め東都淺草大護院道本を師とし佛典を學



道雅法印肖像
瀧谷寺藏幅

慷慨家と
交る

ぶ博識にしてしかも時弊を慷慨し、愛國の志深く、故に天下の志士來て謁を請ひ時事を談ずる者妙からず、又詩文を好くし書に活氣あり、慶應元年乙丑十二月二日寂す、年五十四、其病革むるや端然として筆を採り偈を書す、混沌生我我稟而保之、混沌老我我佚而待之、混沌病我我俯而附之、混沌死我我炭而歸之、五十餘年梁一炊、邯鄲驛裏夢醒時、と墓は同寺内に在り、

〔道雅上人文集〕 寫本

佐久間修理

笑

溪

自古忠奸難辨、亡論漢晉唐宋、其人不可勝數、而其最者、爲晉王衍、宋王安石兩人焉、王衍好清言、晉室漸微、安石創新法、宋祚遷徙、凡茲兩人者、非是亂天下、而天下之亂、由此而興、其罪又甚焉、宋蘇洵謂安石、爲王衍盧杞合爲一人、則予於佐久間修理亦謂之、夫修理出於侯藩儒臣、以經學說於卿大夫之間、其跡似有道者、然心術之險、行業之諛、開航之議、實爲之倡主、廊廟不察、成其大慝、殆令吾東方舉而奉之、醜夷萬延、斬奸之役、修理躬不死于彼、而死于此、不可言不晚、縱令修理躬不死于此、後來天下之亂、又未可測焉、天之不厭王德、借手一藩、莖巨害於未萌、鉄鉞之誅、其所自取、且晋不殺王衍、而五胡之難、發端劉石、宋不誅安石、而章惇呂惠卿輩、朋黨比周、釀天下大

辱所謂非亂天下而天下之亂由此而興焉方今天下之勢似矣縱令廊廟有賢有能誅之萬延斬奸之後元治京師之災亦不至如此甚焉若夫開港一唱幕政弛紐王命不令諸侯屢叛千容萬態至狂賊犯闕無辜嬰禍而極矣履霜堅冰君子所慎若夫賀陽踐祚翠華南狩湖東遷都洛陽變野果其說之行晉東宋南羯狗衣冠邦國之熄不徒洛陽銅駝之歎是其所未可測焉其王衍盧杞合爲一人修理之罪出于安石所不及焉而天下之惡皆歸之予識修理於二十年前豺目狼聲紫石射人今年六十皓首遇害寔可憫嗟乎自古忠奸難辨後之治天下者可不慎乎哉。

黃樂

竹樹陰陰雜落紅。洞門深鎖夏安中。明衣故認僧儀肅。華寺還看殿造工。鼓響樓臺茗戰日。香吹薜蔔飯齋風。即今欲問迎閩粵。航海傳燈到幾公。

夜不寐

夜不寐兮起彷徨。流螢熠熠照草堂。乾坤風收萬籟寂。星爛河旋月沒光。噫吾嘗轉世途累。是非非尙未忘。豺狼橫道龍在野。夜不寐兮起彷徨。

飛雲閣

飛雲樓閣倚斜陽。臺壁還存燦爛光。一自豪華歸釋種。無人詭說古猿王。

賴山陽

不與諸儒競短修。先鞭祖述見才優。翩翩修得遷班業。簾捲水明山紫樓。

梁星巖

頃聞瀕海虜塵紛。高臥梁翁獨出群。籌策滿胸無所試。一場風月託爲文。

張紅蘭

織織素手繡鴛鴦。且把兵書入翠房。連枕共談燒賊策。白頭相配老周郎。

咏紫陽花

繁影重重掩竹關。粧成最好夕陽顏。裁風正訝衣裳楚。泣露偏看涕淚潸。偶有裸蟬來綴翼。試教貧女去簪鬟。翻同九五大人事。彪變青黃頃刻間。

長歎息

長歎息兮時不利。忠臣遭戮婦人專。豺狼橫道借寇器。長歎息兮無所歸。渴飲潁川之水。飢采首陽之薇。長歎息兮復已矣。從赤松子之遊。追魯仲連之死。有酒有酒醉且狂。我歸于無何有之鄉。聖人不出狩獲麟。我歸于東海之濱。

記事

邦家失政職通商。豈料藩臣歛廟堂。吳淞有名誅晁錯。漢高無策問張良。身甘國討千